# 岳山

第四十年
第三號

# 山岳

第十四年第三號　大正九年七月發行

## 目次


吉野川水源地大臺ヶ原山北麓　宮田琴治……一頁
黑部の秋　廣瀨壽雄……二〇
高處の氣象現象に就て　理學博士　藤原咲平……五〇


## 圖版


○大臺ヶ原山巔牛石ヶ原○同山中中ノ瀑○同山巔正木ヶ原……對頁一六
○刈田岳頂上より御釜を望む(左端熊野岳の一部、右端中央火口丘五色岳)○五月の御前岳(屏風より)○御前岳賽の磧上部の一溪より水引入道を望む……五六
○會津駒ヶ岳中腹より望める燧ヶ岳○同上稍上部より燧ヶ岳、大津岐峠、景鶴山(?)を望む○駒ヶ岳中腹より同山の一支峰を望む……八〇

## 雜錄

○仙臺附近の山々（沼井鐵太郎）○燒山より丹澤山塊縱走（松本善二）○會津駒ケ岳（戸澤英一）○岩菅山に關する一二件（辻本滿丸）

## 登山案內者

○奈川口登山案內者組合規約

## 山岳圖書批評

○登山必携山嶽めぐり

## 雜報

○今年は岳に雪が少ない○燒山噴煙○高瀨川の水色變ず○白骨溫泉震災○有明口及奈川口の人夫賃と物價○登高行○會員通信

## 會報

○團體の入會に關する規定○會員章の引換に就て○會費拂込に就て○第八回小集會記事○會務報告○會員名簿の訂正及追加○退會者○死亡○會籍削除○無効會員章番號○交換及寄贈圖書○本會規則抜萃○投稿規定○第十回小集會豫告

## 英文欄

卷末附錄として英文欄を添へたり

# 吉野川水源地大臺ヶ原山北麓

宮田琴治

一、端がき　二、吉野群峯　三、大臺ヶ原山　四、大臺ヶ原山と氣象　五、大臺ヶ原山と吉野川　六、大臺ヶ原山道
七、大臺ヶ原山北麓の地理　八、地質と地形　九、地名　一〇、瀑布　一一、山脈　一二、特殊植物と珍植物　一
三、動物　一四、温泉　一五、氣象　一六、出水の狀況　一七、大臺ヶ原山の正路と間道　一八、登山案内

## 一、端がき

陽春花の四月になると京阪神の觀櫻客は、小さい吉野鐵道車内に壓搾されながら運ばれて、吉野驛で吐き出される。來る列車も來る列車も同じ樣にして、朝も晝も引き切りなしに四月の半を過ると、其の頃から聖鈴の響微かに、葉櫻蔭を續く白衣の道者が秋まで毎日送り出される。彼の花の客は口吉野の里巷の迎ふる客であつて、此の白衣の人は奥吉野の靈岳が迎へる客である。そして是等に混つて、春と云はず秋と云はず、三々五々史を研き花を尋ね山を訪づるゝ客が吉野驛を賑はしてゐる。是等の客を等しく印象せしむるものは、車坂續きの丘陵を上つてトンネルを出ると、窓外に展開する吉野川である。吉野驛に吐き出されて、直に山と山との間に一ぱひに擴がつた吉野川を見た時には、最強き印象を與へられることゝ思ふ。本年からは花の客も山上岳の道者も、驛頭に架せられたボウストリング式五段虹形の三吉野橋によつて、一層その印象を強められることであらう。而かも此邊の川原を見る時に、水は清冽で礫は美くしく磨かれ、白く青く赤く黒く灰色に、或は滑らかに或は粗く、火山岩に水成岩に餘程多趣多樣に渉つてゐるのに係らず、附近の連丘は洪積段丘をなしたり、三株層千

枚岩系に屬したりして、此の川原とは全然別個の地質から成つてゐることに想到するならば、一層興味が起るであらうと思ふ。「よしのにて櫻見せうぞ檜笠」（芭蕉）の檜よりも、花見になくてはならぬ芳醇な灘、伊丹の酒に關係多き吉野杉を想うて來る人があれば、先づ痩山の松林に一驚する樣に、南無アイダーヤの山上ヶ岳を想うて來る客には、餘りに平凡な山國であると感ぜらるゝ程、附近と吉野川原の砂礫とは、緣が遠く出來てゐる。それ丈け吉野の奥は多樣であり深遠であるから、余は少しく其の水源地を紹介して見度いと思ふ。

## 二、吉野群峰

「山岳」第二年第一號に白井理學博士によつて紹介せられ、故木本光三郎氏の吉野群峯によつて一段精細に傳へられ、尙且時折本誌にも紀行文を掲載せらるゝ吉野群峯は、今や史蹟名勝天然紀念物保存協會によつて、漸く著しくなり始めて來た。其の主なる點は高山なるが故ではなくて、深山幽谿塵外の淨域と云ふ爲めである。何所も深山に有り勝ちなことながら、古い文化の中心たる和州に在つて、尙陸地測量部の地圖が出るまでは、其の名稱や位置さへ不判明で、其の高さの如きも頗る曖昧であつたのである。今は是等のことが瞭然としたけれども、天武帝の白鳳年間以來、登岳の客絶えぬ奥吉野としては、餘りに世上に現はれてゐないが、それ丈け深山幽谷であり開放的ではなかつた。さればこそ關西の日光として、幾多の珍奇な植物をも藏し、異風奇俗をも存してゐる。實際奥吉野は其の高く突き出た群峯の雄偉よりも、其の間に介在する溪谷、若しくは是等によつて哺まれてゐる動植物や、吾等の遠き祖先の遺し來つた藝術或は習俗によつて權威を有つてゐる。而して此の漸く聞えんとする吉野群峯は、紀和半島の脊梁を作つて、南北に長く走つてゐる。此の長大な脊梁を中央に有し、四方亦別に山嶺を以て圍まれ、宛も長方形の箱の如く形作られてゐるものは吉野であつて、大和の南半七

割を占めてゐる。畝傍・橿原・當麻・三輪・長谷などの大和名所を含む大和平野は、僅に殘る三割餘の土地の半にも足らぬから、廣く知られてゐる大和と云ふは、實際小さな部分であつて、大和の西北隅の一部に過ぎない。

大和平野と吉野とを南北に界するために、龍門山脈が東西に走つて、高取山・龍門岳・日張山などがあつて、東方伊勢の國境に突兀としたピラミッド狀の高見山で終つてゐる。此の高見山から源を發して、龍門山脈に平行して西走してゐるのが吉野川で、此の溪谷は亦吉野群峯の北端を遮ぎつてゐる。吉野群峯は此の河畔から起つて、大體に十字形の山脈を作り、其の縱線は有名な吉野山を發端とし、南に向つて急に標高を增し、四寸岩山・大天井・大峯山上ケ岳・小笹岳・大普見山・國見山・行者歸を經て、彌山となり、茲に吉野の中心で且群峯の中心を作り、標高も亦最高を示し、佛經岳・佛生岳・七面山等の巨塊を聳立せしめ、更に南に走つて、釋迦岳・大日岳・天狗岳・地藏峠・笠捨山に及び、少しく西に折れて、玉置山から遠く餘脚を十津川・北山川の合流點に下し、國境と共に低夷してゐる。此の間約四十里であるが、大天井から行者歸に至る間は、山溪殊に險峻を極め、支脈兩側に百出し、懸崖峻谷眞に秩父層の特色を遺憾なく發揮してゐる。

橫線は稍北部に偏し、西に走るものは大天井より起り、東に走るものは大普見山より起りて、各東西國境の山脈に結合し、縱線の兩端が各川畔に陵夷してゐるのと趣を異にし、西の方紀州に接するものは高野山となり、東の方伊勢に接するものは大臺ケ原山となり、共にその頂上に平坦の領域を有し、欝葱たる針葉樹林を以て蔽はれ、亦共に名山となつてゐるのも面白い對象である。

斯くして四個の區域に分たれた吉野は、西南のものを十津川溪谷、東南のものを北山溪谷とし、東北と西北とのものを吉野川の本流溪谷と支流丹生川溪谷とする。そして山上岳から大普見山に至る附近の溪谷は、吉野群峯中の深幽な深谷である。然るに吉野川流域は夙に植林事業が開けて、比較的幽

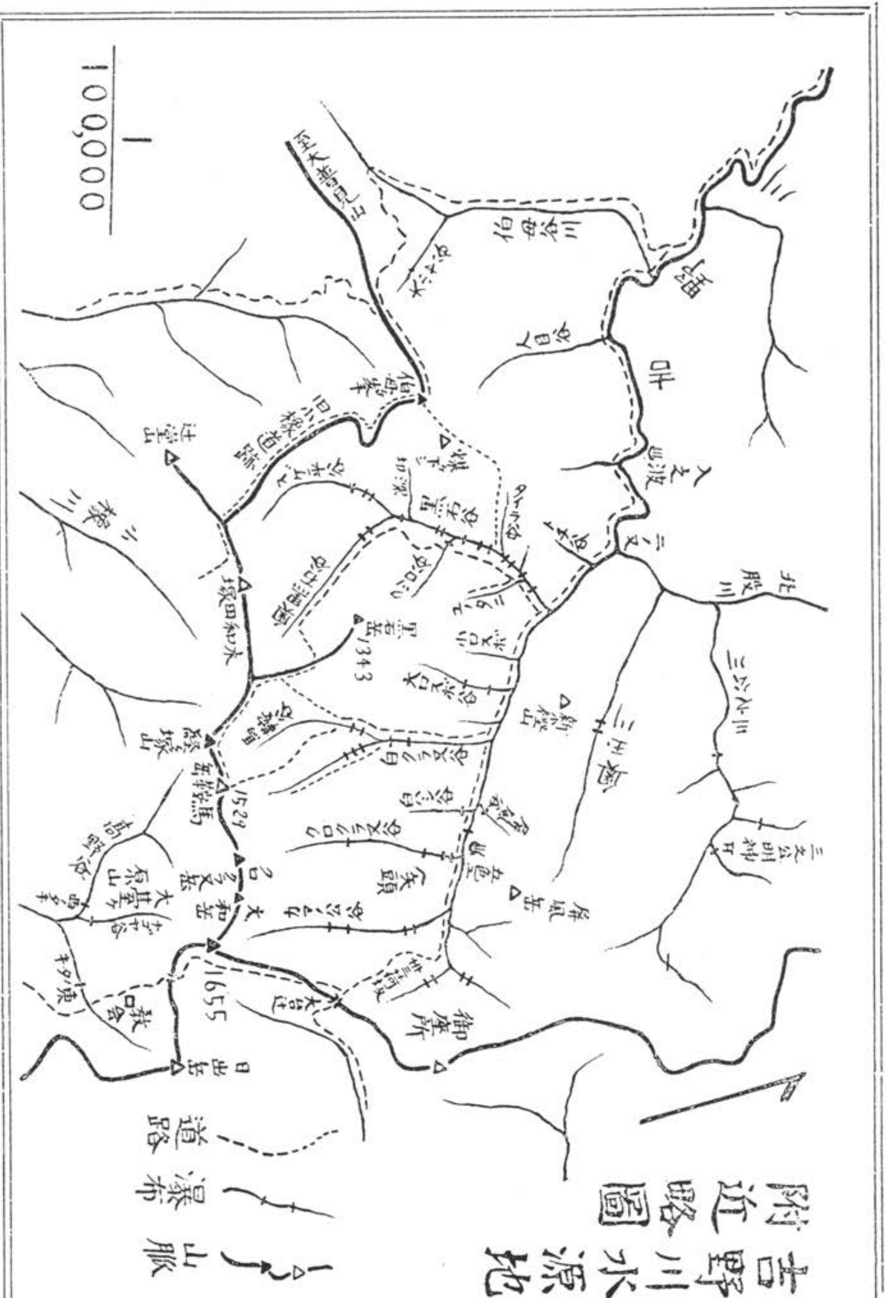
谷の感を淡くしてゐるけれども、他の方面はなか〳〵深山の相をなしてゐる。

## 三、大臺ヶ原山

吉野中央山系の大普見山より東に走り、伯母ヶ岳・木和田塚・經ヶ塚・大和岳を經て、遙かに熊野灘を睥睨し、脚下に伊勢の宮川を走らすものは大臺ヶ原山である。近時高層氣象觀測所を設け、又は一大山岳遊園地を開かんなどゝの計畫のある山であつて、高さ一六九五・三米突、全部秩父古生層の硬砂岩と角岩とから出來て、其の頂に名の示すが如き臺地がある。

併し登つて見ると決して臺地ではない。唯傾斜の度が著しく緩漫で、此の邊の山に比較して臺地と云ふに過ぎない。寧ろ此山の特徴とする所は、今は大部分伐つたけれども、其の頂を蔽ふてゐる針葉樹の處女林と、西南方に在る北山川の一支流東ノ川の大深谷の大觀である。世人はよく東方日出ヶ岳の熊野灘を眺めた壯觀や、殊に日出の光景を云爲するけれども、寧ろ大觀として見るべきは、西方東ノ川の水源溪谷を隔てゝ、遙に吉野群峯を望む所の夕映である。それと今一つ晩夏初秋の候に、疎らに枯れた處女林の梢を越えて、濛靄たる熊野灘の海氣の湧き上る光景である。併し何れを何れとしても、東ノ川の大深谷を大蛇倉の岩頭に立つて俯觀する時、右に當つて中の瀧・西の瀧を望見し、正面千丈の斷崖を隔てゝ、對岸一帶蜿蜒たる雜木林を越え、遠く紫藍に彩られた吉野群峯を望むの壯觀は、全く大臺ヶ原山の絶景と云はなくてはならぬ。就中驟雨一過して、亂雲模の梢を奔騰し、谷からも谷からも濛々たる水蒸氣の湧き立つ間に、夕陽雲を染め霧を彩る大景は、大臺ヶ原山の他の總べてに値する以上の光景である。

此の山は明治二年京都興正寺より高野谷三町四方の開拓を試みてから以來、明治二十年の前後に於ける松浦武四郎氏の開發畫策となり、更に明治二十五年六月二十五日の初登山以來、古川嵩氏の籠居




○吉野川水源地大臺ヶ原山北麓　宮田

開發に基く努力已に三十年の久しきに亘り、今は大臺教會の如き宏大なる殿堂も建立せられて、登山者は曾に宿泊の不便を感じないのみか、衣食に就ても何等の不自由を感じない。余の如きは山間都邑生活に於て難しとする海魚や川魚を、山上に於て惜氣もなく玩味することが屢あつた。是れ熊野灘の近きと、北山川や吉野川や、或は宮川の上流を有してゐるが爲めである。

## 四、大臺ヶ原山と氣象

大臺ヶ原山は、昔は山上に一大湖水があると誤解せられ、今尚近郷の人々に信じられてゐる程、洪水と風向とに關係を有し、或る風には宮川を汎濫せしめ、或る風には吉野川に、或る時は北山川に洪水を來さしむるのである。此の誤解の原因は後に說くとして、此等三川の流域に關係あることは、此の山が此等三川の水源地をなすので、宛も山上ヶ岳山彙が北山川・十津川及び吉野川の三大源泉となつたり、高野山が亦附近各川の水源となつたりすると同じ樣である。そして大臺ヶ原山はその北角三津河落岳に於て、全く三川の集合突點をなしてゐる。

## 五、大臺ヶ原山と吉野川

三津河落(サンツカウチ)岳は東南日出ヶ岳と相對して、東に深く伊勢宮川の水源谷を抱き、西南廣々とした針葉樹の中に、北山川の斜面を控へ、そして北方一帶深く險しき吉野川の水源溪谷を有してゐる。

吉野川は此所に本流鎌ノ公谷を發し、御座所谷を合せ、西北に流れて五里餘、川上村入之波部落で伯母谷を合し、稍北流して七里、新子(アタラシ)で伊勢國境高見山から發する小川(テガハ)を加へ、西に轉向して遠く二十餘里、紀伊の和歌山に流れてゐる。此の小川を合するまでの間が深谷で、西に大普見山・龍ヶ岳・山上ヶ岳・勝負塚・大天井の峻峰を峭立せしめ、東に白髮岳・白矢岳の高峰を有し、此の間澤山の支脈を

聳立せしめてゐる。

## 六、大臺ヶ原山道

此の長い深い峽谷が地理的に大臺ヶ原山の主要な通路となつてゐる。近來峰續きに吉野山から山上ヶ岳へ登る千年來の習慣に倣つて、山上ヶ岳から大臺ヶ原山に通ずる尾根に道路を開かうとの計畫があるが、是れは單に山岳の絶巓のみを歩くのには好都合かも知れないが、割合に單調平凡であり、且つ單に山上ヶ岳の如くに大臺ヶ原山へも道者を引きつけやうとする大臺ヶ原山側の便益たるに過ぎない。今日でも吉野群峰を跋渉した者は、釋迦岳から前鬼（ゼンキ）・白川又谷へ下つて、河合から小橡谷を大臺ヶ原山へ登り、三津河落の胸部から吉野川流域へ下るか、或は吉野川流域を登つて、尾鷲と云ふ熊野灘の海岸に下るより外に致方ない。

然るに此の邊の溪谷は、大部分秩父古生層中の角岩・硬砂岩帶に屬して、懸崖飛瀑殆んど登攀不可能の場所が多いと同時に、奇峯峻岳蓊鬱たる針葉樹と共に頗る絶景に富んでゐる。而かも地層の關係上、最も峻谷な北山川の方面のみは、大臺ヶ原山から觀望せられるが、宮川方面と吉野川方面とは、全く觀望が出來ない上に、層向に並行した極めて單調な所を通過するのであるから、余は少しく此の方面の溪山の詳細を紹介して見度いと思ふ。殊に關西の日光であると植物上のみから說かれたり、僅に大臺ヶ原山の三個の瀑布位によつて日光五十四瀑に比較するのでは、餘りに吉野の爲めに遺憾である。

## 七、大臺ヶ原山北麓の地理

大臺ヶ原山は東經百三十六度六分北緯三十四度十分の地點に在つて、伊勢と大和とに跨つてゐて、其の西北角三津河落岳から吉野群峯の山上ヶ岳へ續く大尾根には、大和岳・馬鞍岳・經ヶ塚・木和田塚・

伯母ヶ峯などを崛起して、大普見山に結合してゐる。余が北麓と稱するのは、此の伯母ヶ峰に至る約三里の間で、尙大普見山に續く一帶並に吉野川の川上村峽谷の一部をも之に加へて置くのであるが、主として人に知られないで、且多くの隱れたる或物を有する三里の間の北方溪谷を云ふのである。

此の斜面を流下する谷川は、三津河落岳から發する鎌ノ公谷を初とし、大和岳からの黒倉又谷、馬鞍岳及經ヶ塚からの白倉又谷、木和田塚からの黒石谷、伯母峯からの橡谷・人目谷を主要なものとし、更に、黒石谷・白倉又谷の間の黒石岳から發する大口須保（クチスボ）及小口須保（コクチスボ）兩谷・湯ノ谷・口入（クツロ）谷の小溪、並に鎌ノ公谷の東方伊勢の國境御座所から發する御座所谷・三ノ公谷・奥玉谷と云ふのがある。是等の溪谷は本流と奥玉と三ノ公谷とが、東から出て西に流れるのを除いては、悉く南から出て北に流れてゐる。

## 八、地質と地形

此邊一帶の地質は、前にも述べた通り秩父古生層の硬砂岩帶及角岩帶で、東西の層向を有し、北方に傾斜したもので、就中角岩帶には、岩層に沿ふて廣大なる滑落面があつて、深い缺隙や鏡石の狀態を作つてゐる。それに多くの溪谷が此の層向を横斷して北方に流れてゐるから、驚くべく險阻な溪谷を作り、大瀑布が何れの谷にも階段的に連續して壯觀を極めてゐる。そして本流の南岸は、一般に四十度以上の斜面を有つて、標高一千尺前後の谷から、四千尺以上四千七百尺までの斜面を作つてゐるに反して、北岸は殆んど直立して、二千尺位の屏風を建てたやうな狀態を作つてゐる。であるから其の顯著な部分には、屏風谷・屏風岳などの屏風に因んだ地名さへ付せられてゐる。大臺ヶ原山へ登るには、此の屏風の裾を東西に通るから、屏風谷や屏風岳は仰望することが出來るが、南方の連嶺は容易に見ることが出來ない。

## 九、地名

此地方は流石に人臭い大和の内でも、久しく顧みられなかつた所だけあつて、殆んど地名が附せられて無い。僅に大きな區域に茫漠とした地名が付けられてあるばかりであるから、村落附近は非常に小さな字があるに反して、何百の谷にさへ何等の名稱も付せられず、辛くも前揭の大谷川のみ名稱を有してゐるに過ぎない。從つて其の山頂や瀑布や岩角に無名の者が頗る多い。否寧ろ無名のものばかと云つても差支ない程である。

## 一〇、瀑布

五十四瀑を以て有名な日光の奥を未だ知らない余には、日光と比較することは六かしいけれども、假に大臺ヶ原山の東・中・西の三大瀑布を以て之れに對しやうとするものには、余は黒石谷一谷に存する瀑布だけでも之に附け加へよと云ひ度い。此谷は長さ二里半程の谷であるが、三十有餘の瀑布があり、小さいものを數へたならば、五十を越すであらう。就中大きなものは、石ノ塔の瀑で二百八十五尺ある。少しく岩角が突出して一寸三段になつてゐる。水量と高さとに於て此の方面の第一である。

次は二里に近き白倉又谷である。此谷にも二十や三十の瀑布があつて、杉の本の七釜の瀑や冷水の五重の瀑などは百尺に餘り、水量も黒石谷の石の塔に讓らぬ。之に亞ぐものが鎌ノ出谷で次が黒倉又谷である。三十尺や五十尺以上のものを數へ立てれば、是亦何十と云ふ程ある。

次に御座所谷に入つても、伊勢の國境に近い所に大きな瀑がある。併し是等黒倉又・鎌ノ公・御座所の各谷は、到底普通の登山者の入ることの出來ない幽谷であつて、久しく此方面の森林を所有してゐる人々でも、殆んど入つたことがないのみか、獵師すら此方面は溪谷を歩いたことが少ないのである。

本流筋では僅に大臺ヶ山道の通ずる谷に大口須保瀑と白橋瀑と屏風瀑と黒倉又入口の瀑と鎌ノ公口のものとより外は目に觸れない。尤も途中到る所の懸谷に名もなき小さい瀑の垂れてゐることは此の數の外である。奥玉の谷には本流に魚止の瀑と石ノ塔の瀑とあるのみであるが、層向を横斷してゐる小谷の懸谷には、幾つもの瀑がある。三ノ公谷は流域も長く區域も廣いから、多くの瀑が各谷に在ることは、踏査した人の話であるが、直接大臺ヶ原山麓でないのと、未だ余は踏査したことが無い爲めに此所に記することが出來ない。

其外橡谷・人目谷などにも隨分瀑が多いが、未だ一般の登山者が觀望に赴く便宜な道を有してゐない。

以上の地勢と狀況とから推して、余は宮川の上流水源地内にも多くの瀑布があるものと認めてゐる。（「山岳」第七年第三號附錄宮川水源泝行大臺ヶ原山登山記參照）斯う云ふ有樣であるから、特に瀑布の研究者には、隨分面白き多くの資料を供することゝ思ふ。

尚ほ二里餘の川下なる柏木の近くには鐘乳洞の中に水量の豐富な瀑布が、闇から闇へと流れ落ちてゐるから、益好資料であらうと思ふ。

## 一一、山　脈

此地方の山嶺を踏査する人の爲めには適當な道がある。それは吉野川と北山川との流域を南北に縱貫してゐる東熊野街道である。此の縣道は院線關西本線王寺驛から岐れた五條和歌山線の吉野口驛から分岐した吉野鐵道の終點吉野驛から東へ二里弱の吉野川畔の宮瀧から起つて、八里程の地點で兩大川の分水嶺伯母峰峠を越してゐるから、此の峠から東へ縱走すればよい。

今は森林經營上の道もある。所々不通の所があるけれども、此の縱走線は往古の北山越であつて、

今でも深い落葉の下に苔むした丈餘の石垣の殘つてゐる個所がある。之れを辿つて行く時には、暫くは左に人目谷を瞰下し、程なく石楠花原に伯母峯の絶巓煤ケ下シの三角點に出ると、北に平谷（タヒラダニ）、南に深切（フカギレ）の谷を控へ、東一帶黒石谷や、又は之れを越えて本流々域、或は遠く伊勢の山々を眺める。其所から少しく南方に曲つて嶺は一段低くなり、深切谷と北山川方面の鞍部を越すと、一度菅（スゲ）平谷の界の突角に登り、其所から亦少しく下り、辻堂山の東肩に合して稍東に向ひ、菅ノ平谷（黒石谷の支谷）水源地に至り、急に登つて木和田塚の三角點となる。此所に登ると東方黒石谷の水源溪谷を隔てゝ、手を伸せば届きそうな黒石岳を眺める。此三角點は此附近での大きな眺望を有してゐるが、いつか火が入つたものか、椈が多くて視界を遮つてゐる。此所から十町餘で白倉又谷の流域に出ると、一帶の杉檜の植栽地となつてゐるから、比較的展望はよいが、南西一帶は椈の大森林で、充分に眺望を恣にすることが出來ない。

經ヶ塚は慶長十七年西上人が伯母峯を通り大臺ヶ原山へ登る時、惡魔を封じて經を埋めたとか云ふので、標石が建つてゐる。此の邊から南一帶はもう大臺ヶ原山の原狀（ハラ）をなした部分である。但し千古の椈林が欝葱としてゐる。馬鞍岳の三角點に登ると、北方一帶は白倉又谷であるけれど、西に馬鞍谷、東に白倉又谷と岐れてゐる。

木和田塚・黒石岳から秋十月・十一月の頃の朝は、微に富士を望むことが出來る。截頭三角形の單山と、少しく左に波狀の連山を見るのは、富士と赤石山系であらう。又右に少しく離れて小瘤を見るのは天城であらふ。そして是等を認め得るのは極めて清澄の朝九時頃までゞある。

馬鞍岳から少しく登降して、黒倉又谷の流域に出ると、地勢急に隆起して、椈の林も高山の相を帶び、大和岳となり、殆んど等高の連脈を以て鎌ノ公谷の線を縫ひつゝ、三津河落岳に達してゐる。三津河落から北の方伊勢の國境は、急に低下して三千尺から四千尺の間を上下し、特に名を付ける程の

山もない。以上の山脈の諸山を列記して見ると、左表の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 三津河落岳 | 五、四六二尺 | 大和岳 | 五、三六三尺 |
| 馬鞍岳 | 五、〇四七尺 | 經ヶ塚山 | 五、〇二〇尺 |
| 木和田塚 | 四、八〇四尺 | 辻堂山 | 四、三二〇尺 |
| 伯母ヶ峯 | 四、一八一尺 | 伯母ヶ峯峠 | 三、二七〇尺 |
| 大普見山 | 五、八七五尺 | 黒石岳 | 四、四三二尺 |
| 伊勢國境方面 | | | |
| 御座所 | 四、一二六尺 | 屏風岳 | 三、四九五尺 |

## 一二、特殊植物と珍植物

大臺ヶ原山は近年まで、其東半は眞黒な針葉樹の密林であつて、西半稍低い部分は闊葉樹の處女林であつた。同樣に山麓各方面も概ね處女林であつて、高き懸崖とそゝり立つ峻峯とは、是非とも此の針葉樹林の壯觀を有することを必要とする。そして山岳の特性として、地勢緩斜で肥沃な所は、闊葉樹が多い。而かも此方面の針葉樹は其の種類極めて少く、僅々十種に過ぎないで、分布高度は左表の通りである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 檜 | 最低地より絶頂迄 | イチヰ | 五千尺以上絶頂迄 |
| 唐檜 | 五千二百尺以上絶頂迄 | ビヤクシン | 同上 |
| 栂 | 千尺以上絶頂迄 | 高野槇 | 同上 |
| トガサワラ | 千尺以上四千尺迄 | 五葉松 | 二千尺以上四千尺迄 |
| 樅 | 最低地より四千尺迄 | 樅 | 最低地より三千尺迄 |

杉　　最低地より五千尺迄

右の内で唐檜とビャクシンとは大臺ヶ原山に限られ、イチヰは大和岳に集團し、五葉松・トガサワラは三津河落から鎌ノ公谷に多い。就中トガサワラは我國では四國の安藝郡と紀州の一部とにしか無い樹である。

高野槇は全山に分布してゐるけれども、特に峻峯の絶頂尾根の岩角等に、極めて濃厚な深綠色の細長い梢頭を突き出してゐる。秋になつて滿山紅葉に燃ゆる時、特に光澤ある深綠を以て色彩を豐富ならしむるものは此樹である。此樹は分布の位置と云ひ、樹形と云ひ、尖塔狀をなしてゐるから、よく落雷の災厄に遇つて枯れてゐるのを見る。此樹も我國のみに存する特有の樹であつて、其の特質を研究するには充分の資料を得ることが出來る。其他の樹木は全山に散在してゐるが、就中槍は峰筋に殆んど單純林をなして、立派な森林を作つてゐる。

針葉樹以外の樹では、ブナ・ミヅナラ・カヘデ・トチ・ホウ・カツラ・サクラ・シデ・サルダ・ドウダン・センノキ等の落葉樹の外、谷間にはカシ類・ヤマグルマ・サカキ・イハナンテン・石楠花・アセビ・ソヨゴ・ネズミモチ等の常綠樹もある。此内で特に注意すべきは、險阻な全山に常に多い石楠花の繁茂である。尙珍らしき樹木としては、ヤシャビシャクの多いことで、數百年を經たる大木の樹幹に房の如く寄生し、形の愛す可きのみならず、觸るれば一種の芳香を放ちて、晩秋は美くしき漿菓を澤山につける。またナツツバキの五千尺以上に多いことも珍らしい。

若夫花の美を見んが爲めには、五月頃の石楠花の滿開期に越すものはない。石楠花の美に就ては、小島先生の推賞もあるのみならず、登山家の等しく熟知してゐる所である。石楠花に亞いでは皐月の滿開である。六月中旬から七月下旬までは、吉野川に沿ふて十數里の間、河岸は悉く紅赤の花を以て彩られてゐる。尙他に多くの花を見るけれども、遂に此二種の滿山に亘る美觀に及ぶものはない。そし

て五千尺以上に至つて、八月の盛夏に咲くナツツバキの花の靜寂に至つては、之れを觀過することが出來ぬ。

菓實としての美麗は、イチヰの漿菓の眞紅に熟した十月末である。其の赤味を帶びた樹皮と黑味を及びた葉の中に、幾千萬と數知らぬ眞紅の實をつけてゐる美觀は亦格別である。

## 一三、動物

當山には二三の猛獸がゐる。狼と熊が夫である。狼は容易に其の姿を見せないけれども、三津河落の方面には新らしき多くの糞を見ることによつて、其の棲息を知ることが出來る。熊はよく栂の樹皮を剝ぎ起したり、又時折溪谷に出て蟹を漁つてゐる。其他に猪・羚羊・鹿・猿猴・ムササビ・兎の類も棲んでゐる。稀にカハヲソがゐるけれども、最も多いのは猪と兎とである。

猪は大正三四年の頃までは、經ヶ塚から大和岳に至る尾根は、猪のヌタ(泥濘個所を云ふ)が連續してゐたものである。今日では追々伐木作業の盛になるに從つて、奥の方へ潛伏し、今では鎌ノ公谷から伊勢の西谷御料林内に集合してゐる。猪は日中にもよく踏査者に驚いて、足元から飛び出すことが多いけれど、滅多に抵抗して來ることはないものである。

猿猴は重に群集をなして、秋十月から十一月の候に最も多く見られる。大抵の集團は三四十疋で、古い楢の大木などには群をなして其の菓實を食してゐる。適々人影を見ると暴風の如き音を立てゝ、叫びながら遁げ去つて行くのを通例とする。

鹿は稀であるが、晩秋滿山の紅葉夕陽に燃ゆる時、或は夜月光の冴え渡る頃に鳴き叫んでゐる。そして是等の獸類が登山者を驚かすのは、大抵夏夕立のあつた暮方である、斯かる陰慘な黃昏には、盛に怪聲を發したり彷徨したりして、少らず登山者を驚愕せしむることがある。

鳥類としては春の鶯・夏の駒鳥は最顯著なもので、此外四十雀・山雀の鳴禽類と、鷹も稀にゐるが、夏の露營の夢を破つて深山の寂寥を味はしむるものは、閑古鳥である。余は未だ閑古鳥の眞實何鳥であるかを知らぬ。嘗て何かで閑古鳥は雷鳥であると云ふ記事を見たことがあり、佛法僧であると云ふことも聞いた事もあるが、未だ其の眞を知らない。唯僅に閑古鳥が谷に下つて鳴く時は夜半であつて、再び峯に歸る時は曉であると云ふ諺のみを事實として經驗してゐるのみである。

雨燕（ガリガネ）は此の山中よりも稍下流に下つた方面に多く、一朝東南の暴風雨亂雲を送つて襲來する時は、中天高く飛び散り、やがて驟雨篠をついて降り始めると、河面に下つて濁り始めた河水の表を低く飛びかうのである、此の暴風雨と雨燕とは宛も海濱の暴風雨に鷗鵠の飛びかうが如きもので、夫よりも更に悽壯の氣を呈するものである。

此外大臺ヶ原山にはタニクグと云ふ大蛙が居り、蛇と蝮蛇とのゐることは一般に變りはないが、蝮蛇は特に本流北岸の險峻地に多く、夕立の翌日晴天であれば、其の午前は必ず數匹の蝮蛇に脊かさるゝから、特に登山者の注意を要する。今一つ登山者の注意を要するものは、雨天の時の山蛭と、晴天の時のダニと、スス竹の中を通過する人の心得なければならぬサヽトヂ(方名)と云ふ小豆粒にも足らぬ毛蟲とである。其内にて最も恐るべき危害を加へるものはササトヂで、主として顏面又は頸に害を與へる。此の危害に遇つた時は、顏の半面又は頸の半位は赤くはれ、痒痛を感じ、遂には烈しく化膿して、數日若しくは十數日間苦しめらるゝことがある。ダニは筬の中又は草原を通過する際によくたかるもので、大臺ヶ原山へ登る時は、必ず脚袢に十數匹を附着せしむる。蛭も黑倉又・鎌ノ公谷口邊に多いけれども、脚袢草鞋足袋を緊結してゐる時は、危害はないものである。

魚類は鰻とアメノウヲの見事なものが可なりゐる。

○吉野川水源地臺ヶ原山北麓　宮田

## 一四、溫泉

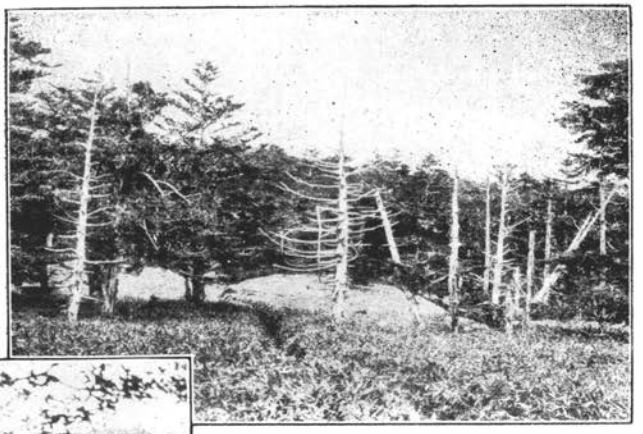
紀和半島では南へ寄らなければ溫泉が無いので、和歌山縣に入つては隨分澤山の溫泉があるが、吉野では稀である。そして大臺ヶ原山麓には、三ノ公谷の湯の谷と云ふに溫泉があるが、餘り深山て人の行く所ではない。人の行く所として微溫のものは、入ノ波（シホ）の硫黄泉と屏風谷の五色の湯といふ含硫炭酸泉とである、入ノ波の硫黄泉も、以前には湯屋があつたが、洪水に流されて今は湯槽のみ殘つてゐる。

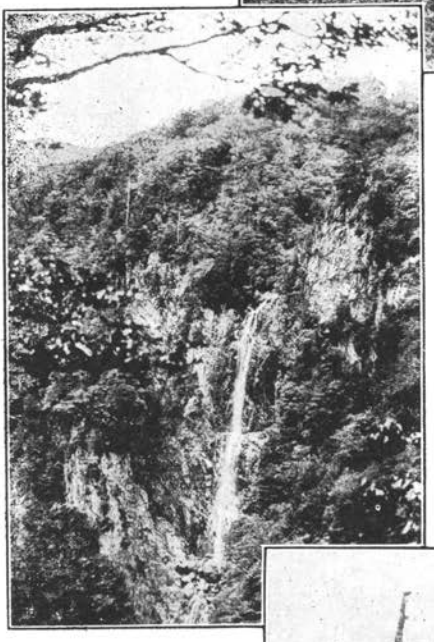
五色の湯は深林の中の溪谷にあつて、大臺ヶ原登山者は谷を隔てゝ見ることが出來る。炭酸泉とは云ふものゝ、硫黄を含有してゐるので、谷筋は硫黄の臭に充ちてゐる。此の鑛泉は屏風谷から上流一町餘の間に涉つて、本流に對する懸谷の岩隙から流れてゐる。此の鑛泉に就て面白いことは、疵の治癒に効果ある鑛泉と云ふ丈けに、傷ついた蛇が湯治してゐることである。夏日若し四五日も人の浴した氣配の無い頃に行つて見ると、澤山の蛇の皮があつて、數匹の蛇が靜に身を浸してゐる。

## 一五、氣象

當山岳地の氣象は、雨の頗る多いことを特徴とし、時としては十日を越えて尙晴れないことも珍しくない。殊に八月から九月は最も雨量の多い時で、從つて洪水の多い時である。今十年平均の雨量を示せば次表の如くである。（雨量は粍を以て示す。）

| 月 | 雨量 |
|---|---|
| 一月 | 九一・二 |
| 二月 | 八〇・二 |
| 三月 | 二三〇・二 |
| 四月 | 二六六・〇 |
| 五月 | 二九九・九 |
| 六月 | 四四九・五 |
| 七月 | 九二〇・五 |
| 八月 | 六七一・四 |
| 九月 | 七六四・〇 |
| 十月 | 四六二・五 |
| 十一月 | 一八二・二 |
| 十二月 | 一五四・八 |
| 一ヶ年 | 四六二三・四 |

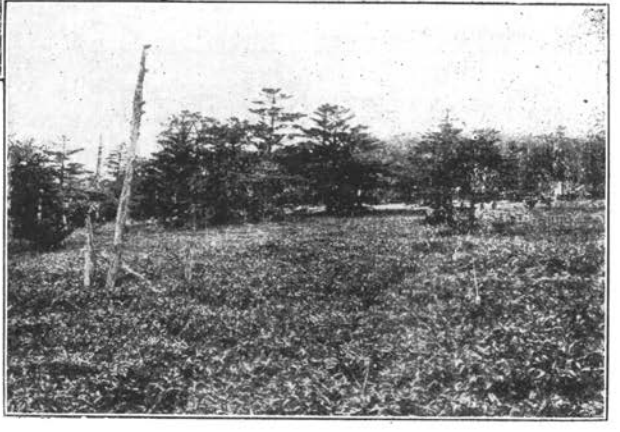




上、大臺原山巓牛石ヶ原。

中、大臺原山中の瀑。

下、大臺原山巓正木ヶ原。



而して長雨は必ず東南の風の時で、一度東風又は東南風が吹き初めると、必ず初めは細雨を伴ひ、續いて連日豪雨となり、一週日以上を經るを通例とする。亦特別に多いのが夕立で、八月盛夏の候一度夕立の期節に入ると、毎日午後一時から四時頃までに一回極つた樣にやつて來る。そうして夕方までは雲霧朦朧として全山常に濕潤を覺える。

氣溫は八月盛夏の候、朝は六十度乃至七十度で、日中には八十度に昇るを常とする。

風は東南風の時は隨分烈しい。原生林の櫛の大木が折れたり根こぎになつたりする。吉野川溪谷は風裏になるから、始んどそんなことは無いが、若しもそれを幸として大臺ヶ原山登山を思ひ立つ如きことがあるならば、伊勢方面の西谷御料林内で危險極まる災厄に遇はねばならねことがある。

## 一六、出水狀況

吉野川の上流は我國に於ける無双の立派な森林地である。此の爲めに古來森林と洪水とを論じた記事などには、よく吉野川の洪水の害を聞いたことがないと書いてある。是れは頗る誤つた記事であり見解であつて、吉野川上流地方は事實森林の整備した所であるが、前述の通り雨量が多いから、常に洪水が多い。而かも洪水の話の傳はらないのは、幸に吉野川は地層の縱谷を溝渠の如く流れて、兩岸に平野を持つてゐない爲で、又吉野川でも北山川でも、或は十津川でも、皆農耕の平野を流るゝことが少いといふ地勢上の關係もある。けれども洪水の害のあることは事實であつて、毎年何萬圓の木材を流失してゐる。

余の數年來の實驗によつても、上市町(河口より二十里の上流)で一丈四五尺の增水は毎年あると云つてもよい。殊に此附近で有名な洪水は、明治二十二年の十津川の大洪水であるが、今日でも當時の增水量から四尺乃至七尺低い出水は二三年に一回位ある。

# 一七、大臺ヶ原山登山の正路と間道

吉野川方面から大臺ヶ原山に登るには、既に記した通り吉野鐵道吉野驛から、宮瀧までの伊勢街道約二里は、俥の便もあるが、それから俥を棄てゝ東熊野街道に移り、五社峠と云ふ峠を越え、川上村に入つて上多古又は柏木に一泊し、其所から二十町程で縣道と分れ、更に三十町で入ノ波（シボ）と云ふ部落に入る。此の間は里道であるが、其所で部落が無くなり、其所から四里半で大臺ヶ原山に達する。宮瀧から柏木までは五里強で、自轉車を走らすことが出來る。

入ノ波は吉野川流域最奥の部落で、小さいながらも強ひて泊る人には宿屋もあり、必要品の購入も出來る。其所から五十町で筏場と云ふ所へ着くと三四戸の家がある。此所は吉野の大林業家北村氏の林業勞働者の部落で、其の子弟のみの小學校もあるが、それが眞に人家のある終點で、それからは一里程は溪谷に沿ふて進み、鎌ノ公谷の口から三十町程少しく急な登り坂で、伊勢の國境分水嶺に出ると道が二つに岐れて、右の方へ五十町の爪先上りが西谷御料林中の大臺ヶ原山道で、此の順路が正路であるが、此所に余は同山登山者の爲めに面白き間道のあることを紹介したい。

それは入ノ波から一里の地點に黒石谷と云ふのがある。其合流點に一二の杣小屋があつて、其所から右（南方）へ黒石谷を登り、此の方面の代表的溪谷を溯つて、多數の瀑布を研究しつゝ黒石岳の南方鞍部に出て、遠く富士を望み、經ヶ塚から右に大臺ヶ原山の高野谷に出て、開拓から教會へ向ふことである。

此の道は豪壯な西谷御料林から熊野灘や日出ヶ岳を見るやうな壯觀はないが、溪谷の奇を探つたり大臺ヶ原山の闊葉樹林を見るの便宜がある。里程は別段に正路と大差がない。

此の道を取ると、吉野川溪谷の分水嶺から開拓までの約二十町は、道が荒廢してゐるが、其他は完

備した森林道があるから、歩行には少しも不便がない。

## 一八、登山案内

上述の様な次第であるから、大臺ヶ原山登山客は、吉野驛で下車したなら、吉野山を見物して上市町で一泊するか、川上村大瀧附近で一泊し、翌日は柏木で一泊して、此の附近の石灰洞を見る必要がある、石灰洞には水晶窟・不動窟・菊の窟・聖天の窟等があるが、就中菊の窟と不動の窟とは、是非入つて見ねばならぬ。菊の窟は乾燥もしてゐるし深くもないけれども、不動の窟は深くもあり、中に大きい瀧があり川があるから珍らしい。尤も此の方は入口が狹いから、襯衣一枚位で汚れても差支ない仕度で入らねばならぬ。亦附近には舟石・或は屏風倉などの石灰岩の奇觀がある上に、後期南朝の遺跡たる金剛寺があり、亦此の附近村落は悉く南朝遺臣の關係地で、味ふべき歷史やら御朝拜式などの勤王の遺風も存してゐる。

柏木からは是非とも一氣に大臺ヶ原山まで登らねばならぬ。若し都合によつて途中で宿泊するとすれば、入ノ波で泊らなければ如何することも出來ない。

尙吉野驛からの途中見るべきものは、上市町の妹背山の風光、宮瀧の柴橋と云ふ峽谷、五社峠下の吉野川の舊蹟、大瀧の瀑布を下る筏夫の巧妙な操縱、迫に於ける丹生川上神社並に吉野川沿線の森林の立派さ等である。

季節としては七月末から八月初がよい。雨や洪水の關係が少いからであるが、若し特に紅葉を稱したり皐月を見んとするものは、その時を撰ぶことは言ふ迄もない。

大臺ヶ原山に登つてはどうしても二泊の必要がある。それは山上は可なり廣くて、あちらこちらに見るべき個所があるからである。（完）

# 黒部の秋

廣瀬壽雄

金澤——三日市——鐘釣温泉——猿飛——祖母谷——祖父谷——鐘釣——新鐘釣——黒薙温泉——二見温泉——猿ヶ番場——宮林の音神鑛山——宮林山——カシ薙深層谷。（大正八年十月十七日——二十一日）

## 一、前記

黒部には隨分前から憧れてゐた。何とかして一度行つて見たいと思つてゐた。立山の上から又白馬の頂きから、あそこが黒部だと見下ろすだけで、一度も行つたことが無い。汽車が黒部川の鐵橋を渡る度毎に『あゝ此處だのに！此處から行けば直ぐだのに！』と思つて、うらめしい一瞥を與へたまゝ素通りしてしまう。殊にその秋の美しさをよく耳にする。今年行かなければ、もう永久に行けないかも知れんと思ふと、矢も楯も堪らなかつた。それで十月の初め、こんな揭示を控所に出した。

秋も更けた。風が無くとも木の葉がヒラ〳〵と散る。深山の秋は、どんなに絢爛な色彩で粧はれてゐるであらう。峽谷の奔湍からは、血のやうに赤い木の葉が片々と流れて下流の淀に浮ぶ。秋の眞最中だ。

蜿々連る白馬連峰と、自然の大城壁をなす立山山脈との間に、深く切り込んで育くまれた黒部の大縱谷は、双六山麓の魔の谷と共に、北アルプスの二大神秘境と云はれてゐる。懸崖高く、斷崖深く、滿溪の奔流は岩壁に激越して、山々は鳴り、樹々は動く。

默々として動く宇宙の凡ては、赤い日が西山に落る度毎に、新しい事實を創造して行く。眞實

を求めて眞實に達する大自然の默動は、吾々に仕方のない程希望に充ちた現在を齎す。

もう秋の眞ッ最中だ。凡ての物は靜寂に入らうとしてゐる。然し黒部の秋だけは奔逸を極めてゐる。火が燃えてゐるやうな黒部の紅葉は、かの眼を射るやうな純白の岩石と、物凄いかの碧潭と相映發して、吾々を涙の出るやうな感激に導くてあらう。

黒部へ行け！

黒部へ行かう!!

應募者は二三十人あつた。愈々出發の前日に生徒監から止められてしまつた。假令一日でも、學校を休んで旅行するといふのはいけない、といふ理由であつた。それで中止して應募隊をも解散した。が自分だけは十七日の旗日に行ける所まで行つて歸つて來る、といふ事を生徒監に約束して出發した。所が、黒部の秋が餘り美しく且つ痛快であつたので、約束も何も無視して、一日一日と延びて、五日の間あの峽谷をさまようて歸つて來た。

其の行程は次の通りである。

△十月十七日(祭日)晴(午前五時十三分)金澤驛發(午前八時十五分——延着)三日市驛下車。愛本橋——(午後六時半)鐘釣温泉泊。〔徒歩行程　八里廿五町〕

△十月十八日(土曜)晴(午前八時)鐘釣温泉發——(十一時)小黒部谷——猿飛——(午後二時)祖母谷温泉趾——(六時)鐘釣温泉泊。〔徒歩行程　四里二町〕

△十月十九日(日曜)晴(午前七時半)鐘釣温泉發——(正午)黒薙川の吊橋——黒薙温泉——二見温泉跡——猿ヶ番場——(午後五時四十分)宮林の音神鑛山泊。〔徒歩行程　四里半〕

△十月二十日(月曜)晴(午前七時半)音神鑛山發——宮林山——カシ薙深層谷——岩魚釣り——(午後五時)鑛山着。〔徒歩行程　四里位〕

△十月二十一日(火曜)晴(午前八時)鑛山發——(午後一時)愛本着、愛本——三日市(自働車)(午後五時四十分)三日市驛發(八時四十四分)金澤驛着。

# 二、愛本まで

前夜嬉しさに興奮した體を寢床に横たへやうとした時、硝子戸にピカリと電光が映つたと思つた。そして遠くで、ごろごろうといふ雷鳴が聽いたやうな氣がした。十七日の朝、未明に起きた時は、果せる哉雷雨があつたのであつた。暗い道のしめりを、新しい草鞋の裏にすがすがしく感じながら、驛へ急いだ。たつた一人の旅だ。登山仕度で水筒やルックサックが體にしっくりとくっついてゐる。暗い裏路を通る時、靜かな家から少し早めの時計が五時を打つのが聞えた。驛の方からは、ポーッポーッといふ汽笛の音がよく聞えたりした。若しや乘り遲れはしまいかと思つて、急いで元氣よく歩いた。驛には澤山の人がゐた。構内は電燈で明るかつた。夜の見送のやうな感じが、ちよっと浮んだが、然しみんないそいそとして嬉しさうだった。その筈だ。大低釣りに行く人だったんだもの、中には學校の先生方が五六人居られた。大谷繞石先生のスタイルが一番印象的であつた。多辯な駒井先生の前に立つて、粗末なシャッで包んだ體を始終動しながら、溢れる程の嬉しさを頬にたゝえてゐられるのが、それをベンチに腰かけて見てゐる自分をも微笑ませた。

一人旅の筈だったが、三部の玉木君と田島君とが驛で加はる事になつて、三人づれになつた。五時十三分に金澤を出る時は、汽車は一ぱいだつた。釣りに行く人が大部分である。森本でそれらの人々は下りた。釣竿や籠を持つた人が陸續として續いて行くのを見ながら、汽車は動き出した。まだ夜は充分明けきらぬ。『それぢや澤山釣つて居らつしやい』と云つてお分れした星野先生の姿も、大谷先生や駒井先生や其他の先生方の姿も、皆その行列の中に消えてしまつた。

富山の平野に出た時、膚寒い風が窓から冷々と吹き込んだ。其の時、加賀の方に大きな虹が現はれ、東の方には立山、劍の北アルプスの北部が、あざやかに冴えてその嚴正な色彩に一種の威力と身震ひ

とを感ぜしめられた。褐色に枯れた豆が空っぽの田の畦に、カラカラと鳴つてゐる。その向には紅葉しかけた木も見える。冷風に逆らつて一團の小鳥が汽車と殆ど同じ速度で飛んでゐた。吾々の五官が澄んでひきしまつて來る。魚津へ行つた時、白馬が朝日嶽ではあるまいかと思はれる白い山が見えた。八時過ぎ三日市に下りて、愛本まで三里の道を歩き出した。

もう秋だ。何と云つても秋だ。散りかゝつたコスモスや、長髪を振亂したやうな芒が白ちやけた色に凋れて、さわさわと幽かな葉擦の音を立てゝゐるなどは、美はしいには美はしいがこの曇つた日には寂しい。限りなく寂しい。それでも、雲がとぎれて日光がカットさす時は、あたりがはつきりとなるけれども、灰色の雲が又擴がると、薄暗く、そこらが沈んで見えて、心細くおしつけられるやうになる。路傍には薄紫の草花がたよたよと咲いてゐた。十一時に愛本に着いて辨當を開いた。

## 三、風光忽ち改まる黒部の景觀

愛本橋で俄然景色が變つた。ほんとに忽然として光景が改まつたのだ。自分達は其の變化が、餘りに唐突だつたのでびっくりした。南岸が迫つて、激流が岩脚をたゝきつけてゐたのだ。そしてそれが又淀になつて、自分達の魂を吸ひ込むやうな藍色に流れてゐる。『あゝ、この黒部の水の色！』と眤と見入つた。藍色ぢや濃すぎる。あさぎではない。かついろでは單純すぎる。石油の螢光を透明にしたやうな色である。玉蟲の甲の光を水に溶かしたやうな色だ。青貝の光を水に溶したやうな色だとも云へる。

萬尺の頂に注ぐ雨水や、雪渓の滴りを集めて、神秘の世界を流れて來た黒部川の水は、蠱惑的なその色で益々その不可思議の無盡藏を思はせてゐた。この愛本橋の流を見た時『とうたう黒部へ來たわい。』と思つた。そして內山村の方へ歩き出した時、黒部の奥山へとしての道が坦々たる大道であるのが少からず不平であつた。村を離れると、結晶片岩の岩壁から、瀧が白く光つて落ちてゐた。それは

大瀧といふのであつた。少し行くと愛本溫泉の建物が、段上の平地に見えた。自分は初め發電所でゞもあるのかと思つた。愛本橋から溫泉まで丁度一時間。

一歩毎に景色は面白くなつて行く。雄大な偉容と奥ゆかしい趣致とは一足毎に加はつて行く。吾々は吾々の體が丁度バネ仕掛でもあるかのやうに、大股に勇ましく歩るいて行つた。すると前の方に洋服を着た男が一人立つてゐた。吾々が近づくと、

『あなた方は何處までいらつしやるんですか』

とその男は云つた。髯は餘り貴族的な髯では無かつた。酒の一升瓶をタオルに包んで、肩に持つてゐる所など見ると、その男は一體どんな種類の人間か見當がつかなかつた。

『鐘釣までです』

と、そつけなく返事して行き過ぎやうとした。

『さうですか。私もそつちの方へ行くんですから、お伴しませう。』

と、追つかけるやうにしてその男は云つた。

『あ、さうですか。』

と、返事はしたものゝ、何だか誘惑でもされるやうな感じがした。

『何ですか、三日市から歩いてゐらつしたんですか、キツイですね。私も三日市まで御一緒でしたよ』

何となく垢ぬけのしないアクセントだ。何でも田舍生れの人だらうと思つた。それから色々話して見たら、この人は橋本といふ富山の人で、音神嶽山を持つてゐる人だつた。黒部へ初めて來た自分達にとつては、黒部の知識を得るにはいゝ道づれだつたのだ。

しばらく行くと、最初の吊橋に出た。これが黒部橋——この邊の人は宇奈月谷の附近にあるから、宇奈月(ウナヅキ)橋と云つてゐる相だ——である。是から段丘の平地は殆どなく、溪は愈々せばまつた。路は

右岸。

人の心を迷はすやうな藍流が、斷崕の下に唸りを立てゝ流れてゐる、山々は美しく紅葉してゐる、何れも非點の打ち所がない。自分達は只『素的だなぁ』と云ふより外はなかつた。自分は天才畫家の展覽會を見るやうだと思つた。繪卷物を繰り擴げるやうに、眼前に現はれる景色は一つとして駄作はない。悉く傑作である。胸にビンと來る中には、ある偉大な凄味さへ持つてゐる。自分は嬉しくつて、嬉しつくてならなかつた。こんな痛快な、而も奥ゆかしい雅味ある別天地を、自分達二三人が享樂する丈けで、やがてあの何物をも容赦しない冬の威力が襲うて來て、この峽谷を凡ての人から密閉してしまふといふのは、何といふ勿體ない事であらうと思つた。そしてあんまりな贅澤でくやしいやうな、おれつたいやうな妙に強い感情の動搖するのを感じた。

一ヶ所斷崕の道が谷底に落ちてしまつて、崖を上らなければならぬ所があつた。それから直ぐ人のゐないほゞ茶屋に着いたのは一時半であつた。對岸の直立面には團々たる栃の紅葉が、花模樣を大きくしたやうに燃えてゐる。こつちの斷崕は亦頭上に直角に、やけに高く突立つて天空を二分して、それが又對岸によつて細くせばめられてゐる、足許は深くつて眼が眩ふやう。それにも拘らず、黑部本流は自分勝手に淙々と走つて、岩壁に打つかつては、白くうづを巻いてゐる。大自然は息もつきあへぬ程趣に富む色彩と、活動の姿態とを以て、天才の表現をほしいまゝにしてゐた。

『此の邊の岩石は皆大理石ですよ』

と橋本さんは、其の專門の知識で說明される。直角の斷崖を横に穴を堀るやうにして、道をつけた所を通る自分は、ルネッサンス式の大建築の大理石の廊下を歩くことを夢想しながら、吾々程贅澤のものはないと思つた。

## 四、佛石

黒部の奥山といふ神秘的の分子を含むこの大峡谷に、佛石などといふ人工的なものがあるのかと思つた自分は、其の正體を見るのに輕い嫌惡の情を持つてゐた。自分達が佛茶屋に着いたのは、二時五分であつた。小屋は閉ぢてあつたが、其の後の崖にその佛石があつた。自分は、橋本さんが『少しも人工を加へてはないのですよ』と言はれた言葉に可なりの疑念を持つて見なければならぬ程、その佛石は佛らしい形をしてゐた。成程側へ行て見ると少しも人間の小細工の跡はない。全部方解石て出來上つてゐる。自然の偶然の力が、よくもこんなに人間の天才のやうな彫刻をしたものだと感心するより外はなかつた。音樂に魅せられた緊張を引き延ばしたやうな情緒に充ちて歩いて來た自分は、玆で全く別な情緒に支配された。自分は此の茶屋の番人を白髪の老人だらうと思つて見た。そして昔からの奇蹟を有り難がつて、人に物語るロマンチックな場面を空想して見た。所が其の空想は、橋本さんの說明で覆されてしまつた。この佛茶屋の主人が皮肉にも獵師であつた。今年の春三十二貫もある大熊を射とめて、その肉を拳ほどの大さに切つて、煮て喰つたといふ男であつたのだ。自分はワイルドな景觀を持つてゐる黒部の峽谷に、涙ッぽい傳說を聞かないのを痛快に思つた。此の佛茶屋の主人は、名を朝倉芳次郎と云ひ、今年四十八歲、今では黒部を中心にした北アルプスの案內人として隨一の者だと云ふのが橋本さんの說明であつた。

佛茶屋の邊りから峽谷の景觀は、黒部式になつて來る。黒部式の語を用ゐるのは、循環論證の虛僞に類する。が自分には到底黒部を完全に說明する事が出來ぬ。とにかく黒部の景色は天下一品（ユニーク）だ。ワイルドな而も幽玄味の深い峽谷に、滿山の樹木が色づいてゐる。山の人の所謂『山の色が出てゐる』のだ。黒い程濃綠の針葉樹の間に、緋のやうな闊葉樹が、複雜に而も大仕掛に入り混つて、鮮明な極彩

色になつてゐる。そこへ黒部の本流が、魔の國の色のやうな青貝色になつて流れる美しさよ。饑ゑ渇へた自分達の心は、痛快な奔流の響きと、その美しい色と、鬱蒼とした國有林の眺めとで、勿體ない程滿足せしめられる。

森石谷を越えて、五味平の殖林他に這入つた時、ふり返つて森石山を見た。禮拜堂（カレドラル）の圓屋根（ドーウム）を大きく高くしたやうな巨大な一つ石の山が、突兀として地から天に痛快に盛り上つてゐた。そして五彩の色調が全山を覆ふてゐる。巨人が金襴の衣をつけて、天地の間に默禱してゐる姿だと思つた。自分は帽子を振り上げて飛び上つて喜んだ。

五味平に着いたのは三時であつた。物狂はしく喜んでゐた時、橋本さんが、こんなことを云はれた。

『この杉林によく猿公がやつて來て居ます。今日もともしたらゐるかも知れません。大低二三十匹位が一團になつて居ますよ。』

自分は欝然として生氣がこもつてゐるこの美しくも大きな谷に、野猿が跳梁してゐる事は、如何にも似つかはしい事だと思つて歩き出した。すると突然、どどどう……と山鳥が、二三間前の崖から飛び出した。その尻尾が細く矢のやうに横に飛んだ時、『えゝッ、びつくりさせやがる！』と云ふのが、その響に應ずる橋本さんの聲であつた。吾々が、鐘釣溫泉と黒薙溫泉との分れ道に出たのは、それから直ぐだつた。

『ぢや、玆でお分れします、お歸りには是非私の鑛山へ寄つて下さいまし。』

と云つて橋本さんは左へ、

『有難うございました。』

と吾々は右の坂道を下りた。

## 五、七谷越の深淵俯瞰

黒部の秋は美の極致の連續だ。是以上の美はあるまいと思ふ位、自分達の美的情緒が極度に緊張した有様で、更に一歩進めば更に完全な美が現はれる。此の黒薙橋までの美觀にさへ帽子を振つて躍り上つたのである。然し黒部の秋の眞價は、是からなのであつた。自分は人間の言葉が、このやうな大自然に對する時、餘りに力無いものであることを嘆いた。最上級の連續でもまだ足らぬ。最上級の堆積を續けても追ッ付かぬ。

畫家ならば、只もう自然の美が餘りに雄大であり强烈であるのに惑亂されてしまつて、其の繪筆をヘシ折つて、人間の藝術が如何に無能であり、又その表現能力が如何に微々たるものであるかを思ひ泣き出すだらう。文學者や詩人ならば、人間の美辭麗句も、描寫の妙を極めた表現樣式も、如何に力のない空漠なものであるかを、痛切に感ずるであらう。

黒部の秋はもう命がけの美しさだ。莊嚴な嚴肅な華麗な美だ。遊戲的分子のちつともない、崇高な深甚な美だ。自分達はその黒薙橋を過ぎてからは、家も忘れ學校も忘れ、自分自身さへ忘れて了つて、全く大自然の華麗に同化してしまつた。只歡喜その物が、奥へ奥へと進んで行くのであつた。そして涙を流しながら『黒部へ來ない奴は馬鹿だ。阿呆だ。』と呟くのであつた。

黒薙川に架けられた吊橋は矢張、左右前後にゆれた。橋を渡つてジッグザッグの路を登ると、笹平（サヽダヒラ）に出た。そこには漁師が鱒（ミヤ）をカマスに入れて休んでゐた。

『捕れたね。』

『いゝえ、少してすちや。』

自分達もそこへ腰をおろした。

漁師は四十位で、山の人特有の質朴さを身邊に漂はしてゐる。自分はかういふ人達と話するのを面白いと思つた。

『熊はゐないかね、』

『今年は楢の實が少いから餘り見ませんちや。毎年この邊の木に登つて楢の實を喰つてゐるのですけれども。』

愉快な返事だ。熊が木登りして實を喰つてゐる。黒部の自然を飾るには、何とふさはしいものだらう。

『猿は？』

『猿なんか毎日でも出ますちや。二十でも三十でも出ますちや。猿ッていふ奴は何十匹も一所に居るもんでありますちや。』

話好きらしいこの男は、相手を信頼しきつたやうな素直ほさを示しながら、どんどん話し出した。

『何十匹も一緒に木に登つて盛んに木の實を食つたり、木の皮をむいたりしてゐますが、必ず一匹は高い所へ登つて見張り番をしてゐますちや。人間が近づくと、其の奴が木の上でキャキャッと云ひますちや。するとみんな一所に逃げてしまひますちや。猿みたいに利巧で贅澤な奴はゐませんちや。木の實なんかは、みんなどんな小さいものでも皮をむいてから喰ふもんでありますちや。』

話はいくらでも續く。自分は地圖を膝の上に廣げて見てゐたが、

『祖母谷だの、祖父谷だのつて妙な名があるね。どういふ譯だね。』

と聞いた。

『それは昔、片貝の方から祖父が逃げて來たら、祖母がしつッこく追つかけて來たと云ひますちや。祖父が這入つた谷を祖父谷と云ひ、祖母が這入つた谷を祖母谷と云ひますちや。そして兩方とも地

獄谷へ這入つたが、祖母の方が一番熱い地獄でありましたちや。』

なるて御伽噺(メルヘン)を聞いてゐるやうだ、何をして逃げて來たのか、何の爲にこんな谷まで追ひかけて來たのか、又其の後二人の運命はどうなつたか、その邊は一切曖昧にぼかされてゐる。自分達が童話の世界に引き入れられてゐた時、話は又現實界にもどつて來た。

『祖母谷の奥は凄いですぞ。祖母谷溫泉から一里も奥へ行くと、草鞋を穿いてもゐられない位ですちやっ夜などになると、ボッポウ、ボッポウ、バアン、バアンといつてゐますちや。』

話はいくらでも出る。而も面白くなつて行くが今日の目的地まで行かない內に日が暮れやしまいかと心配になつて來た。祖母谷の傳說などを聞いてゐたので三四十分を休んでしまつた。

『どうれ、歸るかね。』

と、その漁師が獨言をいつて立ち上る時、自分達は黒部本流の右岸を行つた。對岸は加嘉堂山で、黒部式の美しさてある。自分達はどうしたつて黒部に倦きる事は出來ない。驩喜の連續の裡に躍るやうにして、出ノ平(ダシタヒラ)も過ぎ、尙ほも繪卷物を繰り擴げるやうに、變化極りのない黒部の峽谷が、物語らうとする神秘な幸福な意味を、受動的に凡て受け容れられる餘裕のあるのを樂んだ。自分の心は全く空々寂々たるものてあつた。魂全體が全く大自然の旋律と共鳴りしてゐるのを、自分て感じない程幸福の絶頂にある沒我の境を非常に喜んだ、四時半頃腹がすいて來たので、用意のパンを出して喰ひ出した。對岸には權現が胸を張り出して、突兀として延び上つてゐる。その頭は針葉樹の濃綠の中に、赤と黄の絞り出し繪の具をなすりつけたやうに鮮かに闊葉樹の紅葉で飾られてゐた。駒ヶ嶽・三名引の頭には、もう薄すらと雪が來てゐた。それらの樣子が氣に入つて、下手なスケッチをやつて見た。

我々が七谷越(ナナタニゴエ)えに行つたのは、それからすぐだつた。不圖下を見た時に、悸(ぎょっ)として覗き込んだ。峽谷の縱觀、すばらしいものだ。兩岸の山脚が壁のやうに截り立つてゐる。所謂黒部の廊下が幾曲りに

も曲り、上流の絶壁から素早く走り出した藍色の峽流が、この岸壁に撞き當つては、白く泡立つて躍り狂つてゐる。深淵の俯瞰、それだけでも自分の魂は烈しい旋律を起す。だのに兩方の斷崖は、黒部式に五彩に輝いてゐる。自分はどうしていゝのか分らなかつた。で下手なスケッチをやるのは、オリヂナルの黒部を害するやうな不安に襲はれながら、兎にかくやつて見た。

## 六、廊下

自分は玆に黒部の廊下に就いて簡單な說明をしたい。廊下といふと、平坦な歩さよい岩の路でも意味するかのやうに聞える。が實は全く反對で、兩岸が山に迫られて、と云ふよりも山を二つに挽き割つたやうな直立の細い深い斷崖て、通過不可能の所を云ふのである。黒部が日本に比類が無い典型的の峽流をなしてゐると云はれるのは、全くこの廊下があるがらである。

鷲羽(ワシバ)岳の北方小鷲と祖父岳との間に潺湲たる產聲をあげて、日本北アルプスの原始地帶を北走すること三十里。白泡を噴いて躍り狂ふ奔湍と、大地を震蕩する瀬の音とを、靜かな日本海に納める間に、凡そ廊下が三つあるのである。奥廊下、中廊下、下廊下がそれてある。奥廊下中廊下とは共に上流の藥師岳と赤牛岳との間を突き拔ける時の峽谷で、下廊下は黒部別山の赭黒い劍壁に撞き當る邊りから下流十數里、黒部橋の邊りまでの峽谷である。只鐘釣溫泉の附近からは、段丘がやゝ發達して路がその上に通つて居るのである。

自分達は、この下廊下の痛快さと、溪谷の深林の美しい色とに、チャームされてしまつた。

猫又谷の吊り橋を渡る時は、六時であつた。深谷の夕暮は早い。黄昏の弱い光線が四邊に漂ひ初めたが、それでも山の輪廓だけは、まだくつきりと薄暗い中に描き出されてゐた。貉谷(ムジナダニ)や小便谷(シャベンダニ)は、急いで前ばかりに氣を向けてゐたので、何時通つたのか知らなかつた。周圍はどんどん暗くなつて行く。

連の二人はあと何十町位あるかと不安さうに尋ねる。自分は地圖を見て十町と答へた。峽谷は大風が吹きすさぶやうな水の音で鳴り轟いてゐる。自分は物凄くなつてゾクゾクして來た。と前に忽然として黒い巨人が蹲つてゐるやうな巨大なものが立ちはだかつた。それは高さ七十丈にも餘る東鐘釣山だつた。花崗岩の全石からなる絶大の釣鐘だ。

自分達は急いだ。隨分急いだ。その時自分はこんな事を思つた。人の信念と云ふものは不思議のものだ。若し自分達の行く先き十町ばかりの所に温泉場があるといふ信念が、一つのビジョンであつたらどうしやう。ある一つの謬想に囚はれて、こんな所に今時分こんなにして歩いてゐるとしたらどうしやう……。突然、左の岸壁の中から轟々たる響きが聞えて來た、オヤッと足をとめた。あたりは暗くなつて行く。丁度石の中にもう一つの黒部川が流れてゐるかのやうに、轟々たる音が依然として東鐘釣の根の中から聞ゑた。反響だと氣が付くと物も云はずにどんどん歩き出した。不歸谷は何時通つたか氣が付かなかつた。

『來た、來たッ！』と、先の者が叫んだ。嬉しい光明が闇の中から眼を射つたのだ。瞳孔の極度に大きくなつた眼で注意しながら、だらだらと走り下ると、いきなり雷のやうな瀬の音が脚もとから起つて、闇の中に吊橋が現れた。自分はマッチを擦つて『元鐘釣温泉道、四町』といふ字を讀んだ、二人の連は、直ぐ眼の前に光が見ゑる新鐘釣温泉へ行きたいらしかつた。自分はこの吊橋を渡るんだと云つて、先になつて靜かに渡り出した。左右にゆれる事甚だしい。漸く渡り盡すと直ぐ岩壁の道だ。何だか敵國の城にでも忍び寄らうとする者のやうな悲壯の感じに襲はれた。四町とは言ひ仲々遠い四町であつた。漸く鐘釣温泉の燈火が障子に映るのを見た時、思はず萬歳を叫んだ。

## 七、鐘釣温泉の夜と朝

無人島の漂流者が通行の船を見付けた時のやうな聲びを以て、吾々三人は鐘釣溫泉の燈火に近寄つた。溫泉の人々は突然の來客に、びッくりしたやうな顏をしたが、直ぐ離れの八疊へランプを持つて案內した。自分達が草鞋の紐を解いてゐる時、

『貴方方は何しにいらしったんてすか。』

と質朴な女中が、素直に開け放しの問ひを投げかけた。

『遊びに來たのさ。』

と答へると、其の語尾を奪ひ取る樣にして、

『遊びにッ？こんな山中へ何を見にいらしったんてすか？寒いのに！私等はもうみんな里へ歸るんですよ。』

と、その女中は云つた。

『ざうかへ？でも、この次の日曜には、金澤から大勢來るんだぜ。』

『來られちやいゝ迷惑ですちや。私等は里へ出るんですよ。』

その女中は、血色のいゝ膚の細かなつやつやした白い顏の女であつたが、その物の云ひ振りには、都會の女に見るやうな、氣どつた所や、肉感的な嬌態がなく、全くシンプルに嫌味なく云つてゐるのが、黒部奥山の女に如何にふさはしいものであつたらう？

湯に行くと云つたら、草履を三足持つて來て呉れた。そして溫泉の主人が、鐘釣溫泉と黒く書いた、赤條入りの與市兵衞提灯を下げて案內してくれた。

『兹を下りて、河原を左の方へ行くのです。』

と、暗い轟々たる音のする谷を指差して、歸つて行つた。對岸の屏風のやうな岩壁は、すばらしく高いものと見える。黒く前に立ち塞がつてゐるので、天の星を見るには頸を伸ばして、項が痛いほど顏

を擧げなければならぬ。唸りを持つた奔流の響が寒い夜の空氣を動亂させて衝き上つて來る。活動寫眞にある凄い場面でも演じてゐるかのやうに、自分達は一の提灯で、小さく足許を照しながら、巨岩の間を探るやうに歩いた。

一日に四千石も出るといふ湯は、岩壁の下からだぶだぶ湧き出して、清淨な砂を底にした天然の岩槽に溢へられては、流れ出してゐた。この靈泉に頸まですつぽり浸かつて、闇を見つめた。奔流の響きが提灯の光を、ほかほか震はせてゐるきりだ。小兒が母の乳房にしがみつく時のやうに、吾々は大自然の慈愛が胸に喰ひ入るやうな深い喜びを感じた。

湯から歸つて次のやうな文句を友達にやる葉書にしるした。

黒部へ來た。今夜は鐘釣に泊る。秋は素的なものだ。世界中どこを探したつて、こんな痛快な、而も華麗な峽谷があるもんかい。

黒部の秋を見ない者は、不幸者だ。此處へ來られない者は不運の者だ。黒部の谷は力の谷だよ。ぐんぐん奥へ引つ張り込まれる。明日は祖母谷で歸るつもりだが、ともすると大黒鑛山から信州へ出るかも知れん。或は此の谷に雪が降るまでゐるかも知れぬ。

此の谷で死ぬなら惜しいとは思はない。

靜かな熟睡の夢が破られて、暴風雨の襲來かと怪しんだのは、黒部奔流の轟々たる響きであつた。障子の骨がぼんやり見える位、夜は明けかけてゐた。何時の間にか再びねむつて、本當に目が醒めた時は、もう明るくなつてゐた。

楊子をくはへて昨夜の岩槽に行つた。ぐわあッといふすさまじい早瀬の音とは反對に、靜かに白い湯氣が、ほがらほがらと天然の洞窟から立ちのぼつてゐた。湯元からだぶ〳〵と湧き出て、ひとりでに洞窟の中へ流れ込んで、一の大きな浴槽となる。自分達は人の居ないこの湯へ、すつぽり頸までつ

かつた。可なり熱い湯だ。

湯本はこの岩槽から三四間離れて、湯氣が立つてゐた。綺麗なお湯が、底の方から震へるやうに湧き出すと、細かい小石がぷくぷく持ち上げられ、不規則な凸面まで届かない中に、わきへそれて沈んでしまう。小さい柄杓で汲んで飲んだりした。炭酸泉で美味いといふ事は、何といふ有り難い賜物だらう。

浴後三人とも奔流の岸にある大きな花崗岩に這ひ上つて、激流のしぶきをしばらく眺めてゐた。見上げると、谷の空は兩方からのしかゝる岩壁と岩壁とに區切られて、戸のすき間のやうに細長い。碧空が朝の光線を吸ひ込んでゐる。空は細長い筈だ。向ふ岸には一千九百七十米の百貫山の斷崖が、壓し付けるやうに近く立つてゐて、頂上の邊りを見るには首が背中へくつ着く程も仰向かなければならないんだもの。それにこつちは似合谷と空谷の頭が延びて西鐘釣山となつた岩壁が、前の百貫山と對立してゐるんだもの。自分は昨年の夏、茲から十數里上流の溫谷で野營した朝を思ひ出した。

朝飯をすませて、仕度をしやうかと云つてゐる時、昨夜この溫泉に泊り合はせた只一人の小林區の横山さんは、『左樣なら』を云つて行つてしまつた。此の人に昨夜聞いた通り、今日は祖母谷から大黒鑛山に行つて信州へ抜けるか、それとも南越を登つて餓鬼平で歸つてくるかといふ計畫は、未決定のまゝであつた。自分達は周章る必要もなければ、急がなければならぬ事情もないのだ。どうせ遊びに來たんだものといふ腹で、ゆつくり構へて、愈々出發したのは八時を過ぎてゐた。

## 八、鐘釣の上流猿飛まで

黒部の峽谷に於けるこの二日目からの自分達の行動は、全く夢遊病者のそれの如く、全然無計畫のものとなつてしまつた。只もう大自然の美といふ光と、愛といふ力とに支配されて、自己の生命の躍

動を感ずる許りであつた。大自然の精神が偉大な力となつて、石に動き、木に躍るのを意識する許りなのだ。山の中でよく感ずる未來に横はる色々の危難や困苦やを思ひ出す事は始どなく、只幸福な歡喜の豫感で充ちてゐた。

林道は依然として左岸に通じてゐたが、昨日のやうな比較的平坦な道てないのが嬉しかつた。如何にも奥山への道らしく、狹く濕氣を含んだ石道を、カサ〳〵と褐色の落葉を踏んで紅葉した樹々の間を抜けるのが、突き上げられるやうな勇躍を覺えしめられるものであつた。忽ち崖下に黒部川の奔湍が現はれて、白い花崗岩の岩脚を、叩きつけながら轟々と走つてゐるのが見えた。

空谷（カングヒ）を過ぎて、桂・楡の大木の多い與平（ヨヒラ）に出ると、池ノ平山續きの山（一六六七米、無名）が、鮮かな紅葉て先づ自分達の視線を引きつけた。右の方には初雪斑らな小黒部の前劍（マヘツルギ）と、その後に劍の肩とが、冬の襲來の先驅者のやうに立つてゐた。

自分達が百貫谷の前に立つて、百貫山と名劍山とを連ねる急峻な山稜に不思議に美しい色と光とを發してゐるのを、頭上に仰いだ時、猛烈な線が表現する力の感じと、吾々の美的快感との飽滿の情に堪へなかつた。いくら嘆賞しても倦きない眺めである。大自然の殿堂の如く大きく、華麗な劇場の如く輝いて、白龍の登るやうな岩石に、匂ふ花輪のやうな紅葉が、プリズムの光のやうに、虹のやうに、オーロラのやうに、入り亂れて光り輝いてゐる。大軍の突擊するやうに、黒部の流れが響くのは、丁度指揮者の合圖に連れて、けたゝましく鳴る管絃樂の音のやうだ。自然の大演劇よ！自然の大藝術よ！

自然の美が、是程まで魁偉な線と、豐麗な色と、大地の底から天上へ踊り上るやうな響とが、こんなに完全に調和して現はれた事があつただらうか？プラトーンの藝術美と哲學との親密な統一、と云つても是ほどまでになるだらうか？到底無關心に通ることの出來ぬ自然の大藝術だ。崇高な華麗な自

然の實相だ。讀者よ。これらが實際よりも記述が遙かにまづい事を咎め給ふな。人間の言葉で、黒部の秋の眞相を傳へやうと企てるのが、既に僭越なのだ。黒部の美を冒瀆するものだ。まして文筆には全然素人の自分が、づうづうしくも筆をとるなどは以ての外なんだから。自分は人間の表情の無能を嘆いた。失神したやうに夢と現との界にさまよひ〳〵と四邊を凝視めるだけだつた。

自分達は仙境（フエーアリイランド）の刹那の享樂を續けて、横合から不意に落ちて來る幾つかの支谷を越えた。ウド谷、小屋ノ谷（コヤ）、影ノ谷（カゲ）などがそれだ。小屋平（コヤタヒラ）は泣き出したい位、素的な眺めだつた。が小黒部谷に近付くにつれ、黒部式の景觀は痛快を極めて來る。自分は兩手を振り上げて、躍りながら狂態を演じて進んだ。

『今やつと玆へねらしつたんですか？』

と云つたのは、鐘釣溫泉の若い主人であつた。岩魚を七八匹、木の枝にぶら下げて奥の方からやつて來たのだ。自分達は時々立ち止まつてスケッチをしてゐたので、意外に時間を費やしたのであつた。主人はにこ〳〵しながら、

『この分では祖母谷まで行つて歸られたら丁度いゝでせう。』

と云つて、その邊の地理を詳しく説明してくれた。

『とにかく、此の邊から猿飛の邊までが、一等景色がようございます。一年の内でも今が一番綺麗です。』

と、親切さうな眼付きで物を云つてゐたが、『もう二場所釣らなきや……』と云つて下へ行つた。

## 九、猿飛の壯觀と祖母谷

小黒部谷へ着いたのは十一時過ぎだつた。山の裾と裾とが、ぶつつかり合つてゐる間を、水は深く穿つて落ちるやうに黒部の本流へ走つてゐた。吊橋を渡り、危なつかしい崖の縁を少し登ると、山腹に小黒部鑛山への徑が岐れる。樺平（カヤキダヒラ）を少し行くと、右手に古い林道がある。是が今年の夏、木暮さん

達が黒部探險をされた道なんだ。自分達は、その天下の耳目を引いた道へ吸ひ込まれる前に、猿飛の奇峽に魂を吸ひ込まれる運命を持つてゐた。

蠱惑的な洪邃秘奥の深山特有の氣分と情調とが、多分に漂うてゐる上に、紅葉で美しく粧はれた林道を登り詰めて、更に降つた時、自分達は猿飛の奇峽に先づ魂を奪はれた。

名劒と奥鐘山と樺平の山裾とが、三方から押し寄せて、危く黒部川を堰き止めやうとする二三間の狹い所を、奔流は祖母谷川の援助を得て、上流からワーッと鬨の聲をあげながら、岩石を躍り越え飛び越えして、天井の抜けた甚深の峽底を抉ぐり込むやうに突貫して躍り込む。そこで激戰のやうな白泡を噛んで激越しながら猛り狂ふ。岩壁は又岩壁て、其の躍り狂ふ響に應じて、花崗岩の白い壁面に、轟々たる響音を發する。それに今は秋の眞つ最中だ。兩岸から身を伸ばし、手を伸ばしてゐる滿溪の紅葉は、猩々緋のやうに燃えながら、奔湍の激越に震へてゐる。ネヅコの黒い枝も、反響によつて起る谷風に搖り動かされてゐる。奔流は尚ほ猛り狂ふて、前面の一大岩壁につき當り、直角に折り曲げられ、それが更に又次の岩壘に突貫する。然し、じつと靜まつてゐる空は、入江のやうに細く長く碧々として、まるで大きい力が通り過ぎた跡のやうだ。

きらめくやうな鮮色の美と、人の心をゆすぶり上げるやうな響きの快と（インスピレーション）、周圍に漂ふ原始の香の妙味とが、渾然として融合した神祕の世界だ。靈感の領域だ。又大きな力の具體化だ。

自分はもう止めよう。猿飛の壯觀と雄麗とに就いて記述する力のないことを痛感する。拙い記述を是以上するならば、それ丈け自然の大藝術のオリヂナルを損ふものだ。自分は永劫の沈默に耽つて、讀者諸君の靜かな默想に訴へることが一番賢明な態度であると思ふ。そして若し其の默想の結果、渴き憧れて黒部の奥へ行き、其の秋の魅麗を樂まれる諸君が出られるならば、自分は共鳴者の增加するのを僥倖の幸福として喜ぶ。自然を技巧化したくない。只一人で、此處を思ひ返して夢幻の感覺に導

き入れられる甘美に、自分の胸をワクワクさせて居ればよいのだ。他人までその境地に引き込まうとするのは徒勞だから。絶對に不可能だから。』表現したい事を、大つぴらに表現して見せるのは、溜飲の下がる事だ。』と、ヂャン・フランソア・ミレーが云つても、自分にはそれが出來ないのをどうしやう。

自分達が晝飯にしたのは、此の黒部谷に這入つてから、第六番目の吊橋を渡つてからだつた。即ち黒部峽谷を横ぎつて、祖母谷へ這入つてからだつた。吾々は矢張り限りなく現はれる痛快な變化を樂しみながら、祖母谷を奥へ奥へと進んで行つた。大昔、地名も何も無かつた時代に、片貝の方から老爺が走つて老媼が追つかけたといふ傳説のある所としては、斷崖が餘り急峻過ぎる。周圍が餘り幽絶過ぎる。途中丸木で作つた梯子で岩壁を攀ぢ登る所や、道が谷底へ抜け落ちて這つて進む所などがあるのが、原始を慕ふ自分達を何處までも喜ばせた。

しばらく行くと、祖母谷温泉の荒廢した建物に着いた。熱湯は石の間から、弗々として湧き出てゐた。浴槽の跡も、木の葉が飛び込んだまゝ、又砂が流れ込んだまゝ、豊富の湯は滾々として空しく流れ去つてゐた。その邊はもう河原を歩いて行ける程に、上流の開けた景色になつてゐた。祖父谷の方へ少し這入つて見たけれども、鐘釣温泉へ歸るのには、三時間かゝる筈だつたから引き返した。祖母谷の奥には餘程の熱湯が出てゐるものと見え、白い湯氣が濛々と立ち上るのを見た。

午後三時、祖母谷温泉から、もと來た道を歩き出した。黒部本流にかけてある吊橋に來た時、自分達は再び茲へ來る事が出來るかどうかと思ふと、非常に名殘惜しい感じがした。そして其の雄大にも壯麗な、人跡稀な幽絶境の片鱗なりとも、何等かの形で自分に止めて置きたいといふ衝動から、其の釣橋の上に恐る恐る坐つて、上流の廊下をスケッチした。

猿飛も過ぎ、小黒部谷も過ぎた頃、暮れ易い峽谷には早くも夕の色が現はれた。自分達はそれから急いだ。しまひにはフルスピードで歩いた。が夜の足は吾々の足よりも早かつた。鐘釣温泉を暗の中

に見出すまで、吾々は足許に少からざる不安を感じなければならぬ路を永く歩いた。

## 一〇、鐘釣溫泉から黒薙へ

自分達の初めの計畫は、この鐘釣から金澤へ一氣に歸るつもりだつたのだ。が黒部の精に憑かれた吾々は、何時までも、この谷の中に彷徨つてゐたかつた。雪が降り積もつて居られなくなるまでゞもゐたかつた。今後再び此處へ來る機會が、幸にもあるものと假定しても、秋にこの素晴らしい秋に、再び來る事が出來るかどうかは、全く疑問である。自分達は一日でも永くこの峽谷に居ることが出來るとすれば、それ丈の幸福と歡喜とが得られるものと信じた。吾々の行動は瞬間の情緒によつて支配された。そしてそれが聰明な裁決でゞもあるかのやうに、何等の不安もなく振舞つた。『人の生涯とその運命全體を決するのは、ただ瞬間のみてす。長い相談をして見ても、一つ一つの決定といふものは、皆瞬間の仕事です。』と、ゲエテが『ヘルマンとドロテア』の中に云つてゐるやうに、吾々の行動は、全く瞬間に支配されたのであつた。

朝の冷氣の裡に、鐘釣溫泉の湯は、人もゐないのに滾々と無限に湧き出ては、其の爽快な炭酸の味を含んだまゝ黒部の流れに空しくなつて行く。湯氣の立つタオルを下げて歸つた時、女中はいきなり窘める樣に

『何時までお湯に居るんですか』

と、云つた。

『面白いなあ。あんな湯。一日中漬かつてゐても倦きないね』

地球のぬくもりを、赤い皮膚に感じながら、答でない獨言のやうに云つた。

吾々が鐘釣溫泉を立つ時は、大分太陽が高くなつてゐるらしかつた。今日も上天氣である。初めの日

に愛本温泉の附近から一所になつた橋本さんの鑛山へ行くことに決めた。それも、ほんの出發する間際、草鞋をはきながら決定した事だつた。

新鐘釣温泉が見える對岸に行つた時、一昨日闇の中に吾々の行手を阻む巨人のやうに立つてゐた東鐘釣山が、大釣鐘を伏せたやうに、七十丈も碧空を立ち割つて聳えてゐた。優麗な色彩で覆はれた、嚴肅典整な花崗石の全石だ。大きな花輪を天空に捧げてゐるやう。ドッシリした巨大な石の頂きには、針葉樹の間に紅葉した闊葉樹が入り混じつてゐる。胸のあたりは開け擴げて、長く試練を受けた水夫の肌を思はすやうな、黒い岩肌を露はして、所々朱をなすりつけたやうに赤錆びてゐた。腰のあたりは、又美麗な紅葉でぐるりと取りまかれてゐるが、岩脚はやけに力強く、黒部の奔端に突つ込んでゐる。そして新鐘釣温泉の二階建は、その岩脚の踝の邊に、新しく立てゝある。こつちからは、蜘蛛の絲のやうな釣橋がかけてある。自然は人間の作業を輕侮してゐるやうに、大きく威張つて、而も美裝を凝らしてゐる。自分は、自然の威力を、痛快の感じを以て眺めた。

人間は、こつち側の河原の石の間から湧き出る湯を、水車仕掛のポンプで汲み上げて、長る長る樋て川の向ふへ導いてゐる。温泉場としては、周圍が餘り峻烈だ。ワイルドだ。が、それだけ痛快である。吾々は針金につかまりながら、そろりそろりと釣橋を渡つて、新鐘釣温泉へ行つた。そこで澁茶を呑んでキャラメルを食ひながら休んだ。

吾々が新鐘釣温泉を出て、對岸の似合谷の頭の美觀に見とれてゐた時、向ふから荷をかついだ爺さんがやつて來た。そしてろくに挨拶もしないで、何處から來た、何處へ行つて來た、此から何處へ行くと、まるで犯人を調べる巡査のやうに詳しく吾々に聞いても、この人氣のない山奥では、却つて嬉しい質問であつた。又こつちから地理を聞くと、親切に說明してくれる。山では凡ての人が淨化されるのだ。

黒薙の釣橋に行つたのは、午後一時過ぎだつた。自分達はもう今では釣橋に全く馴れてしまつた。釣橋の上で飯を食ふといふ事は、黒部の印象を深くする重要な手段でさへもあるかのやうに、三人とも危つかしい橋の上で晝飯にした。

黒薙溫泉は、その黒薙川と黒部川と、落ち合ふ所から十二町しかない。吾々は音神鑛山へ行く途中だつたから、この溫泉に立ち寄つて葉書を書いたりした。

## 一一、黒薙溫泉から音神鑛山へ

黒薙溫泉の主人は面白い男だ。

『滑らつしやんなッ。是から鑛山までの道は惡いが、滑らつしやんな。』

と、語尾のしやんなが、主人の口から出る時、眼がしくしくと動く。慈愛に富む爺さんが、孫を膝下に寄せて、お話をきかせるやうな態度で『滑らつしやんな』と、幾度となく云ふのが、自分には親しみ易いなつかしさで、くすぐられるやうな感じがした。

二見溫泉はこの黒薙から僅か五町しかない。五千六百間の木樋で湯を導いて、下流に愛本溫泉を開いたので、今は荒廢してゐる。草が莽々と生へて、建物は淋しく立つてゐた。此の邊から道が深山らしくなつてゐる。苔むした巨岩の間に、木の葉はうづ高く積つてゐる。自分達はその色づいた原始的の道を行くのを愉快に思つた。

やがて吾々は、ジッグザッグの急崖を、藤蔓につかまりながら登らなければならなかつた。その道を登りつめた時、初めてこの黒薙川の痛快さを悟つた。そしてこの黒部といふ谷は、一體どこまで痛快に出來てゐるんだらう。神秘の底はどこまで續いてゐるんだらう、吾々はその無盡藏に驚く許りであつた。この廊下は猿ヶ番場と云つてゐる所で、こつちの痩杉山（コブスギヤマ）の急崖が、前の鷄冠山（トッサカヤマ）（陸地測量部の

五萬分の一圖には突坂山となつてゐる）の急斜面とぶつつかりさうに近くなつて、溪聲は地の底からのやうに深い所に聞える。この黒薙谷は祖母谷より數等痛快な谷だ。祖母谷は温泉の附近に行くと、もう景色が開け、谷は淺くなつて平凡になるが、此の谷はいくら奥へ行つても凄い形相だ。北又谷でも柳又谷でも六兵衛谷でも、到る所廊下になつてゐる。又此の猿ヶ番場は、此の谷のあとひさよりも痛快だ。

吾々は、この猿ヶ番場の上て、栂や櫪が澤山生へてゐる如何にも深山幽谷らしい景觀を味つてから、急斜面の路を上つたり下つたりして、瘤杉谷も越えた。自分達は昨日のやうに又一昨日のやうに、暗くなつてからこの嶮悪な山道を歩くのを恐れて急いだ。人の來ない所だけに、極めて危なつかしい釣橋を渡つてから、しばらくすると、鑛山事務所の光が見えた。五時四十分で、もうそろそろ暮色が襲ひかけてゐた。事務所と云つてもまだ堀立小屋だつた。

『今晩は。來ましたよ！』

と、その小屋へ這入るなり云つた。橋本さんは初めこの突然の闖入者にびつくりしたやうな表情をされたが、直ぐ、

『さあ、よく入らつしやいました。』

と愛想よく云はれた。四五人の工夫は爐側にけげんな顔をしてゐた。

自分達はそれから、勸められるまゝ、河原に下りて風呂には入つた。周圍によく調和した面白い風呂であつた。夕飯には葡萄酒など御馳走になつたりした。山小屋の爐の火は、都會の者が想像する事も出來ぬ位、痛快な贅澤なものであつた。長さ一間位な木は普通だ。中には二間餘りもある大きな木も、そのまゝ爐に寢かして焚くのである。木はその厚い皮をピチパチ云はせて燃え上る。面白く見てゐると、

『全くの浮き世離れた奥山住ひて、一年中人ッ子一人訪ねて來るなんて云ふことはありませんでね。』

と、橋本さんは話しかけられた。

『實に面白いぢやありませんか。鹿の鳴く聲で昔を思ひ出したら、なほ風流ではありませんか。』

『いゝえ、ウンザリしますよ。初めて入らしつた方は面白くも思はれるでせうけれども、此處に一月なり二月なり居なければならぬとなると、やりきれませんね。毎日同じ事をしてゐると、退屈するのです。新聞や雜誌を持つて來ても讀んでしまへば、それつきりですからね。だからかう訪ねて來て下さる方があると、非常に嬉しいのです。』

何と熱烈な歡迎の辭であらう。自分は是ほど嬉しい歡迎を受けた事がない。

『癪に障つたとて、プイと隣りの家へ行くつていゝ譯にも行きませんし、米が無くなつたからとて直ぐ米屋に持つて來さす譯にも行かないのです。』

山小屋の火に顏をほてらしながら、夜十一時頃まで、色々な話をしたり、眞劍な山の生活を聞いたりした。

## 一二、カシ薙深層谷

朝は流石に寒むかつた。木の枕は頭が痛かつた。アセチリン瓦斯の光に照されて眠つた吾々は、工夫達が起き上つた時、一緒に起きた。下の河原へ楊子をくはへて降りて、冷たい水で顏を洗つた。

工夫達が道具を持つて、それぞれ穴へ出掛ける時、吾々は橋本さんの好意で佛茶屋の芳次郎さんの悴（せがれ）の、今年十六になる一少年に案內されて宮林の山を登つた。金澤には餘り紅葉も見えない十月廿日にこの黒薙川の奥は紅葉が過ぎてゐた。葉の落ち盡した樹々は、冬の戒律のやうに所々立つてゐた。

大部峻しい山を休み休み登つて行くと、石楠の叢林に來た。自分は、まだこんな澤山の石楠が、こんなに大きくなつてゐる所を見た事がない。ステッキになるやうなのが澤山ある。自分達はあれやこれやと探して、案内に來た少年の鉈で二三本形のいゝのを切つた。其の内一番太いのは、金澤へ歸つてから、持つて見ると、犬殺棒などよりも太いものであつた。然しこの太い石楠のステッキで、敷石を叩く時の音はカチーンといふいゝ音だ。是が黒部の音だと友達に誇つてゐる。

黒薙川は大きくルーブしてゐるので、この山を越えると再び河原へ出た。この山を越えなければ、到底この河原に出られないのだ。それ程恐ろしい斷崖になつて、この川は山の間をぐるりと彎曲して流れてゐるのである。

吾々は此の河原で幾時間も休んだ。そして少年が持つて來た釣針で岩魚を釣つたりして遊んだ。吾々は岩魚を釣りながら、だんだん奥の方へ進んでカシ薙深層谷まで行つた。途中の岩壁を横に這つて行く所などは、寫眞にでも撮つておきたかつた。

一時半頃元の所へ戻つて來て、火を焚いて飯を食つた。釣つた二匹の岩魚を木の枝にぶら下げて、朝越えた山を再び越えた。紅葉のすがれよ！何といふ眺めだらう！胸がかきむしられるやうだ。葉の落ち盡した樹であるが、ガサゴソ登つて行く時、人の顔が赤く照り映える紅葉もある。登りきつた時、猫又や清水の山々が見えた。途中に置いて行つた石楠のステッキを大事さうにかゝへて、峻しい下りを降りて小屋に歸つた。

夕暮近かつたので工夫達もぽつぽつ歸つて來た。そして自分達が不馴れの手つきで、石楠のステッキを鉈で切つてゐるのを手傳つてくれた。芳次郎さんも荷物の上に鐵砲を横にかついで歸つて來た。

夕食後吾々はステッキの製造に大部時間を費した。痛快に燃えよる山小屋の火の中へ、石楠を突つ

込んでは、其の焼け具合を見た。

『あなた方は山にエライ樂みがありやすね』

と、芳次郎さんが云つた。

『タントのお金を使つて、加賀の金澤からわざわざこんな山奥まで來られるてあ、よっ程山がお好きなのてありやすちや』

すると横から一人の工夫がこんな意味の事を云つた。金澤には日本三大公園の一つの兼六公園がある。その美しい公園に倦きて黒部へ來るといふのは、丁度絶世の美人を妻君にして置いて、道樂するやうなものだと。

自分は只笑つてゐた。

其の晩は、芳次郎さんから黒部の地理を色々と詳しく聞いた。元來が獵師て、夏には仲語(山案内)になつて山を歩くのだから、針ノ木以北、特に黒部の地理は非常に詳しいものだ。助七さんが五十五の老年期には入つて、稍頽勢が見える今ては、實際の所この芳次郎さんが、北アルプスの黒部附近の案内者としては隨一のものてあらう。

自分達は翌日金澤へ歸るか、それとも小川溫泉へ行つて、もう一日延ばすかといふ問題てしばらく迷つた。もう玆へ二度と來る事が出來るかどうか疑問であると思ふと、この絶好の機會を利用して行つて見たいといふ氣がむらむらと起る。が金澤を出てから大部長くなる。ともしたら學校て心配してゐるかもしれん、といふ微かな豫感もする。田島君は小川溫泉へ行かうと初め云つた。玉木君は餘り永くなるから歸らうと云つた。そして自分は其の歸る方に贊成した。

## 一三、音神鑛山—三日市—金澤

今日は金澤へ歸るのかと思ふと、又別の緊張を感じた。たつた一日て、この太古の世界から現代の都會へ達する事が出來るといふ事が、妙な謎のやうな氣がした。

朝起きると直ぐ昨夜の石楠のステッキを河邊に持つて行つて砂で磨いた。皆と一緒に朝飯をすますと、工夫達はそれぞれ仕度をし出した。鞴（ふいご）の所へ行つて金物を赤くしてはカチンカチンと道具をなほしてゐた。

自分達は八時頃小屋を辭した。愛本の自働車を利用して出來る丈け早く金澤に着くやうにと、吾々は急いで歩いた。一昨日は猿ヶ番場の上の道を通つたが、今日は下を通つた。兩岸がくつつき相に狹くなつてハング・オヴアしてゐるのだ。その斷崖の眞下の所に梯子が造らへてあつた。吾々がその丸木の梯子を降りると、水の中に材木が浮かせてある。その上を渡るのである。材木は流失しないやうに針金て岩にくつつけてある。

是が若し黒部て無くして他所にあるのてあつたら、それは非常な呼び物となつたてあらう。あの案外つまらない耶馬溪が、誇張した山陽の文筆によつて有名になつた樣に。自分は、此の猿ヶ番場は猿飛に次いて痛快な所だと思つた。

二見、黒薙の溫泉も素通りにして、吾々はどんどん急いだ。滋味に富む御馳走をうんと食はされた後のやうに、ユニークの黒部の奥の景を眺めて來た者の眼には、帽子を振上げ、飛び上つて喜ぶやうな刺戟の強い所は無くなつてゐた。『歸りにはつまらなくなる相だ』と、自分も半信半疑て云つて通つた所も、成程平凡になりつゝあつた。天才畫家の展覽會を見るやうだと激賞して通つた數日前の自分は、如何に程度低く天才を評價しやうとしたか。本當の大自然の天才に面接した時、自分は何とも云ふ事が出來なかつたてはないか。只あゝと云つて、涙ぐましいよろこびに充ちた丈けてあつたてはないか。

自分達が愛本溫泉に着いた時はまだ十二時前だつた。二時の自動車で直ぐ三日市へ行つて夕方五時頃には金澤へ着く豫定で急いだ。愛本へ着いたのは、丁度豫定の時間であつた。が不幸にして自動車は貸切になつてゐて、乘れなかつた。それで三時過ぎの自動車に乘つて、丁度雨が降り出して寒くなつた所を三日市まで一走りに走り着いた。

十月二十一日の午後八時過ぎ、吾々は意氣揚々として、金澤驛に下り立つた。電車の中で見た美人なども、妙にふやけた生氣のないものに見えた。

自分は豫定よりも、ずうと日數が延びたから、ともすると學校で心配してはゐはしないだらうか、といふ考が浮かんでゐた。それで下宿へ歸る前に、學校へ行つて見たら、果して大騒ぎが起り初めてゐた。

自分はそれから生徒監相良先生の所へ行つた。奈良ヶ嶽で吾々の先輩二人が、行方不明になつてから、丁度十年目だ相だ。而かも十年前の丁度今頃だつた相だ。自分が五日も歸らなかつたので『色々の場合を想像して見たが、堪へられなくなつて、父兄へ「歸りはせぬか」と電報を打つた。』と云はれた。自分は惡るい事をしたと思つた。その後二三日たつて、一部會の席上で自分は一部に對する希望やら何やらをしやべつた後、黒部の事を話して壇を下つた。すると溝淵校長が壇に立たれて、『廣瀬君は一向それ程にも思つてゐない樣だが、實は學校では非常に心配したのであつた。若しもう一日歸りがおくれたら、捜索隊を出したかも知れん。」と云はれた後、是が例になつて、學校を休んで旅行するなどいふ事が一校の風にならぬやうに皆に戒められた。

## 一四、結　末

『黒部の秋』の稿を結ぶに當つて、是非書かねばならぬ重要な事がある。此の谷に水力電氣の會社が

建たうとしてゐる事が第一のそれだ。

鷲羽岳に平和な産聲をあげた黒部川は、五色ヶ原や雲平の天國の雪の滴りを集めて、だん〳〵深い山懷から奥廊下の急峻な劍壁の間に進むにつれて、奔放の勢を逞して來る。そして斷崖が絶嶮を極めた下廊下に至り、三里の間に一千尺以上の落差を示して、激流奔逸、人跡未到の神秘境をなしてゐる。三共に下流の權利を占められた古河は、この多くの人が駄目だと見込んで放棄した上流へ目を付けて、今年の夏も探險隊を出して水力電氣の調査に着手したが、まんまと失敗してしまつた。自分は此の失敗を痛快に思つた『そんなに容易く、黒部の凡てが露かれてたまるものかい！』と、一人で嘯いたのである。

吾々が黒部に限りない興味を起すのは、其の自然が大きく痛快であるばかりでなく、かく不可解の世界が、奥にあるからである。原始のまゝ凡てが太古の貌で大正の時代に、力強くも堂々と出現してゐるからである。

自分は何時までも、この黒部谷に不可解の天地を保存して置きたい。何時までも原始の貌で繼續させて置きたい。吾々の興味に奥行があり、感覺に深みがある爲に。然し物質文明の大きな波動は必ず近い將來には、此の幽絶境にも及ぶだらう。既に今年の夏の古河探險隊が、黒部の本流を調査したのに競爭して、三共が特別の努力を以て今支流の猫又川の調査に着手してゐる。今年の雪が降り積るまでには、或は大體の調査がすむかも知れぬ。そして來年あたりには黒部に、電柱がによきによき立つかも知れぬ。自分はそれが非常に殘念である。が、それは自分の勢力以外の事だから仕方がない。

第二は此處の鑛物である。專門家は此處の鑛石の種類の多い點から黒部の谷は無限の寶庫であると云つてゐる。既に世に知られたものに大黒鑛山があり、小黒部鑛山がある。自分達が訪ねた音神鑛山がある。尤も孰れも小規模のもので、小黒部鑛山の如きは今は廢鑛同樣であり、其他も將來の大發展

は疑問であるが、然し試堀中のものが數多あるといふ。電氣會社が創設され、鑛山が開けて行けば、自然と此の黒部も俗化して來る。俗化すれば便利になるかも知れぬ。がそれだけ價値は下がるのだ。だから黒部へ行く人は早く行つた方がいゝ。一年でも一ヶ月でも早い丈いゝ。

夏の碧空に高く冴えて輝く雪の光や、千古の森に漂ふ不思議の香りに憬れて、又秋の蒼穹に絶大な花輪を美しく捧げ連ねたやうな滿山の紅葉と、人の魂をも吸ひ込むやうな碧潭の色を慕つて、アルペンストックを擔いだ人や、鍔の廣い帽子を冠つた婦人などが、年々歳々幾千人幾萬人となく、この黒部の谷へ、夏から秋にかけて陸續として押懸けて來るのは、餘り遠い未來ではなからう。そしてその崇高な大自然に接して人々が皆淨化され、元氣づけられて意氣揚々として、再び銘々の生活に勇ましく進むであらう。

# 高處の氣象現象に就て

藤原咲平

**一　氣溫**　氣溫は誰も知る通り高くなる程冷たくなる。其割合は時と場處によつて相違がある。大體に於ては海面上四千米位迄は百米突に就き攝氏〇・五度位づゝ減つて行くのであるが、其處から九千米位迄は次第に減る割合が增して百米突に對して約一度と云ふ所謂乾燥斷熱の遞減率（Lapse rate）に近づく。又四千米以下は此平均の値からの偏差が時によつて著しく、乾燥斷熱に近くなる事もあれば又逆に其値が小さくなつて遂に上も下も一樣の溫度になり遂には却つて上の方が溫度が高くなる樣の事さへも起る。此場合は遞減率は負となつたもので、所謂氣溫逆轉と名付ける現象である。

山に於ての氣溫の下り具合も大體は右に述べた樣なもので我筑波山に於ての觀測の結果は遞減率は百米に對して〇・六度と云ふ事になつた。

氣溫の逆轉は冬に於て主として起る。冬の夜間は逆轉が普通である。霜が低部には降りても高處には降りない場合のあるのは此爲である。

溫度日變化は平地では午前六時頃最低午後二時頃最高であるが山に上るに從ひ最高の起る時刻が次第に後れる。又最高と最低の差卽振幅も次第に減る。佛國巴里のエッフェル塔は高さ三百米であるが、最高の時間は一時間後れ、振幅は半減する。米國加州インデペンデンス（一一九一米）では振幅が十五度三で最高が午後二時に起り更に高いホイトニー山頂（四四一〇米）では振幅は五度に減り、最高は午後三時に起る。然るに自由大氣では或高さ以上は最高最低の起る時刻が逆になる。振幅は山と同樣に減る、米國マウントウェザーに於ての成績によれば山上（五五三米）では日中最高が起り日出少し前に最低が起るが、夏期ならば海面上二千米以上では最高が朝の七時に現はれる。冬は千五百米から已に此樣な調子となる。又高い處では一日二回の最高が起る。

低氣壓の中では氣溫は一般に低い、海面上千米位から九千米位迄は普通の場合に較べて約五度低い。九粁以上は次第に低氣壓の方が溫度が高くなる。此關係は從前の溫度が高くて低氣壓が出來ると云ふ考へを根本より打ち壞すものである。此冷氣の爲に特に暴風の際凍死者などが出來易い事と思ふ。

**二　氣壓**　氣壓の減り方は次の式で表はされる。

$$\log p = \log p_0 - \frac{h}{18400\,(H\alpha t)}$$

此P とP$_0$とは高處と低處の氣壓を水銀の粍で示したもの、其兩處の高さの差はhである。tは兩所の平均溫度、αは〇、〇〇三六六と云ふ常數である。

氣壓が低くなれば人間に影響を及ぼす。例へば脈搏數、呼吸數等が變はる、其關係は如何様のものかと云ふに昔から澤山の研究があり、電車や風船で高處に昇る場合と自分で歩いて上る場合とで差があり、又短時間で昇つたのと、高處及低處に永住して居る人々に對するのとで夫れ夫れ差がある。又山登りに馴れた人と馴れない人とでは一緒に昇つても其受ける影響に相違がある。是等は皆夫れ〳〵調査があるが、人種でも差があり、天候如何でも違ひ、仲々根氣よく統計でも取るのでなくては一定の値に到達するのは困難である。茲では其一例として長谷川氏が富士山で測つたものを示せば、氣壓が須走で約六十八糎六合目で約五十五糎、之に對して呼吸が一分二十四から三十に增し、脈搏が一分七十八から九十八に增して居る。

人間の昇つた最高の記錄はベルソン及ジューリングの兩人が風船で一九〇一年に一〇八〇〇米迄上昇したのである、此時にも及其前回上昇の時にも、九千米邊からは非常の困難で酸素吸入をしたにも拘はらず人事不省となつた。

山酔ひは通常五千米から運動でもすれば四千米位からも起る。八千六百米に於ては既に生命危險を伴ふ。

三　風　風は同じ氣流に屬する限りは高くなる程强さを增す。地物の影響のない上空では所謂流量不變の方則がなり立つ、換言すれば風速は密度に逆比例する。下層ではブラトケの式

$$V = 1.2 + 1.79h^{0.0236}$$

が極めて最近の式である。平地では大體晝間に風が强く夜は比較的弱い。山上では逆に夜になると强くなる。又風の方向は高處程右にソレル。日本附近の緯度では二三千米から上層には常に大循環に屬する西風が吹いて居る。大きな颱風でもあると時々東方に變はる。又赤道附近では大きな東風が不斷に吹いて居る。低氣壓颱風の際山上は特に荒れる。生命の危險を伴ふ事は人の知る處である。

**四　雨**　雨は高い處程強く多く降る。併し高山の頂上は却つて少い。八合目の邊に降雨最多の處がある。

**五　雲と霧**　山の霧は非常に濃くなる事がある。海で船が自由に航海の出來ない樣な濃霧でも山の霧に比べるとまるで對手にならない程薄いものである。海上では百米向ふの地物が見えなくなるのは可也の濃霧であるが、山では三四尺の向ふが見えなくなる事がある。此相違は何に依つて起るかと云ふに山の霧は上昇氣流て起り、海の霧は冷たい海水面上に暖氣流が來て冷える爲に起るのであるから前者は水滴の凝結が盛て後者ては夫れ程てない爲てある。

山て濃霧の爲に途を失ふて餓死すると云ふ樣な事が往々あるが、自分等も時々霧に卷かれた經驗がある、前に行く同行者の笠が半分しか見えない樣な事がある、少し離れると必ず聲をかけ合ふて居ないとはぐれてしまう。近頃は登山者はきつと磁石を持つて居るから方角の解らなくなる樣な事はあるまいが、山間の住民は霧に卷かれたなら草の莖の色を見て黑い方が南、白い方が北を示すと云ふ事實を知つて居る。火山地方て磁石の狂るふた場合などには現今ても此方法が有力てあらう。

雲の中て山と特に關係のあるのは先づ第一に山の横雲てあらう。此雲は天氣の惡るくなる前又は天氣のよくなりぎはに山の横に帶の樣にかゝる、又秋から冬になると朝な朝な天氣の良い時にもかゝる。學術的には此雲を層雲と云ふ、天氣の惡るいのに關係のある場合の横雲は此雲の上と下とて空氣の溫度に相違があり、冷たい方の層の影響て暖かい方の層の水蒸氣が凝結して雲となるもので、氣界の稍混亂して居るのを示す。又天氣の良い時に起るものは主として夜間の放冷の爲に起るのである。古語には是等を遠山かつら島山かつら等と呼びなした相である。

次には積雲が著しい。晝間谷風となつて上昇する氣流中には自然雲を生ずる。遠く是を望めば綿が山頂を包んだ樣なむく〳〵とした狀況を呈する。山上で是を見れば最初は岩角や谷間から湧き起る雲

霧であるが、（朝凡そ時刻がきまつて居る。山に馴れた者は夫れを知つて居る。行者が霧を起すと云ふのも時刻を計つて祈る眞似をするので山岳の初心者等に對する示威としては充分であらう）午後になると濛々として周圍を取り卷く霧となる。此爲に登山者が多くは眼界を遮られるのである。

次に著しいのは笠雲である。此雲は水平な氣流が山に會して幾分押し上り、山を越すと幾分又下り、時には恰かも淺瀬の漣波が小石の樣な地物で起ると同樣に山から風下に二三の波形を生ずる。此際此水平氣流の上方に別の氣層があれば此氣層の底面は山を越す氣流の爲に山の形に押し上げられる。其爲に此上つた部分に雲を生ずるので、其雲たるや特長として上面が滑かで、笠とかレンズとか、海月とかで形容せられる樣な形をして居る。此笠雲は氣流の變を示すものであるから、昔しから農漁等の人々によりて注意せられたものである。

雲の海は風船などから見た場合には、種々の層狀雲を上面から見れば毎も雲の海の觀を呈するが、山は普通大して高くない爲に山上で見得る雲の海は大概は前述の層雲の上面を見るものである。雲の海は名の樣に雲が海の樣な有樣を呈し、大波小波があり、特に處々高峯が雲の海を貫いて居る場合には夫れが島であるかの樣に見え甚壯大の觀を與へる事は山岳會員の洽ねく知る處と思ふ、此雲海の中と外とでは氣溫に逆轉のあるのを普通とする。

**六　光象**　（イ）**下た日**　是れは氷りの雲が下方にある時に日が其雲に映つて見えるので、下の方に見えるから假に下日（したび）と云ふと云ふたのである。山で見える事は稀である。

（ロ）**風船の陰映**　風船の陰映が、下方の靄に映じて前方に頂點があり向ふへ擴がつた三角形に見える。此理由は餘り明瞭にはまだ解らない。

（ハ）**ブロッケンのお化**　山上から見ると人物の影が雲に映つて大きな化者の樣に見える事があると云ふ。此理由もまだ充分明でないから御覽になつた方はどうぞ其時の狀況を細大洩さず其場で御記しあ

つて御發表を願ひたい。

(ニ)御來迎(ごらいこう)　光環またはゆき中に人物が見えるので、佛の御迎とも考へ又は臨終の時極樂へ行く相だとも稱へ又ブロッケン山では矢張りお化けの仲間に入れてある。此現象は霧滴の爲に太陽光線が廻折作用を受けて反射し來るもので、自分の影法師のまはりにのみ見える。鮮な色合を持ち青が中赤が外である。二重又は三重に見える事もある。此現象と親類なのは太陽の周りに半徑二三度の環として見える光環である。此光環は氷晶の雲にも見えるや否やが近來少しく問題に登つた。もし氷晶雲(又は霧)に現はれた光環又は御來迎を御觀測の方があつたら成る可く詳しい記事を添へて御知らせを願へれば好都合である。

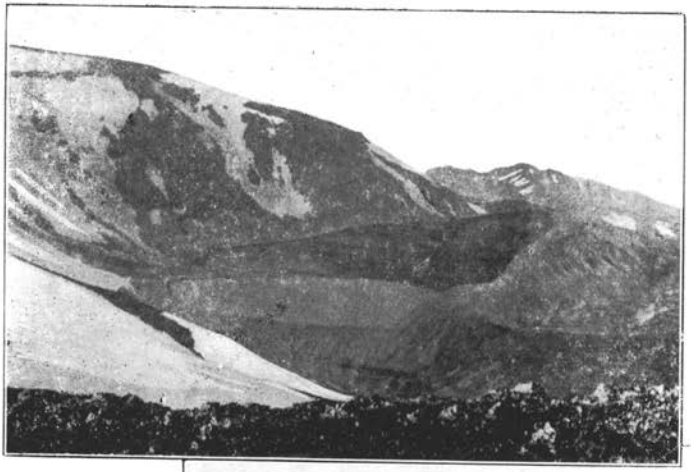
(ホ)蜃氣樓的現象　此現象の中には遠近の變と云つて遠い處が近く見える事又は近い處が遠く見える事などがある。數里の外にあるものが手に取る如くに見える事があると云ふ。又變相と云ふて長いものが短かく見えたり細いものが太く見えたりする事もある。飛驒の山中には日の當り工合から此樣に見える谷間があると云ふ。又怪光と云ふのは夜變な光りの見える事である。例へば一の光りの上に一直線に無數の光りが見えたりなどする。此等は皆多く山地で見られる蜃氣樓的現象である。又日月が出沒の際に變形して見えるのも一種の蜃氣樓的現象で山では殊に見え易い。

其他山上では空の色が濃く朝夕燒も鮮である是は山では塵埃が少ないからである。塵埃は朝夕燒などの色を惡るくする。

**七　電氣現象**　山では落雷は特に多く又激しい事もある。山の電話線を傳つて落雷が岩室や人家に入り害をした事がある。今年四月二十二日筑波山頂の落雷は可也劇しいものであつた、數ヶ處地を掘起したり、持ち上げたり鐵線電線を溶かしたり燃やしたりし、建物からは盛にエルモ火を發した。落雷は前後三回起つたが、五亭から見て居ると火の玉が電線に沿ふて數個頂上から下るのが見えたと云ふ。

山上で雷に會ふたならば打たれぬ樣注意するが肝心である。

**八　霧氷**　霧氷は冬期山上の一偉觀たるを失はぬ。九州では花ボロと云ひ、四國では吹きつけと云ふ。伊吹では電話線を一と冬の間にすつかり切斷された。何しろ一尺から氷がつくので迚もたまるものではない。此現象は高處には大概は起り風船が此爲に苦しめられた例もある。併し空氣の割合に乾いた處では起つても大害を呈するには至らぬ樣子である。三峯山などでは電話線が害を受けない。（大正九年五月）



刈田岳頂上より御釜を望む
左端 能野岳の一部
右端中央火口丘五色岳

五月の御前岳
屏風より

御前岳賽の磧上部の一溪
より水引入道を望む
羽田次郎氏撮影

# 雜錄

## ○仙臺附近の山々

### 一　仙臺近郊

奥州仙臺一名森の都といふ。成程木の多い街て、廣瀬川の橋を渡つて向山に上つて見ると、一寸見ては街筋も分らない位色々の樹木が繁り合つて、青く美しく、夕方ともなれば、森の蔭から亞炭の煙が靜かに暮れ行く空に立上る。市の先は宮城野の平野が二三里續いて、直に太平洋の大海原となる。春の霞の頃、時鳥の啼く頃、もみぢする頃、何れの時に於ても此處に立つ人は、何等喧騒の聲なく過ぎる平和の氣を泌々と感ずるであらう。然も同時に、東北の方に根を張つた一群の山々に眼をとめる事を忘れてはならない。此の船形山續き、泉、三峰、後白髪（ウシロシラヒゲ）の一脈が、如何に、丘陵を負ひ森林に包まれた都」の自然に調和を與へてゐるかといふ事は、見る人の腦裏に深く刻まれるに相違ない。若し吾々の主義に從つて更に多くの山を見やうとするならば、今立つ岡を奥へ（北へ）散歩を續けて、八丁平といふ臺地の任意の地點に立つがよからう。又鈴蘭に名を得た臺ノ原の松の岡に駈け上るもよい。さうすると泉岳、後白髪山等の他に、向山では見えなかつた藏王（ザワウ）、屏風の雄姿を始め、國境に連亘する山々の飛舞するが如き面白き山貌を眺める事が出來る。此等が私の在仙三年間、機會ある毎に探つて見た「貴き氣分の源泉」であつた。

斯様にして仙臺といふ所は、信濃甲斐越中何れの國の都にも見られぬ、大小様々の自然の恵みに豐富な所である。二三日の休みに草鞋がけで出かけるに恰好な谷や山が少くない上に、又學校の歸りや食後の散歩にぶら〳〵歩くに便利な場所は到る處にある。其時々に私達は、東京在住の人々が雜木林の外れから遠く丹澤山、秩父山、赤城、日光乃至上越國境の山脈のあたりをグラスの影に認めるより以上に、抱擁された暖き心持を以て山に

對する事が出來た。嬉しさに堪えられなくて、同好の先輩に手紙を出して、山岳巡禮の昔話を長い返事に樂しむ事もあつた。それやこれと思出すまゝを書けば、仙臺市から二町も離れないで、いゝ加減な頁數を占めさうだ。夫では山岳といふ名に對して餘りに僭越過ぎる嫌があるから、ぼつ〳〵山道に分け入る事にする。

仙臺附近は地質學の立場からいふと大變面白い處なんださうで、其方面に志す友人や、先輩の理科大學の人達によく講釋を聞かされたものだが、今は大抵忘れてしまつた。然し漫然と仙臺背後の臺地を歩く丈でも可成愉快だ。向山から餘り高低も無しに三里も歩くと、冬は銀白色の藏王・屏風を眺めたり、太白山（ウドガモリ）や蕃山（バンザン）を見たり、樅の林の傍を通つたりして、何時の間にか半圓を畫いて、イハウチハに名高い龜岡八幡の岡に來てしまふ。向を見ると國見峠の丘陵が此方とは違つてゆつたりして、南に低下すると臺ノ原の沮洳地が開ける。其丘陵を越して泉岳や又鮫の齒を植えつけた樣な七ッ森の奇峰が散らばり、尙よく晴れた日には遠く、粟駒山のなだらかなアウトラインが心待ちの眼に映じて來る。かうして一つ所から他の山岳や丘陵を見ると、其處が又どんなに優れた眺望だらうと限りなく想像されて、次の日曜を期待するのが例であつた。

せい〳〵一千尺許の處で甚だ恐縮するが、二つ三つ散歩の思出を記して見る。

今云つた樣に八丁平の臺地は一番近い散歩の場所であるが、此臺地の眞中には、尙ほ辰ノ口（タツ）といふ、特殊の興味をそゝる一つの澤がある。出口は天守臺の西方に廣瀬川に開いてゐるが、第三紀層の化石が出るといふので採集に入る者が少くない。入口からすでに兩岸切り立つ如くなるのみならず、脆い地層であるから、手がかりや足場も危いので、一度澤に入つた者は復た入口に戻るか、或は中頃まで溯つて工兵のつけた道に上るかしなければならない。澤の幅は入口で一二間、進むに從つて狹く、タルのある處等は兩岸に手足を突張つて渡つたりする。決して恐しい所ではないが、市の近くにかういふ險谷（ゴルジ）を見る事は案外な思がす

る。尤も地層が弱いから河床の樣子が頻繁に變つて、一度など大きな池（堰止湖）が出來て氷が張らなければ通れない事もあつた。次に行つて見るともう池は消えてしまつて、へつりや徒渉の危險もなくなつた事に氣が付いた。遠くから見ると平べつたい穩かな丘陵も、近づいて吟味するとこんな處もあつて中々見捨てる事が出來ない。

丁度秋の初であつた。辰ノ口澤を奥まで上りつめて太白山へ遠足した事がある。例によつて膝から下はヅブ濡れになつて、最初十町許は遺憾なく四肢をこき使つてゆく。中程の橋のある處で澤は二つに分れたから左の方を溯るともう危い所はなく、川床の一枚岩の上をぴしや〳〵歩いてどん詰（つま）の藪をくぐりぬけてほつと息をつく。入口から凡二十町程であらう。妙に窮屈な谷から離れて明い氣持になり乍ら、今度は臺地の西端のモミ、カヤの森林を下つて蕃山（バンザン）の麓に出た。此の下り道から太白山（海拔三百二十一米）を見ると、頭に毛の生へた樣に木が茂つてゐるのが氣になるが、丁度鎗ヶ岳のやうに尖つて居て、見た處傾斜四十五度に近い。此時は太白山と初見參だつたのですつかり喜んでしまつた。何でも早く登つちまはうといふので、蕃山の麓から長い坂やトンネル等を通つて佐保山といふ處に出る。其から鳥居、石段、本社と上つて其後から急な道を一氣に上つてしまふ。頂上は主に楢であつたと思ふが、一間位の高さに一杯木が生へてゐて、其間には安山岩（？）の石塊がごろ〳〵轉（ころが）り、小さな石の祠がその中に鎭座してゐる。多少木立が邪魔になるが、其でも眞色の國境山脈、山下の幾重かの丘陵、名取川の水田、佐保山の針葉樹林など眺められて、感じの惡い所ではない。日本山岳志にも出てゐるが、海上の漁舟は此山を陸地の目標とすると云ふ。太白山は其に上るのも、山下の五つの池を探るのも、又佐保山の森林を逍遙するのも、興味の深い事であつたから、四季を通じてよく遊びに行つた。秋は秋でカラマツの黃葉が氣持よかつた。冬は山の眺めとクリスマスツリー（樅）の雪景色、初夏は若葉とレンゲツヽジ、ヤマトキサウの花が眼もさめるばかりであつた。仙臺から往復六里位で、長町から鐵

道馬車の便もあるので、市の人々殊に學生などはきつと出かける處だ。あゝいふ場所が東京附近にあつたらと、よく出來ない相談を空想の神に持かけて見る。

仙臺から見える近い山で太白山のも一つ向に、同じ樣に傾斜の急な瓶ケ森（宛字）といふのがある。名取川の傍、秋保温泉の手前の赤石といふ處にある。太白山よりも少しく高く（三四四米）見た形も特徴があるが、山名を知つてる人もない位で、何處から登るか分らなかつた。けれども坊主山だし多分眺望がいゝだらうと友達を誘つて出かける。赤石で馬車を下りて、百姓に教へられた通り、カヤを刈つた山腹をいきなり登る。丁度四月の終であつたから、草の根株の間からはタチツボスミレ、ニホンタチツボスミレ等可愛らしい花が盛に咲き出て居る、此山の傾斜度も太白山に優るとも劣りはない。やがて瓶底の頭に立つて見ると、成程開けてゐて晴々する。丁度天氣が曇つて高い山は見えなかつたが、さうでなかつたなら絶好の展望臺であらうと思はれる。此山の北鄰には尚愛宕山、鹿ノ上といふ同じ樣に尖つた小山が續いてゐる。一體仙臺附近、廣く言へば東北地方には、かうした尖形の小峯が可成多いので、其多くはトロイデであらうと思はれるが、中にも山名にモリといふ稱呼を持つたものが特に注意される。地質學的に此等の特異な地形を說明したならば面白い事と思ふが、遺憾乍ら十分な研究は未だされてゐない樣に聞いた。「モリ」は古代アイス語の山（？）なる語の轉化であるといふ人もあつたが、此事は未だ深く調べて見ない。特志の方に御教示を願ひたいものである。

太白山の東一里許の距離に蕃山（又は盤山）といふ多小尾根を張つた山がある。海抜三五六米であるから、未だ丘陵の域を脫してゐないのだが、仙臺附近では一寸山らしい氣のする處だ。山腹に無人の荒寺がある事や、近い昔バンズバン三郎といふ山賊が棲んで居たといふ巷說を聞くことが、南方の明く開けた都から來た私どもにとつて見逃すことの出來ない興味であつた。秋はもみじが美しい、一里許も尾根を步いて西風蕃山（三七三米）

から廣瀬川に下りて、三瀧の栗飯を食つて歸る。春の頃一人ぶら〳〵出かけて行つて樅の林の下に大きなマヒヅルサウを見付けた時は、北の國は有難いなと思つた。

仙臺近郊で散歩の場所といへば、まだ此他に權現森と國見峠の丘陵がある。權現森は海拔二九六米、作並街道の落合附近から上ると都合がいゝ。山道らしいじめ〳〵した林の中を上つてゆく、頂上は太白山の樣に狹いが立派な堂が立つてゐる。山下の景色は太白山の方が奥深い感がするが、遠山の眺めは此方がいゝ樣だ。頂上から南へ下りると大石ヶ原といふ所に出る、之から國見峠を越えて市に入つて行くのがいかにも氣持のよい散歩だ。此の峠だの、根ノ白石に通ふ中山峠だのは、夕暮に霞む山を見ながら、炭を積んだ駄馬を避けながら、懷古的な寂しい氣分に浸つて歩くにふさはしい。一度シラネアフヒを搜しに來て、道を外れて無暗に歩いた時、肝心のものは見付からないで、コバノトネリコの花の匂が何ともなつかしくてならなかつた記憶がある。

さて以上で山を背景とした近郊の話は打切りとする。

二　七ッ森

低い割に特異な山容を有してゐるので目に立つ山だ。此山は日本山岳志にも記文が載つてゐて、誰かの漢詩などもあつたが、昔から得てかういふ孤立した奇峰は人の眼をひくと見える。地形圖吉岡圖幅を見ても分る通り、山體は小さいもので、山地ならば單に隆起の集合に過ぎないであらう。然し船形火山脈の最東端で、比較的低夷な丘陵上に崛起してゐる丈、數字の示す高さ以上に著しく見えるのである。今最南から順次に記して見ると次のやうである。

| | |
|---|---|
| 笹倉山 | 五〇六米 |
| 松倉山 | 二九一米 |
| 撫倉山 | 約三六〇米 |
| 大倉山 | 約三二〇米 |
| 鉢倉山 | 約二八〇米 |
| 鎌倉山 | 約三〇〇米 |
| 遂倉山 | 三〇七米 |

尙此最北に白湯山（ハクユウザン）といふ小峰が附屬してゐるが、此は仙臺からは見えない。

私が此を探つて見たのは十二月末の事であつた。友と二人て七北田街道を北行して、其夜は吉岡町に一泊する。此迄の道は平凡だが山の眺めは徐々に變つて。泉岳は段々丸くなり北泉岳の山體が次第に現はれて、其北向きの長い裾野がはつきりと眼に入つて來る。七ツ森は亦近づくせいだか、恐しくしやちこばつて、仙臺て見る樣な美しさがなくなつて來る。吉岡の宿屋の二階からは、七ツの內北の一群が今度は多少面白く見られる。其上に泉岳、又右に三ツ峰と船形山がまつ白に光つてゐた。

次の日はよく晴れた。約一里許西方に歩いて、時々スケッチや寫眞を取る爲に思はぬ長休みをする。船形山は松島灣て見る樣に、其名に背かず逆さにした船形を少し右に（北に）傾けて眞白に輝く。三峰は仙臺て見る方向と直角の位置に見る爲に、餘程尖つて三ツの頭も重つて見える。何だか歐羅巴の山ても見る樣な氣がしてうつとりしてしまふ。其左には例の北泉岳が感じのよいスロープを長く〳〵引張つて、山體の上下が白と黑に染め分けられてゐるのも何時になく面白い。泉岳は此處から見た處、頂上下の爆裂火口（？）の壁が眞正面に見える故か、誠に奇怪な姿である。田圃を横切つて白湯山を右に一まはりすると、七ツ森最高の笹倉山が雪を澤山殘して、恐しく急に高聳する。先づ第一番は白湯山と鎌倉山との間に入る。美事な栗林に分け入ると道は忽ち炭燒小屋にぶつかる。之から先怪しげな急な路をぐん〳〵上ると、直ぐに鞍部に出てしまつた。始めはピーク・ハンターを極めこんで、七ツの峰を殘らず片附ける積りであつたが、來て見ると馬鹿々々しいので、木に包まれた高い遂倉山を背後にして、低い方の鎌倉山に登る。尾根には小徑がついて居て、途中に藥師か何かの石像があつた。頂上はさう廣くない、木は餘り生へて居ないので見晴しは惡くはない。中でも撫倉山はトロイデとも思へぬ美事な尾根を持つてゐるのが氣に入つてしまひ、泉岳や其他の山は其頂上から飽くまで見ることにしようと相談

して、まつしぐらに駈け下りる。そして小一時間もして撫倉の麓に達して見ると、あるべき筈の小路がいつのまにか消えてしまふ。それでも草は枯れてゐるから、さして苦しみもせずに上つてゆく。鎌倉山より高い丈、中々頂上に着かないで、所々ラバ見たいな岩の上で息を入れる。終に尾根に上つて頂上に立つと、も一つ先に小さな岩の峯がある。一寸尾根が窓の様になつてゐて、何だか其方が高さうに見えるので、おろした荷を取り上げて其處へ行く。岩上から北方を見ると尾根は急傾斜で、松の美しい大倉山の方へ下つてゆく。(此處は蟻の戸渡りといつて、七ッ森中の難所であるさうだ。)さて時計を見ると、午前中ゆつくりしてゐたので、もう五時頃であつた。そこで遠くの山もそこ〳〵に眺めて、立ち上る。今度は上つた處を右に見て尾根通り南端まで行つて、山腹を滑る様に下りる。麓の森林に入つて道を捜したが、どうしても分らない。もう暗くなつて、藪の中は益々足掻がとれなくなる。結局小さな澤を下つてやつと水田の縁に出られた。(澤の内に何のまじなひか知らぬが、大きな龜が岩面に描かれてあつた)。夫から一里許進んで宮床村のある豪農の家に泊めてもらつた。恐らく八時頃であつたらう。其夜私は疲勞の爲であつたか大變魘されて、眼が醒めても變であつたが、其家の内儀さんが「客人どうなさつたか」と云つて、寶舟に似た家傳の妙藥を持つて來て呉れたのは有難かつた。

翌朝其家の老翁から色々と山の話を聞いた。別に手帳にも記して置かなかつたので、大分忘れてしまつたが、何でも船形山には昔切支丹伴天連の妙術を使ふ山伏が棲んで居たが、北條時賴入道巡遊の折に終に社領取上げの追放といふやうな奇拔な話などがあつた。然し船形山が昔は五所山參詣と稱して繁昌したのは事實であるらしい。又七ッ森は藥師如來を祀つてあるので、年に一回七ッ駈けと稱し、笹倉を第一番に七ッの峯を日一杯に登りまはる風習が今でもあるさうだ。中々七ッを一日にまはるには骨が折れるといふ事であつた。こんな話を聞いて居たので、其日も出發は後れたが、笹倉を登つて根ノ白石まで行く事は出來た。笹倉

山は七ッ森の最高峯で、此丈特に西南に離れてゐる。道は相當によく付けてある。頂上近くに立派な杉木立が續いて、其一番高みには一寸大きなお堂がある。風が強いから建物の爲には林もいゝだらうが、眺望はからきし無い。あてが外れたのでろく〳〵休みもせず、別の道を下りて、落葉の上で鑵詰のパインアップルを貪つた。これから根ノ白石までは丘陵がこみあつてゐて、歩いても愉快だ。鳥も澤山居る樣であつた。根ノ白石で一泊して翌日は泉岳に登るつもりであつたが、宵から白い物が降り出して歩まないので、あくる日は雪達磨になつて仙臺に歸つた。

三　泉岳

何といつても仙臺から見える山の内では泉岳（南泉岳）が一番眼につきやすく、從つて最もポピュラーである。標高一一七二米。やはり高い方ではないが、國境から直角に派出してゐる船形火山群の最東端を占めてゐる丈に、海と山と合はせた眺望は中々いゝ。山頂には三吉神社（サンキチ）が祀つてあつて麓の人民には岳山（タケヤマ）として尊敬されてゐる。尚泉岳は仙臺にとつては經濟關係の深い牧場や薪炭業の爲に、道は可成縱横に開けて、殆どあらゆる方面から登攀し得る便がある。唯大倉川即定義（チヤウキ）方面からの登路は無い樣で、其丈森林も殘つて居やうと思はれるが、終に探る機會は無かつた。根ノ白石方面は大概木も切り盡されて、深林の趣は北泉岳へても行かなければ見られないが、單に壯快な眺望を貪る爲の登山には、誂向きの山である。傾斜ものろいし（芳ノ平道などは頂上まで牛が上る位だ）、危險な處もなし、先づ以て散歩程度の山かも知れない。

丁度大正四年の秋が酣の頃になつて、新雪を裝うた國境の船形山から東に連る一脈が、國見峠の上に鮮かに現れて來た。其一端にある泉岳は仙臺に最近い丈に、裾も大きく、紅葉の色も奥床しく見える。それでいよ〳〵十月の中旬に此地方て私には最初の山旅が始められた。

仙臺市の北から荒巻溫泉、丸田澤池を經て、元七北田（モトナキタ）に出ると、泉岳は平田の向ふに一きは大きく高く立派に聳えて、山頂から芳ノ平の裾までなだ

らかな傾斜と、東側山腹の刳れた様な急壁と、椀の様な黒鼻山が殊に面白く眺められる。午後の四時頃根ノ白石中ノ茶屋といふ宿屋に着いて、中山峠から正道を通つて來た人達と一所になる。宿には髪の白い婆さんがゐて、色々と山の話をして呉れる。昔は岳に熊が澤山ゐて里を荒しまはつたといふ様なことも語られる。あくる日どや〳〵と仕度をして六時頃宿を出た。天氣は日本晴で此なら眺望はいゝなと思ふと、足の進みもおのづと早い。一里許て屏風岳（二九一）を後に見て上ノ原に出る。左へ行くと芳ノ平道になるが、私達は舊登山道から登るつもりて右の道を進む。十町許で棚田に離れて裾野の小隆起を瓜先上りに上つて行く。雜木はもう黄ばんだのや赤くなつたのやがあらかた落葉してゐる。一つの坂を越えるとだら〳〵と下りになつて、牧場の小屋が私達の眼の前に現れる。蘭山が泉岳と相對して、其間を火口瀬の朴澤川が落ちこんで流れる。之から山頂まで約一里、七八百米の上りだ。小屋から左に岳の方に向つて怪しげな小徑を辿ると、カヤが續いたり、涸池の傍へ出たりして、直きに泉岳の東側の急壁の下に出る。左上に見える芳ノ平の最も上の段に近い尾根通りを休み〳〵登る。泉岳は五月から十月まで牛の放牧をしてゐる位で、木のある所は少いが、夫でもかうした急な山腹には大きなミヅナラの林などが見られる。鐵鎖を備へてある程道は急でさう馬鹿には出來ない。此上りが四百米も續いて、少し傾斜が鈍つたなと思ふと、尾根の形はなくなつてしまつて、山の額に出る。少し右に廻つて無暗に駈け上ると、頂上のお堂が五段返しのからくりの様に段々とせり上つて來た。丁度十一時頃だから枯草の上に腰を下ろして中食にする。山頂は東西に長く丸みを帶びてゐる。安山岩の破片の間に僅かな灌木が高さ二尺にも滿たず妙にひねくれて生へてゐるなど一寸高い山の趣がある。松島は勿論手に取る如く見え、根ノ白石から、中山峠、仙臺まではつきり見える。振り返つて國境の方を眺めると、一鞍部を隔てゝ北泉岳の黒い頭が峙ち、更に西に三峰のふくらんだ頂上が見え、其左には後白髪山が尨大な山體を横へてゐる。そ

れから左、寒風山、北面白山、大東岳（オホアヅマダケ）、二口峠のあたり、雁戸山、藏王、屏風の諸山は皆美しい白雪を被つて、さながら小アルプスの觀がある。三峰の左には羽前の月山が銀白に光つて見えた。下山は芳ノ平道を取り、お堂から直に南側の岩石の間を下りて、上る時左に見た段の上に出る。向ふに小さい池が水を湛えてゐる。夫からは樂な下りで、かやの上を滑つたり、森に入つたりして裾野の芳ノ平に下つて行く、黒鼻山は北泉岳から延びた平な尾根に續いて、いかにも歩きよささうな處だ。芳ノ平を通り過ぎて登り道に合し、根ノ白石に歸ると、赤い柿が山盛になつて一行を待つてゐた。

此が第一回の登山であつたが、翌年の秋に今度は裏道から登つて見やうと、天幕を持つて三四人で出かける。先づ例の牧場の小屋附近で野營をして、次の日は午前七時頃、天幕を殘したまゝ朴澤川の谷に下りて、蘭山（アラヤキ）（七六一米）の鼻を過ぎ、小澤の合流點から左へ入つてまもなく、たるんだ尾根の上に上つて行く。此邊も樹木は至つて少く、傾斜二十度許の草生である。折しも天氣は惡くなつてぽつ〳〵降り出して來たが、北泉岳からタガラ森、高倉山、蘭山と續く山の斜面は多くの闊葉樹が眞紅に染つて夫が熊笹の青い色と反映していかにも美しい。尾根の形はすぐに失せて道は一寸した高原に出る。朴澤川の谷は其向に深く隱れて山の色も何だか奥深くなつて來る。泉岳は南方に急斜面を見せ、行手には北泉岳の黒い姿が霧にけぶる。少し西へ進むと牧場の柵があつて、夫を越えると熊笹の間に綺麗な水がさら〳〵と流れてゐる。流の奥はもう北泉岳泉岳の鞍部に近い所で、一軒の大きな炭燒小屋が現れる。此處で道はなくなつたが、眞直ぐにヤブの中をかき分けて、急な山側を二十分も上ると不意に明くなつて、鞍部の小隆起の南へ出る。夫から草本帶の樣な工合になつてゐる裸の石ころ道を東に上つて、頂上のお堂に出た。何しろ冷い雨が降つてゐては眺望も何もあつたものではない、そこで又動き出して芳ノ平道から遠くはなれに天幕に戻る。丁度午後二時頃だつたが、出がけに足を傷めて殘つた一人が暖

かさうな飯と汁とを用意して待つてゐた。食事がすんでから其日は根ノ白石まで行つて泊り、翌日天幕は馬方に賴んで仙臺に歸つた。始めて裏山を探つたものだか、思つた通り此方はまだひどく荒されてゐないで、殊に朴澤川の谷から北西にかけてはいゝ所があると思つた。

又紀元節の日にスキー登山をした事もある。根ノ白石に一泊の後、凡二里許は歩いて、夫からスキーを足につけた、後滑りしない樣に荒繩を卷きつけてをく。此日は可成氣溫が高く、頂上でも攝氏零度以上であつた位だから、芳ノ平の緩傾斜は溶けた雪がスキーに粘り付いて重くて困つた。途中で小屋が見つかつたので一休して中食する。夫から黑鼻山の屋根との間にある澤の右側を上り詰める。急な所は電光形に上つて行くから時間つぶしだ。泉岳の南の急斜面は雪も少く、且つ岩石が裸出してゐるので、澤の源頭のシラカバ、カツラ、ブナなどの林中を上つて、鞍部近くからスキーをぬいで、岩石の間をひた上りに上つた。頂上着が丁度午後四時頃で、上りに八時間（中食後約一時間）を要したわけになる。空も曇つて來て、北泉岳の方では黑木の林がごう〳〵鳴つてゐる。萬一吹雪にでもなつたら、危險だから急いで元の林の中に下りて、スキーをつけて滑り出す。夕方であるから雪が再び凍つて中々とまらない。下りは早いもので、途中例の小屋で又食事で一時間程費したが、麓まで三時間位で下りてしまつた。尤も小屋から以下はとつぷり日が暮れて、上りのスキーの跡をさがすに可成骨を折つた。

前述の通り此方面で山らしい旅をしようとするには、裏山まはりをするに限る。北泉岳はまだ探られてゐないし、又その裏の桑沼附近も依然として吾々の間には秘密になつてゐた。そこで四月の終二人連れて復もや根ノ白石に出懸けた。其日は尙も進んで桑沼の炭燒の部落に泊らうといふ計畫で、案內者に米を背負はして泉岳の裾野を辿つて行く。牧場の小屋から朴澤川の緣に下りて、裏山道と離れ尙も川べりをついて行く。此邊の谷の景色が一寸いゝ。川が二分する處から其間の尾根を上つて行く。樹木は大抵闊葉樹で、折々モミやツ

ガの青い枝が出てゐる。木の下は一面に大きなイハウチハの群生で、之なら採つても絶滅する事はあるまいと、安心して採集籠に詰め込んだ。一休して振り返ると松島灣は島影帆影淡く、其左には北上山脈の低い山が草色の柔い肌を示して、大浪の様に連つてゐる。道はやがて小さい山を右に半周して、村界からだら〳〵下りになる。其處はもう桑沼の平の領域で、東北地方に固有なブナの深林は、まだ根元に澤山の殘雪を見せて、一面に展開する。吉岡の傍を流れる吉田川の水源は、此峠のすぐ下に一つの澤となつて現れる。澤は勿論雪で埋つて、向側の岸には美事な雪堤がある。之から數丁進むと又一つの澤に出て（下の方で前の者と合する）、夫を越えると、其處が今夜の宿泊地、炭燒小屋の小部落であつた。此處は一帶に平地になつてゐて澤のゆるい流の中には夢の様に白いミヅバセウの花が幾つも咲いてゐる。慾張つて根を掘らうと手を突込んで見たが、雪溶けの水の冷さに閉口して止めてしまつた。日暮なので桑沼行は明日に延して、一軒の小屋に案内を乞ふた。「湯に入れ」といふからシャツを脱いで、野天の風呂桶につかる。頭は夕風に冷えて思切り寒い。ぢやぶ〳〵湯を浴びながら、北泉岳やブナの森林を見てゐるのは痛快だ。かういふ趣は其後大黒鑛山でも、仁田河内岳の伐採組の小屋でも味はつたが、時候の故であつたか、桑沼の平の野天風呂が最も深い印象を殘してゐる。海拔八百米もある處に來て、然も春先の事とて、一枚の毛布に二人寐ては、寒くて十分に眠れなかつた。翌朝十町許の間ブナ、カツラ、カンバの類の林の中を歩いて桑沼を見に行く。此邊は一帶に傾斜が緩かで、歩いてゐても至極呑氣だ。夏の間こんな處で天幕生活をしてゐたらいゝなと思つたが、さて夏になると人間といふ奴は、冬の間恐れて近づきもしなかつた三千米の高山の懷に飛び込みたくなるから、あてになつたものではない。桑沼は小倉氏に據ると爆裂火口趾であるといふ。長さ六町許幅一二町の小さい湖だが、水は眞青で周圍が靜かな深林であるだけに、「森に包まれた湖」といふにふさはしい所である。二人はメールヘンの生れる南獨逸のワルドを想像

したりした。兼て此邊は猿の澤山棲んでゐる處だと聞いてゐたが、小屋の人の話によると其は秋に見る事で、しかも話程ではないらしい。猿は兎に角秋の頃來て見るも一興であらう。桑沼から先へ進んで眺望を得やうと思つたが、行つても〳〵雪と裸の林とで飽きてしまつたから、僅かに蛇ヶ岳の續きの花染山と前船形山の一部らしいのを見た丈で滿足して小屋に戻つた。此日は北泉岳に登つて大澤村の方の裾合谷に下りる積りであつたがミヅバセウ其他の採集品が重くなつてしまつたので、おとなしく同じ道を戻る事にした。朴澤川に下りてからは牧場の方へ行かないで、谷について下り、瀧などを見物して朴澤に出る。夫から根ノ白石を經て、中山峠は星光の中に越えた。

四　船形連山

船形山の一郡は藏王山を別として、陸羽の國境を栗駒山に到る迄の内最も興味深い處である。此邊の地質研究は震災豫防調査會の小倉勉氏が發表されたし、又古い植物學雜誌を見ると船形山植物目錄もあつて、全山の樣子も大體知る事が出來る。此山塊の大部分は常に仙臺市から直接望み得るので、從つて何時かは探りたいと思つてゐたし、又計畫を立た事も再三に止まらなかつたが、天候や其他の事情に制せられて、終に泉岳の他は一指をも染むる事が出來なかつたのは甚だ遺憾である。上述の次第であるから茲には單に聞き得た事柄だけをざつと紹介するにとゞめて置く。

此連山は一の火山脈であつて、荒神山の北部から始まり、陸羽の國境上を東南に走つて、主峯船形山となり、之より略〻東南東の方向に延びて泉岳に連る一群を成してゐる。船形山から東は宮城縣内に屬し、黒川郡と宮城郡とを境してゐる。船形山の南西に楠峯、仙臺カゴ、白髪山等があり、夫から方向を西に轉じて山形縣に入る山脈は、船形火山群とは地質時代を異にするといふ。然し私は例によつて便宜上此等を一纏めにして置く。

| | | |
|---|---|---|
| 主峯 | 船形山（一名五所山） | 一五〇〇米 |
| 北方面 | 荒神山 | 一二七〇米 |
| | 黒森 | 一〇八三米 |
| 東方面 | 前船形山 | 一三一二米 |

| | |
|---|---|
| 蛇ケ岳 | 約一四〇〇米 |
| 三峰山（一名坊主山） | 一四一八米 |
| 後白髪山 | 一四二三米 |
| 北泉岳 | 一二五三米 |
| 泉岳（泉岳火山） | 一一七二米 |
| 西方面 楠峰 | 一二一一米 |
| 仙臺カゴ | 約一二六〇米 |
| 白髪山 | 一二八四米 |
| 最上カゴ | 約一二〇〇米 |
| 柴倉山 | 一二七六米 |
| 黒伏山 | 一二二七米 |
| 甑岳 | 一〇一六米 |

尙ほ白髪山から南は寒風山（一一一七米）を經て關山峠、約六六〇米）の低所に達する。

此等は陸測五萬の地形圖に依たもので、果して其名稱が正當であるか否かは未だ斷言出來ない。船形山は正稱であらう、五所山といふのは寧ろ神社の名である、船岳といふのも別稱として考へ得るが、通稱は船形山又は五所山である。山麓では五所山の方が通りがいゝ。

此内船形山に偃松のある事は確實で、丁度千四百米位から植物帶が變て來ると假定して、蛇ケ岳三峰、白髪山等が案外に高山的な狀態を有してゐるかも知れない。殘雪は七月始め迄可成ある樣に見える。

船形山は山形縣の北村山郡から登る本道がある。所謂五所山道と稱して、宮城縣内の登路よりはずつといゝ樣だ。仙臺から行くとすれば、吉岡町から入つて荒川を上るか、又は色麻村から保野川を上るのである。この二道が合する所は湯谷地といつて、之から小火口湖鏡ケ池を右にして山頂に達する。宮城郡大澤村の定義鑛泉（定義如來の參詣人が相當にある處である。定義とは源定義が發心入道して定義と改め、此地を開いたのだといふ。前に書くのを忘れたから補足して置くが、泉岳も義經の臣泉三郎が據つた處だといふ。どつちも人の口から聞いた事である）から大倉川を溯つて國境に出て、山形方面の道と合する者もあるが、此は最も荒廢してゐるらしい。根ノ白石からは北泉岳を經て郡界の切開を傳て行けば行かれるとの事

だ。然しヤブはひどいと思ふ。寧ろ仙臺からは定義道を取るか、又は根ノ白石から桑沼の林道を越えて荒川に出て登るが得策であらう。尚此他山形縣村山郡の常盤村から谷を溯り、仙臺カゴの側に出て本道と合する道がある。此道は谷添ひで、瀧なども見て行かれるから頗る面白からう。

尚ほ秋の紅葉であるとか、猿の話であるとか、カゴといふ面白い山の事だとか、話せば色々あるが、要するに此等は又聞きで、いはゞ憶説に類するものだから止めにしてをく。唯一つ斷て置きたいのは、藏王山塊の明い雄大な趣に比し、此連山は妙に奥深い秘密のありさうに見える事で、たとへ雪が積んで近く見えても、何かしら遠い〳〵他國の山である様な氣がする。其點では甚だ秩父的な山である。日本風景論に據ると船形山も荒神山も、共に仙臺市の北方に望み得る様に書いてあるが、實際のところ荒神山は全然見えないし、船形山も大部分は隱されて、僅かに山頂と思はれる白い輝が冬から春にかけて、三峰山と後白髪山との間に折々現れるに適ぎない。仙臺から見て最も偉大に見えるのは後白髪山で、山腹の深い森林は容易に純白にはならないが、その右に見える三峰山は數條の雪渓をかけて、晩春の頃の美しさは賞讃せずにはゐられない。夫から山稜はぐつと低下して最後に黒絲威しの北泉岳となり、泉岳の肩越しに眠れる都を睨まへてゐる。（日本山嶽志八四頁及五一八頁參照）

五　作並溫泉と關山峠

仙臺から山形縣へ跨える國境山脈の峠には、關山峠、二口峠、笹谷峠の三者がある。一度は斯いふ峠道を通つて向側に出て見ないと山の様子はほんとに分らない。私は笹谷峠は全然知らず、二口峠も此方側の一部分しか知らないから、僅かに關山峠越のみを以て山を語るのは甚だ大膽な話であるが、元々この一文はこんな所も日本の國内にあるといふ事を御知らせするに過ぎないのであるから、餘り深く咎めないで戴きたい。

或年の十一月の半ばに寮の遠足に加つて作並街道を山に向つた。仙臺市水道の水源なる廣瀬川を溯るのであるが、生憎道は河岸から離れてゐて、

廣瀨村川崎附近迄は谷の景色も見られない。唯松林や桑畑の中を通つたりして時に船形連山、藏王山塊、雁戸山（ガンド）、大東岳（アヅマ）等を眺めながら行く。川崎で新川（ニッカハ）に分れてから漸く川の上流らしくなつて來る。並木といふ所で右手に鎌倉山（五二〇米）の急な小山容を仰ぐ。此も太白山（ウドガモリ）と同樣に曰くのある山だ。夫から段々森林が多くなつて、漸て作並溫泉に着く。此溫泉は仙臺から六里許西北に當り、交通の便は惡いが湯がきくといふのでよく人の來る所である。四邊に大して高い山もないし、谷も小さいから、取り立てゝいふ程の景色はない。けれども昔から、旅人に知られた所であるし、又宿の者も無愛想乍ら決して貪るやうなことはないから、靜かな氣持で一泊しやうといふには先づいゝ所である。秋保溫泉の何となく土ッ臭いのや、デカタン的な鳴子の溫泉に比して、どれ丈我黨には好ましいか知れない。面白いのは湯に通ふ事で、先づ室から出て段々を下りて、更に廊下の段々を二三町も下る、さうすると急に暖かさうな湯氣が濛々と川床の浴槽から湧いて來る。湯にひたつて川の流を見ながら水上に浮く楓の一葉を想像する。いつもの事ながら溫泉は惡くないと思ふ。然し惡いのは例の長廊下の上りで、秋も少し晩くなると歸りにはすつかり溫もりがさめてしまつて、また湯の方へ駈け下りると云ふことになる。全くかうも家と溫泉とが離れてゐて、然も全然廊下續きである樣な處はついぞ見た事もない。

あくる日寮の人々に別れて五六人で宿を立つた。關山峠の道は一間幅の大道路で、終始廣瀨川の上流に添ふてゐる。眺望は峠附近が指呼さるゝのみで高い山は見えない。坂下から一里半許は殆ど平らで、其から一度本道は右に大迂回をして眼の上の峠に向つてゐる。作並溫泉は至つて面白い所であつたが、關山峠は期待に背いた平凡な峠だ。然し來ないよりはいゝと思ひ乍ら頂上に近付くと、忽ち眞闇なトンネルに入つて、つまり國境のラインでなくセクションを通過して、山形縣に出てしまふ。トンネルの長さは三町位あつたと思ふ。峰に上つても大した眺望は得られさうもないからずん〳〵下りてしまふ。二人丈は頑張つて寫

眞器を持つて八〇二米の一隆起に上つて行く。峠道は寧ろ山形縣の方が面白い。正面に月山の雄大な姿を見て行かれる。黄に赤に染つた木の葉も、この側の方が豐富だ。道の傾斜は自轉車でも走れる位だから、誰も休まうといふ者もなく、直に關山に來てしまふ。慥か關山から一里半も手前であつたか、澤の岐れ道に左五所山道などと書いた棒杭が立つてゐた。此て見ても山形人の方が山に對する尊敬の念が強い樣に思ふ。又此間に一寸美事な瀑布が一つあつて、木蔭から眺める氣持も惡くはない。關山から原宿、夫から赤松の林の中を一直線に神町に出て停車場に入つた。北東に千十五米の甑岳が急峻な山容を聳立させてゐる（一體山形方面から見た國境山脈の側面は、仙臺方面から望むよりも多角的だ）、新莊まで奥羽線、夫から陸羽線をまはつて青葉城下に戻つた。

六　大東岳

關山峠から笹谷峠迄の間は、二口峠とそれに附屬してゐる盤神山の他に有名なるものはない。此盤神山はバンズと訛つて發音される、バンズ山といつて特別に一つの山體を示すのか、或は盤神岩（後述）のある山といふ概念に過ぎないのかは、後日の研究に待つとして、二口峠の奇勝は、山形縣下の山ノ寺の背景として其地方の人口に膾炙した所である。

北から始めて面白山（一二六四米）一〇四四米の無名峰、南面白山（一二二五米）、國境から少し南に外れて大東岳（一三六六米）、國境上の小東岳（一三〇米）、一二二七米の一峰、二口峠、一二四〇米及一三四四米の一峰、其東方に國境を離れて神室岳（一三五三米）、續いて國境上に一四六米の一峰を起し、低下して笹谷峠（九〇六米）の鞍部となつてゐる。此等を假に一群として取扱ふと、標高こそ最高が千三百六十米餘で甚だ心細い次第であるが、地形圖に見られる通り一帶の山勢は頗る急で、然も小隆起に富み、且山稜線の彎曲屈折甚しい點に於ては、船形山群藏王山塊にも見られない、又東北地方を通じて一寸ないやうな趣がある。春の半頃に演習で名取川の河口に行つたことがある。夜が明けて見ると國境の連山は、殘雪美

しく朝日に輝いて、屏風の様に立列んでゐる、其時切り立つた屏風岳よりも、鯨の様な熊野岳よりも、又「北にあたりて雪白き山あり問へば」とでもいひたい船形山よりも面白く見たのは、恰かも山の精靈の舞踏するが如き恠奇な形容を呈した此一團であつた。中にも大東岳は峨々たるバンズ山(?)の右に蛸入道の様な大頭を振り立てて、正に一群の音頭取の様に見えたのは快哉を禁じ得なかつた。泉岳で見た時も亦此山が最も眼についた。當時國境の山々の名を一々知つてゐる人も無かつたので、私はよく市外の丘陵に出かけて行つて、地圖と磁石と山とを睨めつこしては、段々に指名して行つた。大東岳といふ山が確定し、尚此山が愛宕山から見える事も分つた時は、先づ第二にはこの山に足跡を印したいといふ希望が燃えた。

面白山は仙臺市外の臺ノ原からよく見えるが、恐しく多角的な、此邊火山の多い所には珍しい山容である。此山は山ノ寺の奥ノ院と俗に唱へて、山ノ寺方面から登る道があるさうである。頂上には何か權現様を祀つてあるといふ。面白山の北にはワックラ山といふ九百米程度の山がある筈である。川崎圖幅を見ると、面白山の南方一〇四四米の峰の北肩を山形縣から里道が通じて、高倉山に連なる尾根の九二五米の北方で消えてゐるが、恐らく此は高倉山の鑛山に通ずる道であらう。

二口峠は名取郡から山ノ寺へ越える本道であるが、尚此他に大東岳麓のオナメ澤を溯つて、小東岳の南方を通過する道と、二口峠の途中から瀨原山(一一八二米)の方へまはつて、高澤を經て山ノ寺から一里許下に出る道とがある。尤も此等の側道がよくついてゐるかどうかは疑問で、二口峠附近で道を誤つて死んだとか助けられたとかいふ話はよく耳にする。此邊の地形は複雜してゐるから、不馴な者には一寸面倒であらうと思ふ。バンズ岩の正體は明かでないが、秋保村野尻の獵師の話によつて判斷すると、二口峠本道の北側一〇八六米の獨立標高點から、約二十町許東方に續いてゐる斷崖の標が「盤神山の岩」である。尚オナメ澤の北側にもナライバンズ岩といふのがあつて、ナライは西風だと解すると、何に對して西方なのだ

か一寸分らない。友人の話によると二口峠の西方面にもバンズ岩といふのがあつたといふ。要するに二口峠附近の山は、東西兩面とも斯ういふ種類の岩壁が到る處にあつて、何とか名を付けて見たいものと思へる。

二口峠から南方に一二四〇米の一峰を經て一三四四米の比較的高い山がある。其東方の神室岳（一三五三）より低いが、山頂が苗場山のやうに高原をなしてゐるのが面白い。陸測五萬の山形圖幅には山名を記入してないが、古い分縣地圖（明治三十七年版）を見ると、笹谷峠と藏王火山の地藏岳との間に草口山といふ名を記して（此は先づ雁戸山に當る）、笹谷峠二口峠の間郡界の處に神仙岳といふのを置いてある。郡界は陸測五萬分一圖と比較して、神仙岳といふのが先づ一三四四米の山に相當するが、一方日本山嶽志を引用して見ると、「神仙嶽（別稱篠谷嶺）、陸前國柴田郡羽前國南村山郡に跨る、柴田郡川崎村大字今宿より二里にして其山頂に達す、標高三千百六十四尺。

左鞘嶺奥羽之界、西北望月山、山峽有雪。　細井平洲

四穿左鞘嶺頭雲　指點西東奥羽分　疑見月山陰蘂雪　秋陽曉出素羅裙。

左鞘山中、有仙人澡、其傍架大石梁、蓋鬼工神造也、雨不見。　同人

仙人峽上雨蒼茫　難蹈雲根問鬼梁　我有文壺耀幽僻　山靈何事惜風光」

是に據ると篠谷嶺は笹谷峠に通じ、今宿から峠の頂上迄は約三里あり、標高三千百六十四尺といふのも笹谷峠舊道の頂上、有耶無耶關の附近大凡九百四十米に略一致する。尚又細井平洲は此舊道を通つて此詩を詠じたものと思はれる。何れにせよ、私は一三四四米の山名を斷定するに足る程の證據は持つてゐない、後日の調査で明かにしたいと思ふ。

兎に角笹谷峠を通つて見るのも一興であらう。一三四四米の峯から南は一一四六米の峯を經て笹谷峠となり、それから小さい然し美しい雁戸山の裾野となつて二三の高峯を崛起する。最高點は一四八四米六で、此等の山は寧ろピークといふにふさはしい急峻なアウトラインを見せてゐる。藏王山よりも美しいと思つたのが此山であつた。登る

道は確かではないが關澤、寶澤、川崎の諸村から小徑が峯迄ついてゐるらしい。雁戸山と藏王山の間の低所は、此邊の山には珍しい片麻岩の層が露出してゐて、藏王山からの縱走に興味を唆られたものであつたが、終に目的を果さなかつた。

五月中旬仙臺では鈴蘭が咲き、杜鵑がそろ〳〵林中を飛びまはる頃、長町から馬車鐵道に乘つて名取川を上流に向ふ。太白山の下をトンネルで通り抜け、生出村の水田を半周すると名取川に添ふやうになる。兩岸が高いので景色は惡くない。瓶ヶ森の下を通る途中首を出して見ると、行手に春霞の中から持長ある大東岳の山容が眼に入る。其左にはバンズ岩附近の千米內外の山が鋭い角を表はして見える。大東岳を遠望して不思議と思ふのは、新雪の後とか晩春雪の少なくなつた頃には、きつと山腹に一直線に水平の雪の條が現はれることだ。馬車は湯元の手前で終點となる。迎ひに來た宿の番頭に荷物を托して覗橋を渡る。此處は川が一寸狹くなつて、兩岸に所謂奇岩怪石が峙ち、水は奔湍碧流をなして、稍見るに足るものがある。此から數丁上つて湯元溫泉の佐勘といふに立ち寄り、一浴後朝食を濟まして、釣橋を渡つて對岸の二口街道に出で、長袋、馬場など云ふ所を過ぎ、三里許で名取川の右岸に移る（此手前の芋峠と白澤峠〔假稱〕との間に戸神山〔五〇五米〕といふ尖つた小山が見える、此も例のウドガ森式だ）。今迄は田や畑が多かつたせいか道も平凡であつたが、此橋から先はやつと山に入つて行く氣がする。一寸火山の裾野の樣な所を通ると、瀧原といふ部落に來て道は二つに分れる。右に行くと對岸の森安に到るので、不動瀑の瀑壺を探るつもりなら此道を行つて、橋から川原に下りて岩壁に添うて上るがよい。其頃の私は谷の趣味といふより寧ろピークハンターであつたから、別に岩壁と水といふものに興を惹かれないで、街道を進んで不動堂の背後のヤブを崖端迄出たに過ぎなかつた。瀑は高さ五六丈もあつたと思ふ。中々立派な景色で川の兩岸の岩壁も深い谷を思はせる樣な趣があつた。再び道に戻つて先へ進むと南方の鷹ノ巢山から延びた山足が急に迫つて、谷の風景を一段とよく

して見せる。その山足をV字形に廻つて高原狀の處へ出ると、向ふに野尻の部落が淋しく旅人を迎へて呉れる。見すぼらしい宿屋に草鞋をぬいで、其晩は佐藤某といふ老獵師を呼んでもらふ。當人は明日婚禮の仲人をするといふので、其息が案内する事に定つたが、馳走してやつたウヰスキーを珍しさうに飲んで、ぽつ〳〵山の話をして呉れる。其話によると、此邊の山歩きは三月が最もよい、今頃からはヤブが茂つて、遠い所へ一氣に登る山には困難であるといふ。成程商賣柄の言草だと思つた。尙ほ雪の中で夜營する方法等も教へて呉れた。大東岳へはコナメ澤又はアラド川のススジ澤といふのを上つて行かれるといふ。

次の日も矢張天氣はいゝので、勇み立つて野尻を出發する。十町も行かない内に名取川を左岸に渡る。もう大東岳の頂上は其胸に隱れて見えない。右の方の支流がアラド川であるが、此方が川の樣子も美事である樣に思つた。本流の左岸を峠道に從つて上ると、又十數町で本小屋に達する。樵夫の道はコナメ澤に入つて行く、澤の入口にシラネアフヒが澤山咲いて居たが、案内の少年はヤマボタンだと教へて呉れた。コナメ澤を十五六町溯つて右側の極く小さいタデシ澤といふのを上つて尾根に出る。道は殆ど無いといつてもいゝ位微かに笹がくれに上つて行く。左手にはオナメ澤の谷が見える、あれがナライバンズの岩だと教へて呉れたが、昨日教へてもらつたのとは方向が反對であつた。一〇二三米の隆起を越えて復た上りとなる。木は色々生へてゐたが、主として闊葉樹でまだ新芽もふかない内は山も明るい、花はマンサク、コブシ、シャクナゲの蕾などで、下草にはセンボンヤリ、タチツボスミレ等の外にイハウチハの桃色の花辨がいかにもいぢらしい。再び熊笹の間に入つてぴし〳〵はねるのを踏みのけてやつと大ダルミの一端へ辿り上つた。最初大東岳に注意して地形圖を見た時、山頂附近のコントール・ラインが大分離れてゐるのが面白く思つたが、來て見ると高度の低い悲しさには、色々の木殊にカンバの類が一面に茂つてゐて、歩行が更に捗らない。其處でタルミの緣を雪を踏んで廻つて、三角點に

近づかうとしたが、灌木の林叢は益〻激しく邪魔をするので、辛うじて數歩を進み得たに過ぎぬ。とう〳〵意氣地なくも最高點は放擲して雪の上に坐つてしまつた。山上のクルミは南東に傾斜してゐるから無論山形方面は見えない。藏王山と雁戸山、神室岳のあたりも途中木立の間に見た切りで、今はてんで分らぬ。仕方がないから雪を着にしてウヰスキーを飲みながら泉岳の方を眺める。此處から船形山の一群がどういふ風に見えたかは、うつかりして何も書いて置かなかつたので忘れてしまつた。下山も大體上りの道を辿つて再び野尻に下ると午後の三時である。急いで湯元温泉に歸つて一泊する。丁度作並温泉から高倉山を探つてこゝに來た友人二人と一所になつて、俗客に負けず大に騷ぐ。次の日他の二人は太白山にまはつたが、大東岳のヤブでひどく苦しめられた揚句なので、もう歩くのはいやになつたから、又馬車で歸仙してしまつた。

### 七　藏王山

藏王山（ザウワウサン）は屢々本誌に記載されてゐるから、讀者は既に御承知の筈である。私共は藏王山の主峯刈田岳（カツタ）、熊野岳と共に、南方の屏風岳、御前岳（ゴゼン）、後烏帽子岳（エボシ）、及杉ヶ峯などをも同じグループに入れて、南藏王、北藏王等と呼んでゐたが、これも勿論便宜上からであることを斷つて置きたい。此山塊は標高千八百米に達するもの三座、千七百米の者三座、千六百米の者も亦三座を數へる程あつて、規模も相當に大きいから、東北地方旅行に際して登山計畫の中に入れても惡くはないと思ふ。此山の大體の記事は嘗て二高山岳會から「藏王山」と題して本誌に揭出したから、今は局部的の話に止めて置くことにする。

一體此等の山は其特長として極めて小局部を除いては、山勢がなだらかで、且つ賽の磧といふやうな廣い高原が山腹に開けてゐる爲に非常に長閑な氣持がする。其他火口湖の御釜、濁川の斷崖、澄川の瀑布等があり、後烏帽子岳、杉ヶ峯、屏風山背の密林や、御前岳の裾野など、風景の變化に乏しくない。然も至極登り易い山なのだから、謂はゞ吾々が所有する天然公園と等しいものであ

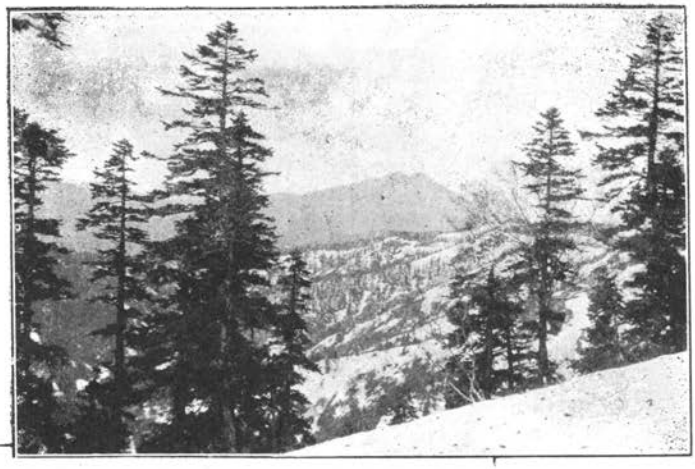
る。こういふ山地で仙臺二中の教員生徒十數名が昨年の秋慘死したのは不思議といへばそれ迄であるが、其原因は要するに矢張山に對する準備智識の足りなかつた一事に歸することを得ると思ふ。

初めて此山群に足を蹈入れたのは、大正四年の秋であつた。友と二人で白石迄汽車に乘つて、其處から御前岳の麓の軍馬補充部出張所迄行き、附近の炭燒小屋に泊めて貰ひ、次の日裾野を上つて賽ノ磧に出た。まだ山の中腹で千米を僅か越した許だが、イハカガミ、イブキジャカウサウ其他の高山植物の霜枯れた葉を見た時、僅に千米餘の所にこれらの植物があるのかと大に驚嘆した。そして傾斜三十度の山の胸を上つて御前岳の頂上に立つた。屏風岳は北に當つて大きな山背を展開する。アイハギの峯から南屏風に上ると、シラベやハヒマツの香り、ガンカウラン、コケモモの實などて、唯もう嬉しさの餘り所々飛び廻つた末、熊の様に寢そべつてしまつた。次の年の春には五人連れで鎌先溫泉に行き、次の日御前岳から火口壁を傳つて南屏風、北屏風、水引入道と縱走した。其時の紀行は本誌に載せてある。

其年の秋の初に又御前岳に遊び、略ゝ此邊も見盡したので、今度は北瀧王に出かけた。秋季皇靈祭の頃であつたらう、北白河で汽車を下りて宮から永野に出て、西に向つて靑麻(アヲソ)山（此山は二重火山であつて、七九九米九の峯には蠶の神が祀つてある、正月の初積雪を蹈んで宮から上つた事がある、最高點大森は約八一〇米。）の麓を廻つて行く。此附近は梨を栽培してゐる所が多く、赤坊の頭程のものが一個二錢許であつた。夫を買つて食べながら歩く。馬車鐵道は其年の春から輕便鐵道となつて、永野遠刈田(トラガッタ)間を一日四回位往復する。遠刈田の溫泉場は用も無いので通り拔けて、落葉松の林を左の細徑へ入ると松川を渡つて、之からが上りとなる。左の方に後鳥帽子岳が尖つて、山腹以上は針葉樹で眞黑だが、裾野は草が一面に生へて冬はいゝスキーの場所であらうと思はれる。此處は七日原と唱へて仙臺の早川氏の牧場になつてゐる。刈田岳の登山道は、松川の支流澄川濁川の間の尾根をだら〳〵上つて行くので、巓て草生の丘

からミヅナラの美事な森林に入り、急に深山の氣が身に泌む樣になる。靑根溫泉へ下る道と別れて三町程進めばお堂と小屋があつて山の番人に聲をかけられる。此處で登山料を金拾錢宛取られるさうであるが、私は要求されなかつた。小屋の前に「高山植物採集を禁ず」と書いた小林區の札が立つてゐる。それから尙もミヅナラの深林を上ること十町許の處に汚い茶店がある、直ぐ先は澁川の不動のの瀧で、高さは六七丈も或は其以上もあらうか、兩側が甚しく急で可なり立派な谷に見える。不動ノ茶屋から十町も進むとそろ〳〵木立が疎らに、然も妙にひねくれて來て、俄かに高山に上つて來た感がする。もう日は暮れてしまつたので此處から新關溫泉まで未知の道は覺束ない、丁度山番の小屋があつたから（地藏瀧の下方）是れ幸ひと泊りこんでしまつた。

翌朝未明に小屋を出て、灌木帶を突切るともう前面は廣大な賽ノ磧で、南は後鳥帽子、北屏風、杉ケ峯、北は雁戸山遠くは船形山の一群が手に取る如く近く見える。一二四六米の三角點の岩上で一休して、刈田、五色、熊野の諸岳を仰ぐ。山の傾斜は極く緩やかなのだから、賽ノ磧から見る岳の姿も何處となくのんびりしてゐる。私どもは眼の痛くなる樣な銳い峯頭や、晝なほ暗き密林幽谷といふよりも、廣くのびやかな火山のアウトラインに親しみ易いやうに思ふ。三角點から朝日に照らされながら右の道を辿り、コメバツガザクラやミネズワウの大株を踏んで行くと、約十町で道は下る樣になる。新關溫泉迄約一丁としてあるから、どん〳〵下つて行くと濁川の谷までは中々遠い。眞實の所五六町も下つて橋を渡つて溫泉宿の方へ上つて行くと、物好きにも宿の下の段に八角の大天幕を張つた一行が食事の仕度中である。待つ間の暇つぶしに湯に入りに行くと硫化水素の臭でむつとする。新關溫泉は熊野岳の直下海拔千百六十米の處にあつて一寸風變りの溫泉だ。靑根溫泉は湯は上高地溫泉の樣に綺麗だといふが此處よりは低い。嵐氣肌を襲ふて忽ちにして俗塵を去るといふのが、高所にある溫泉の特徵であらう。然し惜しい事には溫泉宿が天下一と自稱する



會津駒ヶ岳中腹より望める
燧ヶ岳

同上稍上部より燧ヶ岳、
大津岐峠、景鶴山(?)を
望む

會津駒ヶ岳中腹より同山の
一支峰を望む

渡邊正雄氏撮影
(大正七年六月下旬)

丈けに、盛場の時に來たら全くうんざりすること請合ひだ。五色岳の左下に當つて不歸瀧がある。

朝食が濟むと十五六人が一群となつて名號峰（一四九一米）の西南に出る小徑を上つた。山の鼻一つ越してバイケイサウのによき〳〵生へた小さい澤を渡つて山腹にかゝると、一帶に灌木の多い間にちよい〳〵コメツガ、シラベ、トドマツの類があつて、凡千四百米位の處に來て始めて偃松が現れる。山腹ではあり他にも木の多い爲に、幹も曲らず五尺許の高さにすつくと立つてゐる。もう尾根の上も近い。上り切ると名號峯の方にも山形縣の東澤村の谷の方にも路が通じてゐる。私達は左へ（西南へ）たるんだ尾根の上を通つて熊野岳に近づく。此方から見ると熊野岳は赤茶けた山體を鯨の様にのさばらしてゐる。道は丁度針ノ木の遠華岳の様な處で、ハヒマツは餘り見ないが、所々にミネズワウ、ガンカウラン、シラタマノキ、クロマメノキ、ツガザクラ及其他の禾本莎草の類がザラ〳〵の斜面を覆ひ、時にはその礫（コイシ）まじりの原土（サンヰル）の中に大きなコマクサを見た。信州産の物と違つてどっちかと言へば寒地植物の形態である。（此コマクサも元は藏王山の名物であつたが今は殆ど絶滅しかかつてゐる）。コマクサの斜面から一寸急になつて熔岩の間を通つて頂上に出る。山頂は東西に長く可なり廣い。東端に熊野神社があり、西端には三角點と石小屋がある。石小屋といふても四方五尺許りの高さに石を積み重ねたもので屋根はない。眺望は素派らしいものだ。仙臺附近では第一等であらう。前面には月山、朝日岳、鳥海山が見える。飯豐山は吾妻火山群の一際奥に横はつてゐる。鳥海山も月山もいゝが、飯豐の雄大、大朝日の尖鋭が美事であつた、兩方とも山腹に可成長い雪渓が見えた。今は九月の末だから春から夏にかけてはどんなに美しい雪かと想像される。眼を轉じて北方を見ると、雁戸山の峻峰は此處から見ると重り合つて、その右左りに丸みのあるしかも急な國境の山が幾つも〳〵見える。一寸南アルプスの違り方に似て居ると思つた。東面は勿論海が見える。私達は凡一時間許は靜かな山の姿、湧き上る雲の運動を眺めてぼんやりしてゐた。

千八百四十米の熊野岳を僻して、刈田岳迄馬の背と稱する火口壁を傳つた。一面の燒石で、生へてゐる草は抵抗力の強い禾本莎草の群落に過ぎない。向ふに中央火口丘の五色岳が硫黄に曝された灰白色の峰頭を擡げて頑張つてゐる。すると忽ち足下に御釜火口湖の深い青黄色い圓形の水が現れた。湖の緣は馬の背から百二三十米低下してゐるが、水面は其よりもまだ數十米下つてゐる樣である。(尤も去年九月に噴火の徵候を傳へられた頃には溢れ出さうとする位に增水したさうである。五色沼の異名もあつて水色は其時々に變つて一定しない、私も一度は泥の樣に黄く濁つたのを見、又次には未來派の色彩の樣に强烈な色の取り合はせを碧藍の湖と赤白い岩峰の間に認めた事があつた)。御釜へは新關溫泉から濁川を溯つて行かれる。五色岳の南には今は廢坑となつた硫黄採掘所がある。刈田岳へ來て御宮の中で晝飯を食つて、又眺望を恣にしてから直接賽ノ磧に下りた。此が宮城縣方面の本道である。下りは早い。忽ち遠刈田へ下りて、其處から輕便鐵道を利用し、永野から又歩いて北白河の停車場に入つた。

翌年の五月中旬、今度は御前岳から始めて藏王を縱走し、更に雁戸山を經て笹谷峠から疑問の一三四四米の峰及神室岳あたり迄探つて見る積りで又も鎌先溫泉に行つた。其日は案內者を雇ふに費し、翌日友人と二人で軍馬補充部出張所に出て、案內者と落ち合つて鳥居前に上つた。雪は去年よりも多く、可なり低い所にも殘つて居た。賽ノ磧の下から西へ入つてブナの谷の向側に天幕を張つた。翌朝もう一人の案內の來るのを待つていつもの道を御前岳に上る。荷がないので雪溪へわざわざ出て見たり、高山植物の花を求めたりする。頂上に着いたのが彼是れ正午で、夫から南屏風を通つて北屏風へ行くともう午後三時近くであつた。此邊は既知の道である。

北屏風の三角點から尙暫らく雪堤上を北に進んで、向ふの斜面の見へ出す所から西北に向つて屏風山背のなだらかな傾斜を下りて行く。一帶に針葉樹が生へてゐて、雪がなければ東北固有のヤブで到底歩かれたものではない。今でも服が枝にひ

つかかつたり、腰まで雪に落ちたりして容易に捗らない。然し間もなく鞍部に下りて見ると、熊野岳から褒ノ積あたりがかすんで見える。杉ヶ峰は眞黒にそして眞白に、つまり黒木と殘雪ばかりの山體を見せる。峰の南面にはちよい〳〵夏ならば池か沮洳地であらうと思はれる處がある。其下の方に大沼といふ池があるさうだ。歩行も餘り早くないので眼の前の大雪田を蹈んで凡二十分許りして杉ヶ峰の三角點（一七四五米）に達した。山頂は之から北方にかけてハヒマツも多く、柔かさうな草地もあつて（今は雪だらけだが）一寸感じのいい所だ。國境山脈の舟引山の直ぐ下迄山足が延びて行つて、其處に深い横川の谷を成してゐる。其内に雨が降り出して來たので、北方に切開を傳つた。行く〳〵泊れさうな處を物色したが、何分一面の殘雪であるから、平らで雪のない濕つてゐない處といつては何處にもない。やつと大きなコメツガの下に天幕を張るに足る廣さの笹葉が見えたから、尾根の殆ど頂上て風も可成強いが泊る事にした。先づ木を切る火をたく、雪をとかす。尾根の緣の偃松の梢から灰色の霧が舞ひこんて來る。冷い雨がばら〳〵と天幕をたゝく。飯の後では少しでも暖を取らうと葛湯を作つて十分に食べ、震へながら夜を明かした。

翌朝になつて見たが依然として空は霽れない。霧がひゅっ〳〵と吹きつけて天幕がばた〳〵鳴る。然し滯在も馬鹿らしいから、支度をして雪の上を眼の前の一峰に向つた。昨日切開がよくついてゐた事を考へると、時々植木とりにでも刈田岳の方から來る者があるのだらう。霧の中からちよいちよい刈田岳南面の針葉樹におほはれた山腹を見て方向を確かめる。やがて下りになつて一五四五米の峠道に出た。道は勿論白皚々たる有樣で殆ど分らない。案内も此邊は知らないので地形圖と磁石を便りに澄川上流の北側をだら〳〵と下りてゆく。此邊の森林は中々美事で、晴れてゐたらもつといゝ感じがしたらうと思ふ。雪は途切れもなく續いて、所々に紅い雪も見える、此は管に入れて持ち歸つて顯微鏡でのぞいて見た。極地に見る紅雪藻の一種が見える、携帶の方法が不充分であつ

たから、大抵の細胞は分裂したり破壞したりしてゐて、完全な者は無かつた。それでつい形體を描きもしないで其儘になつてしまつたのは遺憾である。（但標品は二高生物學教室に置いてある筈である。）森林帶を無闇に歩いて行くと、やがて高度の下つて來た爲か段々霧もはれて來て、大分遠くまで見える。澄川の支流を渡つて行くとまもなく硫黄精錬所の建物が見える。又一つ澤を渡つて近づくと二三の坑夫が親切にも中へ入れて呉れた。然しこんな處で、ぼんやりしてゐるのもつまらないから、やがて道を傳つて、地藏瀧の上の雪渓を横切つて、本道から峨々温泉へ下つた。同じ學校の者が二三人來てゐて偶然の出會に大變喜んで呉れた。未だ三時頃であつたからゆつくり湯につかつたりして遊んだ。温泉は濁川の河原の傍にあつても、谷の景色は先づ平凡たるを免れない。宿は木賃客が多いから長居する所ではない。

翌日は晴れたので刈田、熊野から雁戸山の方へ行かうとしたが、案内の一人が冷えて腹を痛めたといふので、殘念乍ら縱走を中止して案内者二人を歸した。それで腹癒せに落ちあつた友人と一所に雪上を刈田岳に上つておとなしく引返し、其日の内に仙臺に歸つた。刈田岳の頂上から見下ろした御釜の水の色、頂上のお堂の外の柱に横さまに生長した長さ一尺にも及ぶ氷柱の牙の様な形は、共に鮮明なる印象を殘した。此旅が在仙三年間の最後のものである。（大正八年十一月三十日稿　沼井鐵太郎）

## ○燒山より丹澤山塊縱走

秋も大分更けた十一月の末、偶然にも丹澤行の話が持ち上つたので、豫てより此の山塊に憧憬を持つた自分は、雀躍して賛成した。

愈話しは決まつたが、其れには條件が附いて居た。其れは、土曜日の午後から出發して、翌一日て縱走を終つた上、歸京して仕舞ふと云ふ事だ。扨どの方面からがよいかと、種々探つて見た所どうも燒山からかゝる事が、一番よいと云ふ事を聞いた。又縱走と云ふ意義からも、此の方面からが適當の様に、思はれたので終に此の方面から決

行する事にした。

時は大正八年十一月二十一日、午後二時三十分發の列車で新宿驛をたつた一行四人は、與瀬へ四時四十分に着いた。すぐ町端づれの茶店で、先づ腹の蟲に御世辭を使つてから、青野原村の長野へ向つた。相模川の釣橋を渡る頃には、もう提灯が入用になつてきた。丁度鼠坂（ネンザカ）の手前で、道志村の青年で目下東京に來て居ると云ふ人と道連れになつたので、早速道志を拔ける道を聞いてみた。道志を通ると、約半里以上近くなるさうだが、青山村小澤へ渡る所の假橋（道志川）が、少し雨でも降ると增水の爲め、すぐ流れて仕舞ふ。其れが無ければ更に本道へ戻つて來なければならぬ。すると反て十五六丁位遠くなると云ふ事だ。其れで其の假橋の有無を道端の家で、再三聞いてみたが、皆不得要領の返事なので、思ひ切つて本街道を行く事にした。別れる時に、ては道志橋を渡つたら、水道路を通りなさい、餘程近くなると敎へてくれた。其れは横濱水道の貯水池があるので、其の材料を運搬するトロの專用道路であるさうだ。道志橋を渡つて、すぐ左側の家で尋ねると、其の家の横にある細道を行けと云ふので、街道に分れて少し登ると果してトロの線路がある。其れについて十四五丁位も行つたかと思ふと、妙な門の中に入つて廣々した所へ出て仕舞つた。路がない、向ふを見ると燈火が見えるので、兎に角行つて聞く事にした。其所は水道の事務所の樣な所であつたので早速路を聞いて見ると、やあ此の先の池の緣が崩れて居るから落ちるかも知れない、なんて嚇かして計り居る。少しく辟易して居ると、細君が傍から、あなた一所に行つて敎へて御あげなさいな、と助け舟に出た。まあ助かつたと思ひながら、亭主の後に隨いて行く。今度は丸で縱覽に來た格で其所いらを歩いた、敎へられた坂を登り切ると、すぐ本道へ出る事が出來た。もう多分一本道だらうから間違ふこともあるまいと思つて安心して急いだ。少し行つてから又聞いて見ると皆戸締りのしてある中から、梶野へ行つて路が分れると云ふ事を敎へてくれる。

鮑子も過ぎ前戸を通つた。眞暗闇の中を無我夢

中て歩く。暫く行つてから或る家の傍で、大聲あげて聞くと西の道を行くだと敎へてくれた。又裏の方だとも云つたが、どつちが西だか裏だか更に分らない、困つて居ると出て來て敎へてくれた。此所が梶ださうだ、危い所で路を間違へる所であつた。直行すれば鳥屋へ行つて仕舞ふ。其の分れから少し行つて小さな澤を一つ越すと、もう靑野原の原に來た。此所には泉屋と云ふ宿屋があるが翌日の强行に備へる爲めに長野迄行きたいと思つて、村の靑年に聞いて見ると、長野にも泊る家はあると云ふので、長野へ行く事にした。

丁度其の夜は長野に浪花節が來て居ると云ふので、村中大騷ぎ、漸く泊めると云ふ家を探し當てゝ行つて見ると普通の農家の樣だ、門に立つていくらどなつても更に返事がない、戸が開くので首を突つ込んて見ると、何んだか人が大分寢て居る樣だが、死んで居るのか活きて居るのか一向動きもしない。仕樣がないので、隣の家で聞いて見ると、やはり其の家だと云ふので、困つて仕舞つた。或は其所の人も浪花節を聞きにても行つたのではないかと思つたので、一行の內二人見に行つてもらつた、後の二人て其れを待つて居ると、向から村の娘子が二人やつて來たので、早速聞いてみたが、同じ樣な事を云つて居るから、では君の家に賴たい等と笑談を云つて居る所に、提灯を持つた一人の女が坂を上つて來た。あれが此所の家のおばさんだと云ふので、直に一夜の宿りを賴むと餘り好い返事をしないで、もじ〳〵やつて居る、何んだか斷りたい樣だ、大に形勢不穩だ、さうなると此方も一生懸命だ、布團がなければ四人一所ても苦しうない、飯も我々が持つて居るから等とひたすら懇願した。すると漸く不性不性に承知してくれた。其れでは、こつちに來なさいと云ふので後に隨つて行くと、丁度此時偵察に行つた二人が其の家の老婆を引張つて歸つて來た。

中に入るとすぐリュック サックををろして今度は三人で村人の樂しみを見に出掛けた。

行つて見ると普通の農家で、全部戸を締め切つて一枚丈明けてある、其所が急造の入口だ、其れに木戸番が居て、其の昔淺草あたりで使つて居た

様な木製の木戸札を賣つて居る、大枚十五錢奮發して入つて見た。

異様な風體の三人を村人は驚いた様な顔付きをして見て居た、正面の所に怪しげなテーブルを前に控へて妙な奇聲を發して居る奴が居る、村人の云ふには、これが中々えらい先生なのださうだ。凡そ十分程聽いて居ると、もうたまらなくなつて來たので失敬しやうとすると、おめえ様等惜しいこつた、これから後に大先生が出るだと云つてくれたが、もう辟易して退却する事にした。

宿に歸ると、殘つて居つたM氏が、一人の髯のある男と爐の縁で、頻りに話しをして居つたが、吾々の歸つたのを見て、どうでしたと云ふから、やどうも驚いた、とても御話しにならん、第一、名等は聞いた事もない、なんて云つて居たら、傍に居た男、こそこそ向ふに行つて寢て仕舞つた。後でM氏の曰く、彼れが座長だよ、には少なからず面くらつた。

翌朝は早いので、寢ようとすると、宿のおかみさんが、まあ待ちなせへ、何か暖いものを喰はせるだから、と云ひながら、裏の納家に行つて、八つ頭を二三十計り持つてきた、其れを爐の上に釣るした鍋の中に入れて、醬油でうでゝくれた、其の美味な事、とても譬へ様がない、忽ち二拾程平らげて仕舞つた、それで大分腹の皮が突張つたので睡くなつて來た。其れでも煎餅布團を二組融通してくれたので、二人づゝ寢ることにした。其の煎餅布團たるや、實に驚いた、何しろ濕氣て居る上に、すてきな光澤があるのだ、頭の上では便所の戸ががたんがたん音がして居る。何しても廣い一室丈なのだから、浪花節だらうが何んだらうが、皆雜居て、中々風流だ、其れても明日は暗い中に出發するのだから、まあ仕合せだと思ひながら眠りに就いた。

例の浪花節が、はねたと見えて、座長が歸つて來て、彼れの細君と何か、ごちやごちや云つて居るので、目が覺めた。時計を見ると二時だ、もうそろそろ準備しやうと思つて、起き出して爐の側に行つた。

座長先生中々談しが上手て、旅藝人のローマン

スを話し出した。つい面白いので耳をすまして居ると、突然表から御客様を案内して來たと云ひながら門弟が入つて來た、其の客人を見ると吾々の一行に加はる可き筈のT氏であつた、氏は僅五分違ひで汽車に乘り遲れたのださうだ、其れで、次の午後六時で來られたので、與瀨へは八時に着いたが、途中旅商人に道案内を頼んだ爲、篠原を通り、反て道を間違へて、非常に困難して、漸く辿りついたのださうだ。兎に角少しでも寢なければいかんと云ふので、濡れた服を脫がせて、末だ吾々の暖みの殘つて居る床の中に、もぐり込ませたこれが爲に出發時間を一時間延長して、午前四時とした。此處の主人は中々深切な人て、吾々の爲めに、熱い味噌汁を造へてくれた、殊に優待したせいか、田作を澤山入れられたには、却て閉口てあつた。

驚いたのは此所の宿錢の餘りに安い事である、此の物價の高いのに、五人て壹圓だ、間違ひではないかと思つて聞いて見たら、やはりさうであつた。唯殘念な事は其所の家の名を聞き落した事だ餘り氣の毒なので五十錢茶代をはづんだ。

午前四時出發、宿の主人が好意で途中まで送つてくれる。愈年來の宿望が達せられる日が來た。風は寒いが天氣は甚だよい。頭の上には無數の星が恰も我等の首途を祝するかの様に輝いて居る。

鎭守の森の様な所を右に見て、道は左へカーブする、西野へ行く道と分れてから、そろそろ上りになつてくる、三つ目の分れを過ぎると、宿の主人は御大事にと言を殘して、暗の中に姿を消した愈燒山にかゝるのだなと思ふと、愉快でたまらなかつた。徐ろにスピードを出して、八百米突附近迄登つて一休みする。

燒山の頭は未だボンヤリとして、唯銀砂子の様な星の群が我物顔に輝いて居る。北方の遠い空にぼうつと火の映ずるは、八王子あたりか。

燒山の最高點を右に見て尾根にかゝる、漸く其頃東の空は、美しい淡紅色のぼかしを置いた様になつてきた。其の色が少しづゝ褪せてきたと思ふと、もう太陽は彼方の山の端から徐々に顔を出した。丁度吾々を應援する様に。五時三十分。尾

根には、防火線にほゞ並行して、立派な道がある人力車でも通りさうな好い路だ。

氣持ちの好い冷たい空氣を吸ひながら益々急いだ　有平糖の様な霜柱を、ざくざくと音をさして踏みつけて行くと、指の先が針でさゝれる様にちくちく痛い、其れを緩和する爲に、愈足の運動を猛烈にやる。

始めは、兩側とも眺望が出來るが、少し行くと尾根の東側を、からんで行くので、專ら鳥屋方面を見をろしながら行く。

此邊から見た蛭ヶ岳は丸て茶褐色の兜の様だ。路の右側に、土を掘つて其の上に屋根を葺いた小屋があつた。是れは炭燒が山仕事に來た途中で風雨にあつた時の避難所であるさうだ。

千二百七十三米突の地點を右に見る頃、蛭の頭に薄い雲が掛つた。

其所を過ぎて又屋根の上へ出ると、西北の方面に南アルプス連峰の白雪の衣を著けて、斜に日に對したる勇姿に接した。實に見事だ。

何しろ非常に寒いので無暗に足を動かす。其の爲に靑根から登つてくる路を見落して仕舞つた。

千三百三十五米突の地點の横をからんで少し行くと、小さな森の中に入る。餘り寒いので、一つ焚火をしやうと、枯枝を集めて來て火を附けてみたが濕つて居るせいかどうしてもつかないで、マッチ計り損をして居る、弱つて居る所へ丁度炭燒が三人やつて來た。其れが吾々を見て氣の毒とでも思つたのか、自分が更に枯枝を集めて來て、忽ち焚き附けてくれた。其れを吾々が、いゝ氣になつて暖つて居る中に、もう炭燒は、さつさと行つて仕舞つた。其所で東京から用意して行つた辨當を出して簡單な第二回目の朝飯を濟して出發する。

森を出ると廣々した原の様な所へかゝる、此所を、ヒメツギと云ふのださうだ、此所から見ると直接蛭に取つ附けさうに見える。

此の原々通り過ぎると急に右手に下りになつて妙に迂廻して行く。何だか方向の違ふ方へ向つて居る様な氣がする路だ。少し行くと又右へからむ。今度は緩勾配のようになつて、少しく平らな場所へ出る。此所に少さな毀れた小屋があつた。其所

から五六丁行くと道が二つに分れて居る。右へ行つて見たら谷へ降りさうなので引返して左を取る。小さな隆起を越えると、炭燒小屋が見えたので道を聞かうと思つて其の方向へ向ふと、突然頭の上でおめき樣等どこへ行くだと云ふ聲が聞えたので見上げると一人の炭燒が木を切つて居るので、早速上つて行つて道を尋ねると、未だ蛭迄には二つ分れがあるから、始めの方は右へ二度目は左へ行けと敎へてくれた。

其所から又一つの突起を越して蛭の根へ取つ附かうとすると、突然大音響を耳にした。驚いて其の方向を見ると、一人の炭燒が今大木を切り倒した所であつた。近づいて道を聞く、するとすぐ此の上が蛭だと云ふので、一同喜び勇んで驅け登つて仕舞つた。九時。

此の邊は大分ひどい密林ではあるが、皆闊葉樹（主として楢）であるので、落葉季節に行けば、少しも困難を感じない。

蛭の三角點の少し手前で煙草入れを拾つた、多分炭燒のであらうと思つて、三角標石の上に乘せて置いた。此所の標石は、地上に一尺五寸位拔け出して居るから、すぐ目に附く。

一同が休憩して居る暇に、三角點より南へ走つて居る道を行つて見ると、意外にも立派な眺望のある所へ出た、自分は蛭の頂上には眺望が無いと云ふ事を聞いた事があるので、非常に悅んだ。直に大聲揚げて一同を呼んだ。玄倉の谷を目の下に見て、遠く富士、足柄連山を、あかず眺めた。足元を見ると、少さな石の藥師如來（其の時は單に地藏尊がある位に思つて碌々見もせんでしたが、後に武田先生に御伺ひしたら藥師樣ださうです）が二つ並んで居る。其れで藥師岳と云ふのであらう。

一度三角點の所迄戻つて更に、東へ向つて走つて居る尾根通しの道を下つて丹澤へ向ふ。もう此所へ來れば迷ふ事は絕對にない、そろそろ名物の笹が腰のあたりを沒してくる。下り切ると、一寸奇拔な岩に取り附く、之れが鬼が岩であるさうだ。秋も大分更けたせいか、丹澤で一番いやな鬼薊も其に其の哀れな殘骸を留めて居るのみであつたのは幸ひであつた。其所から少さな瘤を一つ飛び越

すと、地圖に一六〇四米突と記してある突起に出た。

雨の多い此の山彙としては、實に稀に見る晴天となつた、空には一點の雲もない、絶好の縱走日和だ。

玄倉川方面を見ると、玲瓏たる白雪の衣を著けた富士、大理名で刻んだ美人の如き南アルプス、鏡の樣に光つて居る山中湖、怪獸の踞まるに似た大群山、笊をふせた樣な箱根足柄の山々、炭燒の煙りと間違へた大涌谷と、殆ど應接に暇がない、餘りの美觀に、唯恍惚として見とれた、今更に神の御技の巧みなのに驚いた。

此所を少し下つて更に一寸上る所に崩れて砂礫の出て居る場所がある、此所に羚羊の足跡があつた。

其所を登ると東南に向つて、なだらかな傾斜を爲した茅戸を下る。此の原の一部に不動明王が安置してあるさうだ、依つて不動の峯と云ふ名は此の二つの峯を總稱して云ふのか、或は後者を指したものか。

鳥屋村、早戸川方面から登つてくる道があるが之れは地圖に記してある位置とは違ふ樣だ。(後日研究します)

更に隆起を一つ片付けると、恐ろしい急勾配を笹につかまつて登る。此の邊は中々惡場だ。喘ぎ喘ぎ登り切ると、丸で公園の樣な感じのする所へ出た。此の平を行つて一寸登ると、もう丹澤の絶頂だ。十二時。

此所は一面の茅戸で、かなり廣々して居る。眺望は東南のみの樣だ、塔岳等などは丸て握手が出來さうに近く見へる。此所で大失敗を演じた、其れは三角標石を見出せなかつた事である。充分周到に探がしてみたが駄目であつた。之れも確かに地圖の記號のある場所とは違ふ樣に思はれる。

晝飯を濟して十二時三十分出發。之れからの道は今迄のよりも比較的よい。其の代りに笹が益々深くなる、先に行く者の姿が更に見へない。其れに倒木が非常にあつて、勢ひよく飛んで行くと忽ち向脛をはらはれて、見事に投げ飛ばされる。下りを急ぐせいか、やゝもすると笹の上に乘つて滑

走が始まる、さう云ふ時は笹を兩手で摑んで、ブレーキとなす、實に痛快だ。

忽ち一面の茅戸で、軟かな感じのする所に出る此所を龍の馬場と云ふさうだ。五分休憩。

更に鞍部を一つ過ぎて登ると少しく森林らしい所になる。此所に笹と杉皮で造つた小屋があつた、多分駒鳥捕りの小屋であらう。之れから先は非常に樂なので、一足飛びに塔の頭に押し上つて仕舞つた。午後二時。

小さな石の祠があつて其の廻りに地藏樣が立つて居た。此所の眺望の好い事は勿論である。

屈曲した海岸線に沿ふて小田原、眞鶴鼻、盆石の如き江の島、靑毛布を敷いた樣な關東平野の一部、白布の如く見ゆるは馬入川だらう。

休憩して居る內に、孫佛岩を見てこようと思つて二三人で出掛る。坂を下り始めると中々急傾斜だ。段々降つて行く內に、誰だか又之れを登るのかなあなんて弱音を吹く者がある。追々軟派がふえて、とうとう引返す事になつて仕舞つた。

もう秦野平野に降るのだと云ふので、有るだけの食物を平らげてしまふ、下りは尾根通しで直接大倉に下る豫定であつた所、どう云ふはづみか東へ走つて居る尾根へ立派な切り明けがあるのに釣り込まれて仕舞つた。

頂上から十二三丁位も來たかと思ふと、右手に少さな地藏尊がある（一三四一米突）其所を過ぎると、大分下りになつてきて、全然方角の違ふ方へ尾根がうねつて居る。之れは大變だ兎に角一度戻つて更に道を探がさなければいかんと云ふので、前の地藏尊の所迄戻ると、其所から南へ向つて微かに下る道の痕跡があるのを發見した。其れを下つて行くと一面の茅戸で急傾斜だから、滑る事夥しい、正面からは盛んに照り附けらるゝので汗と冷汗とが混合して出てくる。一二一〇米突附近から右に出た尾根を下ると、傾斜は益々烈しくなつたので滑走と尻餅との競爭が始まる。下の方に流れが見えるので、早く降つて思ふ樣水が飲みたいと云ふ慾望も手傳つたせいか大分はか取つて、水無川上流の合流點へ下り著いたのが丁度四時であつた。此所で今日始めて水を鱈腹飲んだ。二十分

休憩。

流れに附いて行くと戸川の諏訪丸へ出た。本道の尾根を下らずに、谷に入つた爲に約三十分餘損をしたので、其れを取り返さうと、平野に出でからは出來るだけ飛ばした。戸川を通る頃には、もう顔も見えぬ位に暗くなつてきたが、提灯も點さず急いだ、時間が貴重だから。

長い秦野の町を通り抜けて、輕便鐵道の停車場へ着いたのが丁度午後六時であつた。三十分休憩して六時三十分發の列車に乘り、二宮で乘替へて午後十時に東京へ歸つた。

參照地圖。(二萬分)上野原、中野村、牧野村、蛭ヶ岳、塔ヶ岳。(五萬分)上野原、松田惣領。

費したる時間。

第一日、與瀨發、午後五時。長野着、八時。

第二日、長野發、午後四時。燒山、五時三十分。蛭岳着、九時。同所發、九時三十分。丹澤着、十二時。同所發、十二時三十分。塔岳着、二時。同所發、二時二十五分。秦野停車場着、六時。

大體に於て時期と天候さへ好ければ、此の行程は、決して困難ではない。

時期は、四五月か十、十一月がよい。

宿屋は靑野原の原に泉屋と云ふ比較的よさそうな旅館があるが、翌日十四町餘分に歩かねばならぬ。長野の宿りは穢ないけれども中々興味が深い。唯其宿屋の名を遂して仕舞つたのは殘念であるが、村で聞けば、すぐ知れる。(松本善二)

## ○會津駒ヶ岳

「好きな山は?」と訊ねられたら、無雜作に「會津駒」と答へるだらう。何故かと問はれゝば、仕方がない、唯だ「好きだから。いゝ山だから」としか他に言ふ可き道はない。「何故山登りするのか」ときかれて、當惑するやうに。自分の貧しい山旅の中で、あの山程豐かな雪の量を有つてゐたものはない。六月末、日本アルプスでは雪溪が大きい位の時、我が會津駒は雪の衣にくるまつて靜かにまどろむでゐる。あやしげな登山者に騷がれる幸福と虛榮とを持たないのである。見給へ。あの雪の白さと、蘿々として聳えてゐる針葉樹の黑さとを、山話でもする夜は、よくあの山を懷しがつたが——今でもさうだが——登つたのはもう大分舊

くなつて、朧氣な印象のみ殘されてゐるが時々寫眞を出しては、じつと見入ることさへある。祕められた山として永遠に殘しておき度い。所が武田幹事から御熱心な御督促があつたので、止むなく尾瀨や、燧や平ヶ岳の記事が「山岳」に載つてゐるので、まあその附錄の註にでもと、吾ながら危い筆をとることになつた。「駒」にして心あるならば自分の愚さを笑つてゐやう。

自分が駒の頂上の三角楹に上つたのは、大正七年の六月下旬、第一高等學校旅行部の旅行班の一員として同勢二十三人と俱に、赤城から尾瀨、駒から日光の山々に遊んだ時の事である。旬日に亘る旅程を書いてみると、大體次のやう。

第一日　東京－水沼－赤城山大洞。第二日　黑檜山－追貝。第三日　追貝－戸倉－尾瀨沼畔長藏小舍。第四日　燧岳登山－檜枝岐（ヒノエマタ）。第五日　會津駒ヶ岳登山。第六日　檜枝岐－引馬峠－川俣溫泉。第七日　川俣－西澤金山－金田峠－日光湯元。第八日　白根山登山。第九日　湯元－志津－男躰山－中宮祠。第十日　日光－東京。

## 一

皆が發足してから、やつと追貝の淀屋を出發したのはもう大分日が高くなつてゐた。八時頃であつた。見えもしない赤城の山を振り返つたりして桑畑の中を戸倉へ向ふ。獨り歩く物憂さに耐へ兼ねて、炭燒の駄馬と道伴れになり、鈴の音と一緒に雪に埋もれた頃の尾瀨の話を聞く。蟬が鳴き出したり、白い雲が湧き上つたり、暑い事は何處でも同じだ。白い瀨を見せてる川原を大迂回したのが千鳥新田といふ所。追付かれた旅商人の爺さんに「中學校かね、高崎の」ときかれる。帽子の白線を見た爺さんには中學としか思へなかつたらう。どうせ高等學校だと話したつて判るもんでなし、高等小學と誤られて一々訂正するのも、もう歩くのが少々いやになりかけた頃なので面倒臭いしするから「大學だよ」と答へてやると、急に元氣になつて「醫學かね」と反問してくる。仕方がない「法律さ」ともう一篇答へると民法か刑法かと來る。萬屋になる積だから默つて仕舞つたら、もう夫きり何とも云はなかつた。沈默は金なりだ。

正午迄に戸倉へ着きさうもない。須賀川の村落に辿りついて、追付いた友人と渴き切つた咽を潤

ふしたり、駄菓子を十錢買つたら袋に一杯あつたりしてる中に、ねむくなつて來る。三人して出掛ける。先頭の連中は戸倉にても着いたか。鎌田で日光へ行く道と岐れる時湯元の溫泉が急に懷かしくなつて、亂雲が動いてゐる金精の連山を眺めた。道は川を越した。危い橋がグラ〳〵と搖れる。山は道に迫り、道は山につけられてゐる。川は崖の下を奔下して來る。太田、越本、中里等いふ村落を通る。赤松が見え出し、路の四ッ角に「會津若松へ何里」といふかすかな文字の標木が立つてゐる。「もう戸倉はぢきだ」とYは喜んで新しく「藤原」の圖幅を取り出して見る。

戸倉は深綠に包まれた片品の溪谷の上にある。どうやら十二時に着いた。宿屋で辨當をひろげる。澤庵漬のうまい奴を出してくれる。茶の香もしない程土瓶に何度も湯を注ぐのであきれてゐた。「檜枝岐まで人家がないのだ」と呟く者や「夕方迄に行けばいゝんだから」なんて弱音を云ふ者もある。

若葉から青葉に移らうとしてゐる落葉喬木の欝蒼とした茂みの中にかくれて、片品川は只だ淙々の音をたてゝゐる。無念無想、元氣づいた兩脚に力を入れて、陽光の洩れる林の中を辿る。鶯が啼く。戸倉澤を過ぎて暫くすると草原の緩傾斜となつて、利根水電の制札が建てられてある。高山植物（此の邊にもあるらしい）を採取するものは届出づべし、さもなければ不忠の國民だなんて事が書いてある。眼に入つた一草をとるにも、何處にあるか判らない水電の會社（多分前橋なんだらう）迄歸つて許可を得なければ、忠良なる人民でなくなるらしい。大いに敬意を表して、ワレモコウ一本折らない。草いきれで息が詰りさうになる。茶褐色の蝶が馬糞に群つてバッと蠅のやうに舞上る。楢の古木の下に山ノ神の小祠が寂しい。荷鞍山と四郎嶽との裾を道は走つてゐるのだ。尾名澤を渡つてから、袴腰の山容がピラミッド形に見え出す。熊笹がましてくる。中學にゐた頃地理の時間に縣道だの國道だのと說明をきいたものだが、今まのあたり見る縣道は、幅二尺位の水の流れる道だ。こういふ所で實物教育をすると非常に效果がある。澤にかけられた土橋は雪の爲めに落ちて仕舞ひ、

根曲笹を掻き分ける苦痛を嘗めさせられる事頻りである。片品川も此處迄來ると全く哀だ。辛うじて我等の咽を濕すに足りる位。

舟ヶ原鑛山の廢趾に着いて、やつと登り路となる。針葉樹が見え出して來る。三平峠（尾瀬峠）にかゝつてゐるのだ。之を登り切れば尾瀬沼と燧岳とが見えるのだといふ希望が、どんなに自分の心を嬉ばせてくれた事だらう。歩調は自然と早くなつてくるのも正直過ぎる。併したつた獨りで歩くのが妙に物足らぬので、試みに「オーイ」と呼んでみたが何の答もない。反響さへしない。只だしんとした嵐氣が澱んだ儘、夕暮を待つてゐるばかり。日もかげつて、あたりは冷えて來た。急に寂しさに耐へない様になる。峠はだつぴろくて、一面の笹て何時とはなしに沼の方へ下つてゆく。豫期した峠からの壯觀は得られなかつた。降つてゐる道は雪に埋もれ、眞黑な針葉樹の間から尾瀬の湖光がちら〳〵する。長い間雪にいぢめられた峰櫻が幻の様な花を開いて自分を迎へてくれる。白い縞の入つた燧岳が折からの夕の光に輝いて山容を水に涵してゐる。此の山と此の水と、自分が積年憧憬した山であり、水である。今、久戀の尾瀬の神苑に一歩足を踏み入れんとして暫くは逡巡しないわけにはゆかない。此の靜けさと、尊さとに默禱を捧げて再び眼を開くと、凡ての物は紺靛色に彩られて微風に動く水は漣漪としてゐる。端正な燧は肅然として、此の神祕境を支配して自然の布置を調和せしめてゐる。五月雨の後の沼は增水して湖畔につけられた道は、湖水の一部分となつて仕舞つたので、止むなく丈なす根曲笹を分け、栂の枝に帽子をとられながら歩く。小波がひたひたとうつ湖畔の沮洳地には水芭蕉の白花が紊れて黃色い花粉が金粉の様に漂ふてゐる。紅と紫とのシャウジャウバカマが猿猴草と共に咲き誇つてるのを踏み付けて行く慘酷を敢てしなければならなかつた。

まだ木の香の拔けない長藏小屋に辿り着いて、澁茶をすゝりながら炎をあげて燃える粗朶を見詰め長藏老人と話をしたのは間もなくであつた。時計の針は六時に近かつた。九里かそこらの道程に

隨分時間のかゝつたもんだ。早い人達は三時頃に着いたといふ。風呂から出るともう夕闇で洋燈がついて、カーボナイズした鮒のフライの菜で聊か悲觀な夕食になる。うすら寒いのでまた爐邊に集つて雜談を交へる。長藏老人頗る元氣がない。こつちから訊ねなければ何とも云はないで考へ込んでゐる。寢床の中で茶をのんだと云つて叱られた話はまるで虛言のやうだ。尾瀨沼に鱒を放つたので夫が來年は食へる迄になると云つてゐた。だがあの冷たさで果して成育して行くもんだらうか果して成功したらば炭だか魚だか判斷に苦しむフライをたべる苦痛もなくなつて、我々にはどんなに都合がいゝかしれない。來年來ない不幸を唧つても見度かつた。

小舍は沼尻川の落口から現在の所へ移されて、今は堂々たる一軒の家屋である。疊もあれば湯殿もある。床には軸がかけてある。之を小舍といふは當らない。位置は殆ど國境——沼田街道と交叉した——の所で直ちに沼に臨んでゐる。其處からは燧を眺められるのは勿論である。

## 二

「雨だよ」と誰かゞ云ふ。今日は燧へ登る日なんだ。霧は隙き間を洩れてくる。サンカエフと熊谷艸の花が滴を帶びてうなだれてゐる。山も見えなければ湖も煙つて、一時間やそこらで止みさうにもない。然し折角こゝ迄やつてきてみす〳〵檜枝岐へも出られた義理でないので、同志を募つて雨の燧登山をやることにした。成否の程は疑はれる。

雨をついて外へ出る。千六百米の高原は雨の爲に愈々幽邃を極めて流鶯の谷渡りも又別な趣がある。大江川を挾んで沮洳地が廣々と展開されてゐる。此處にも例の水芭蕉と猿猴草とシャウジャウバカマとが滿開してゐる。夫に莎草科、禾本科の植物が交つて水を含むで、丸で海綿のやう。足袋の中がぐしや〳〵して氣持の惡い事夥しい。若葉した丘の中には薄桃色の櫻が咲いて何とも云へない軟い感じがして、之で雨さへ晴れて、燧に登れたらと考へる。大江川を渡つて沼田街道と岐れる微かな徑を見出して欝蒼とした丘を目がけて横切る。湖は鈍銀色の光を投げて僅かに其一部分しか見えな

い。地圖につけられた道を辿るとやがて丘。丘には樅や椴に交つて山毛欅の薄綠が夏のまだ淺いのを語り、蔽いかぶさる許りに熊笹が茂り合ひ、トゲのある枯草に苦しめられる。雪の爲に道が判らなくなつたり、突然溯邊で消えたりして道を探すのに無駄な時を費す。氷の樣な沼を渡つたこともあつた。突然笹がガサ〳〵と搖れたのでびつくりして立停つたが、何物だか判らない。獸てあるに違ひないが、熊であるかどうか。辛うじて燧の雪溪を仰ぐことの出來る、元長藏小舍のあつた原に出た。「高山植物採集嚴禁」の標木が雨に濡れてゐる。小舍から此處迄二時間もかゝつたので、燧へ登らうかどうしようかと評議したが、硬派の連中二三人と決行することゝなる。直に澤を攀ぢる。雪と笹で、困難すること一ト通りでない。雲がまとふた山巓を目的にしてむやみに登つてみたが全身すつかり濡れてしまつて寒氣が迫るので、我々頂上派もとう〳〵斷念しなくてはならなくなつた。十二時近くなつてまだ針葉樹の中だし、辨當も持つて來ない、前途も不明なので、少しく雲の薄くなつた尾瀨沼を見て、再び下ることにする。癪にさわることつたらない。ぼんやりして小舍へ歸つてくる。時に午後二時。

四時になつて雨も兎に角止み、洋服も乾いたので後髮を引かるゝ思ひで尾瀨を去つた。燧は雲間に姿を見せて自分等を送つてくれたのも頗る皮肉だ。大江川に沿ふて沼山峠へ。郭公が何處からとなく啼いてゐる。だらだらと登ると峠で、自分は最後の一瞥を此の靜寂の世界に與へて暗い林の中を檜枝岐さしてひた走りに下る。この峠道て旅人が五月末に熊に嚙まれた話があるので何だか氣味が惡い。ミヤマカタバミとドウダンの花が眼につく。幾度か渡つた澤は阿賀川へつづくのだと思ふと隨分山奥な感がする。貧弱な茶畑が見え出したら赤法華とか麒麟手とか云ふ部落てあつた。何氣なく振返つたら夕陽を受けて赤褐色になつた燧の山容が眼に映じた。夫は圓頂の山で一面に殘雪で赤城あたりて見られる富士形の尖峰ではなかつた。夜になりかけたので周章てゝ歩き出して檜枝岐の燈火を見た頃は既に八時に近かつた。宿は丸屋といふ。

岩魚の膳が運ばれて空腹を滿たした。空には一面の星。駒の登山が有望だ。

三

今日は揃つて駒へ登ることにする。どうせ半日仕事といふのでゆつくりする。つれなくてもよいのだが丸屋の息子を案内に賴んで辨當を腰にして八時十分に出掛ける。昨日に比べて猛烈な上天氣だぞろ〳〵二十四人も並んで行くのだから仲々盛んなものだ。沼田街道を少ししてから大津岐峠から出る澤を渡つて左に折れて山へ入る。すぐ登り路になる。よくある木の茂つた道で展望は更になく何の奇もない。段々と汗が額ににじんでくると、皆の間隔が大きくなる。向側の端山が一步毎に低くなつて空の色がその青さを增してゆくのが樂しみになる。時々落葉の上で憩ふて卷き熊——熊狩の方法——の事を聞く。毎年大分獲れるさうな。林の中では白い躑躅の類の花があるのみで、鳥も鳴かなければ、梢も動かない。草鞋におさへられた土がさら〳〵と崩れるばかり。皆んなは殆ど一語も話さない。針葉樹が多くなると頭上を壓してゐた厚い綠層が薄らいで陽光が洩れる。幽靈草が山毛欅や楢の落葉の間から銀色の花を出してゐる。千六百米突の標高あたりになると林相は全く一變して、眞黑な針葉樹となつて、曲りくねつた白樺が所々に見える。夫と共に殘雪の領域が擴がつて土の姿が消されてゆく。登路はすつかり雪に埋もれて仕舞ひ、いゝ加減見當をつけて登るより仕方がない。まばらになつた樹の間から右手に駒の峯續きの雪の山、左手には大津岐峠の木と雪と、夫を越えて燧の豪宕な山容を見られる。日光が强烈に反射するので眼がぎら〳〵してくる。雪の上を無性に步き廻る。日本アルプスの雪渓とは違つて山の肌が雪で出來て居り、雪を破つて栂だの樅だのが聳えてゐるのだ。石崎さんのカシミヤの寫眞を想起させる。雪渓なるものゝ銳さがなくて自分は好きだ。黑砂糖を貰つて雪と一緒に頰張ると馬鹿にうまい。道草を食つてゐたり、寫眞を撮つたりしてゐると取殘されてしまふ。急げば雪だからつる〳〵辷る。もう眞白な雪ばかりで尾根らしい所を行くのだ。駒の頂上が指さゝれると木はなく

なる。あつても曲りくねつた奴ばかりだ。雪の上を三々五々蟻の様に登る皆の姿を後から見てゐると面白くなつてくる。櫓がはつきりと圓い頂上に立つてゐるのが見える。地圖で見れば小さな池が澤山あるらしいが、まだ若芽も出さない岩鏡や岩高蘭やッガザクラが所々にあるだけで山にはまだまだ夏は訪れない。百花爛漫として妍を競ふ御花畠の美しさは望まれぬ代り、伸々得られない冬の粧の山を見る事が出來た。

駈ける様にして頂上に着く。十一時だ。一等三角點と完全な櫓がある。自分は櫓の上に座つて山頂の大觀を恣まゝにする。何と云つても登山には快晴が嬉しい。今日だつて此の晴れ渡つた空がある爲に銀光を放射する岩越上州の連峯を眺望し得られるのだ。剩へ櫓が伐り倒されずに殘つてゐるので絶頂派たる者喜ばざるを得ないわけだ。双眼鏡などを借りてゐられないで、一とわたり三百六十度を見渡す。最初に目に付くのは燧であること勿論である。峯頭が二つに分かれ代赭色の股に雪の斑が入つて、近いだけに嶄然群を拔いて聳立してゐる。至佛山(二二二八米)景鶴山(二〇〇一米)大白澤山(一九四二米)赤倉岳(一九五九米)平岳(二一四〇米)荒澤岳(一九六九米)などが眞白になつてずらりと竝んでゐる。只見川の溪谷が深く抉られて複雜した山の波を作つて、磁石と五萬分の地圖では山名さへ確かと知るのに苦しむ。魚沼駒から兎岳(一九二六米)の連嶂は果して見えたか否か疑はしいが見えなければならぬ筈であらう。案内は殆ど山名を知らなかつた。あそこ銀山平です一と云はれた所は鬱蒼とした森林に包まれた溪谷であつた。越後の山々に引かへて奥州の山は距離も遠いので、靄がかゝつて判然しないが磐梯山や飯豊山らしいのは觀望することが出來た。日光火山群は半ば暗雲に蔽はれて日光白根山と男體とを指すことが出來た。赤城や武尊は駄目だつたが、案内は富士山が此の見當に出る筈だと赤城の方角を示してゐた。駒から北に派生してゐる中門岳はべつたり雪で塗り潰されて針葉樹が僅か許り黒い色を示してゐる。比類稀な展望と雪とに疲れて、櫓の上で塊まつて切り烏賊の辨當を開く。吹き上る風

は冷いのに何時のまにか晴れた空に雲がひろがつて來て陽光も心細くなる。「夕立が來やしないか」と氣づかはれるので二時下山することにする。頂上に丁度三時間ゐたことになる。鈍い傾斜を有つてゐる駒のピークをあちこち歩き廻つて見たかつたが一行は既に雪の上を辷り始めたし、雨にてもぬれて道が判からなくなつたりすると少々悲觀なので、また來ることもあらうかと懷し味の多い駒に別を告げる。下りるとなればわけはない、ずる〳〵一直線に滑るだけだ。いゝ加減に駈け出すので時々飛んでもない所へ出て餘計な損をしたりする。雪がなくなつて山道になるとムット空氣が暑くなる。出鱈目をやつたので膝の關節が痛くなつたのでそろ〳〵下つて檜枝岐へ歸つたのが三時二十分であつた。紅色の芍藥に黑鳳蝶が舞つてゐてまだ日は高い。一風呂あびて横になると身體が二寸位伸びる樣な氣がする。

檜枝岐の村はいゝ。隨分不自由な邊鄙な山村のやうな話であつたが、宿屋なんか決してそんなことはない。食物だつて相當だし、座敷だつて廣いし、菓子だつてある。追貝あたりのかさ〳〵の菓子よりか一枚四錢の大き駄菓子の方が自分は遙かに好きだ。甘い物に渴してゐた自分達はやたらに享樂する。晩には特別の御馳走の蕎麥が出る。色は黑いが馬鹿にうまい。あきれる程おかはりする者もある。檜枝岐へ來たら是非味はつてみなければならないものであらう。

浴衣がけで夕方外へ出て見る。檜枝岐川で糸を垂れてゐる者もある。二三尾釣れたらしい。校長さんだといふ人——例の雪袴をはいてゐる——と立話しする。純朴な氣分が嬉しかつた。村人が貨幣を使ふのは正月と盆の二度しかないと言つてゐた、日常は皆物々交換だそうだ。よくこんな山奥に入り込んで生活してゐると思はれる。ぶら〳〵してゐると芍藥が到處に目につく。白い土藏の壁に東京市電氣局の車掌運轉手募集のビラが貼つてあつた。此處まで手を伸ばしてゐるのには少々驚かざるを得なかつたが、かうして段々いまはしい都會の風が入つて來ることであらう。岩越國境の山々が自然のまゝの狀態を續けてゆくことの出來

るのは今後何年のことだらうか。幸にして交通の便が惡い爲に、信州と違つて、流行性登山熱病患者がまだ絶對に來ないので、當分は吾等の欲望を滿してくれる。汚されぬ山が年毎に著しく減つてゆくのがなげかはしい。

駒は本當にいゝ山だ。拙い筆ではどうすることもならない。尾瀬のと共に寫眞で想像して下さい。眞面目に山を愛好せらるゝ人に此のあたりの山々を推奬したい。そして永遠に祕められたる世界として殘してほしいと思ふ。

若し訪れる人があるならば殘雪の多い六月を選ばれることをおすゝめする。雪と針葉樹との景色は特異な趣を呈するから。

翌日は快晴に乘じて引馬峠を越えて栗山の川俣温泉へ出た。峠の附近で雪に輝く駒の連嶂を眺めることが出來た。更に奥白根の頂上で最後の告別をして暑い東京へ歸つて來た。（戸澤英一）

## ○岩菅山に關する一二件

信州下高井郡平岡村の友人海谷貫一氏（本會々員）より左の書面を寄せられたり。私信なれども山に關し參考となる部分を左に揭ぐ。

『山岳第十三年第三號四頁貴著岩菅山に關する記事中「攀路あり、魚野川の上流字アライタ云々」の項に就き御疑問の由、魚野川には字アライタと稱する地名無之、右は震災豫防調査會報告中、著者の誤解か、又は誤植にて岩菅山登山には梯子澤よりするの一路のみにて候。字アライタと稱するは雜魚川上流上條せぎ（平穩せぎ）の水揚口地方の稱にて御座候。以前は岩菅登山にはせぎ傳へに雜魚川に出て（あらいた）後雜魚川を下り梯子澤より登山せしものゝ如く考へられ候。尙十頁上州方面の登路に就き魚野川を溯り十六澤（三角點一五七五・四の上の澤）よりするものは俗に裏岩菅と稱する地に至るものにては無之、五萬分の一圖烏帽子岳三角測點二二三〇・四に出で峯傳へに裏岩菅、表岩菅に至るものにて御座候。此邊には高山植物豐富にて殊に信濃小櫻、むしとりすみれ等多く候。」

其後四月十日附の書信には次の一節あり。

『本年は赤石、志賀、横手方面探險旅行致し度、

計劃中にて御座候。尚先般御報申候、岩菅登山口アライタなる地名に就き當地人の說併せて私の考を申上候。當地人は一般に一枚岩の處を水の流るゝ邊をアライタと申居候。しかし岩菅登山口上流平穩せぎ揚口邊のみ單稱せられ其他の地方に於ては聞き申さず候。平穩せぎは元下高井郡平岡村新井部落にて田用水にせんとて堀りたるものにて其後管理出來得ず。平穩村上條部落に千二百五十圓にて讓渡せるものにて御座候。これより考へても新井田用水路の下三字を省略して新井田（アライタ）となまりたるものにては無之哉と考居り候。』

アライタとは一枚岩の處を水の流るゝを指して云ふとは昨年岩菅登山の際、案內の角さんより武田博士と共に聞きたる處なり。梯子澤には此の如き場所屢あり。海谷氏の新井田も一說なるべし。兎に角從來の岩菅登路は雜魚川の梯子澤に限らるゝことは先づ疑なきものゝ如し。

平穩村山岳會にては東館を經て尾根通しに岩菅の登路を開き尚烏帽子、笠法師より切明に至る通路を造り苗場登山に便利ならしむる計劃ありとか。然らば平穩溫泉地は又登山出發地として頗る便宜の地點となるに至るべし。唯それに就て恐るべきは俗惡登山客の殺到し來ることなり。此地方の如き登山容易にして然かも山岳の勝に富み尚溫泉豐富なる地は將來餘りに開け過ぎ極端に俗化する處あり。少くも山上は斷じて俗化せしめたくなきものなり。

平穩の名產だとか云ふ下らぬ白箸の製作の爲に雜魚川方面より年々切り出さるゝ木材は中々少なからぬ樣なり。岩菅山下の愛すべき谿谷も之が爲に殘害せらるゝこと今後益甚しからん。之に對し相當の制裁を加ふること必要ならん。（辻本）

## ○登山案內者

### ◈奈川口登山案內者組合規約（摘抄）

第一條　本組合ハ奈川口登山案內者組合ト稱ス。

第二條　本組合ハ奈川口ニ於ケル信濃山岳會員、同登山案內者及ビ強力ヲ以テ組織ス。

第三條　本組合ハ山岳ノ保護並ニ是等ニ關スル一切ノ研究調査登山案内人ノ養成、善良ナル氣風ノ涵養ヲ以テ一般登山者ノ利便ヲ圖ルヲ目的トス。

第四條　組合加入者ハ專ラ山岳ノ保護ヲ念トシ、登山者ノ案内、荷物負擔、其他登山者ノ需メニ應ジ一切ノ勞務ヲナスモノトス。

第五條　組合事務所ヲ西筑摩郡奈川村字神谷區奥原卯市方ニ置ク。

別ニ登山相談所ヲ中央線薮原驛ニ設ク、又通信部ヲ奈川郵便局ニ置キ、以テ一般登山者ノ便ヲ圖ル。

第九條　組合加入者ハ他ノ登山地ヨリ招致サレタル場合ハ、主任ノ認諾ヲ經ズシテ之ニ應ズルコトヲ得ズ。

第十條　登山客ヨリ案内人及強力ノ需メアルトキハ主任ハ臨機之ヲ撰擇指名スルモノトス。

第十四條　案内人及強力ノ荷物ノ負擔重量ハ通例六貫匁内外トス。

但シ時宜ニ依リ此ノ限ニアラズ。

第十五條　主務案内ノ任ヲ受ケタル者ハ其組ノ先達トシ他ノ強力ハ先達ノ指揮ニ從ヒ、互ニ同僚ノ德義ヲ重ンズルモノトス。

第十六條　賃金ハ毎年登山期ノ初メ之ヲ協定ス、加入者ハ之ヲ固ク守リ、登山客ニ對シ約束以外ノ要求ヲ爲スベカラズ。

山中生活ニ必要ナル資料ハ雇傭セル登山客ノ負擔トス。

下山シテ任務終了ノトキ其ノ解傭地ヨリ歸宅スル道程半日ヲ費ストキハ相當ノ歸途旅費又ハ日當ヲ申シ受クルモノトス。

大正八年六月　奈川口登山案内者組合

案内者組合事務所　主任　奥原　卯市

登山相談所中央線薮原　湯川　寬雄

登山相談所奈川村黒川渡　清水　元

## ○山岳圖書批評

登山必携

### 山嶽めぐり

石上錄之助著

大正八年六月發行、三五判四百十頁、定價壹圓

貳拾錢、表紙は布製の軟質て、金色の空に槍ヶ岳らしき尖峰の雲表に聳えたるを印刷し、如何にも登山携帶に便利そうな書物なり。

偖て内容を見ると、先づ巻頭には「富士川の富士」以下、可也不鮮明な圖版が四枚ある。序文に據ると「本書は我國の山嶽を跋渉せんとするもの丶爲めに羅針盤として編纂せるもの」にて「出來得る限り丁寧にして親切に而して杜撰なからんことを期せる」のみならず「山嶽の人となり、溪谷を過ぎ劍崖を攀ぢ、名勝を探り舊蹟を訪ひ、高山植物を採集する等居ながらにして愉快に登山より得る總ての智識を得しめんことに努め」た由である。次に目次を見ると、富士山、日本アルプスより始まつて北海道、四國、九州は勿論、臺灣、朝鮮に至るまで、六十一の山岳を記し而してその日本アルプス中には更に二十七座の山名が記載せられ尚卷末には「登山者の注意すべき要件」と云ふ一項が附加されてある。

我邦にある無數の山岳中より全國に亘つて比較的少數を撰び出すと云ふことは隨分六ヶ敷い仕事ではあるが、著者は何を標準として本書の山を撰べるものなるか、勿論序文にある「著者の實地踏破」とか云ふことが、主要の根據であるかも知れぬが、左程でもなき山の記述されてあるに引き換へ、著名のものが省略されてあるのは何故かと思はせられる。例へば内地では富士に亞ぐ甲斐白峰の連山、東北の雄鎭飯豐山等が省略された如きはそれである。それから目次中に第三白根山、第三六白根山と白根山が二つある（草津白根は別にあり）孰れ一つは、てつきり甲斐の白峰であらうと先づ其頁を繰つて見ると、是はしたり、二つ共に日光白根で、然かも其記事が互に一致してゐない點がある。これなどは隨分亂暴無責任と驚かざるを得ない。

本文の中、最初の富士山五十頁は御免を蒙つて第二日本アルプスから處々讀んで見る。色々珍しいことが澤山ある。兎に角自分の知つてゐる範圍に就て云へば、間違の無いのは先づ餘り無いと云ふ樣な次第だから、一々それを此處に書くことの出來ぬは殘念である。左に一二を紹介するに止め

やう。

「日本北アルプスは飛驒の御嶽、乘鞍嶽、穗高山、槍ヶ嶽、常念嶽、大天井ヶ嶽、白馬嶽と云ふ七座の一萬尺以上の名山を有し、又殆んど其高度に迫れる燕嶽、笠ヶ嶽、五六嶽、鷲羽山、劍嶽等を列ね、最北には立山を擡げて日本海に沒して居る」（五二頁）。

又東駒ヶ嶽の項には「頂上に近くに從つて石灰岩のため白色に見える、故に白崩山と云ふ」（一二四頁）とある。立派な地圖に記されてある標高を無視したり、山の位置や、岩石やを取換へたりする著者の手腕に敬服するの外はない。

本書の地名の振假名は又頗る亂暴極まるもので燕嶽を「つばめだけ」、針木峠を「はりきたうげ」とせる如きは上々の方で、雄山を「をざん」、別山を「わけやま」、高遠を「かうゑん」、三峰川を「みつみねがは」、赤石を「あかし」、岩魚止の小屋を「がんぎよどめのこや」、本澤溫泉を「もとざはをんせん」とせるなど一々列擧するに暇がない。其他本文中に挿入してある地圖は不鮮明で役に立ちそうもない。それから奇妙に思はれるのは本書の表紙には石上錄之助著とあるに本文の始を見ると廣惠吉久雄と云ふ人との共著になつてゐる。何故表紙に此人の名を略したのか理由が分らない。

山のことを詳しく知り其記事を正しく書くと云ふことは實に至難の業で到底缺點無しに出來るものでないことは自分も良く知つてゐる。殊に本書の著者石上氏は「浴養遊覽海濱めぐり」と云ふ書物を著されてゐる位であるから、山海双方のオーソリチイで其忙しさも思ひやられる譯で、本書の非難をするのは或は無理な註文かも知れぬが、之を要するに本書は著者が序文に記されたのとは反對に杜撰そのものを實現した際物書物と云ふの外なきを遺憾とする。然し我邦全體に亙つて主要な山岳の案内を簡單明瞭に記述した書物は未だ出版されたことが無いから、他日著者が誠心を以て本書の訂正改版を行つたなら或は有用な書物となることが出來るであらう。自分は最後に之を著者に向つて切望する。

（辻　本）

# 雜報

## ○今年は岳に雪が少ない

種蒔爺が出た

平地の積雪多いのに引替て、爺ヶ嶽の方面頂上は、本年は積雪が少いと見える。アルプスの積雪幾十丈と云ふ溪谷を踏んで調査する事の出來ないのが甚だ遺憾であるが、老農の話によると、嶽の雪は少いと見える。爺ヶ嶽の頂上東南に面せる懸崖やはい松で形をなして、大町池田より眺望すれば丁度五月初め種蒔爺の樣に見える、此の爺の形が例年なれば彼岸後に少し計り形を顯はし初め、次第に形を作りて八十八夜頃に種蒔爺の形となりて、此の平の農民は此形を見て、苗代を作り種蒔をして來た。本年は去る十日に其の形が大に現はれたのを見ると、山上は積雪が少いと見へる。平地大町附近は稀に見る積雪で、今に積る雪が多く、例年彼岸になると大原かのこと唱へ、大町の西北約一里の大原部落の積雪が彼岸に彼處此處に散在して居る時が、普通の年として居るに引替へ、本年は池田地方の暖い土地が彼岸に彼處此處にある、雪は豐年の兆と云ふて居るが、本年の雪解けの遲れ居るには農作物はどうであるかと心配して老農が物語りたり。（大正九年三月十七日信濃毎日新聞）

## ○燒山噴煙

新潟縣西頸城郡上早川村地籍より長野縣に跨り、元噴火山なりと稱せらるゝ燒山は、近來時々噴火するとの說ありし處、去月三十一日午後一時頃絲頂の南方より白煙濛々と立ち登り居るを同村人が一同に認めたりとのことなるが、同山は約二十年以前にも噴煙せしことありと、右の談を齎して西澤長野側候所長を訪ふ。越後の西頸城郡の燒山と云ふは、本縣に跨つた山ではなくて越後の山です、能生の南妙高山の一寸西から東に當る所に在る却々高い山で、二千二百米突許あるが、本縣からは見えない。今から二十年前に噴火したか何うか知らぬが、六十八年前即ち嘉永五年には噴火した。併し熔岩を噴き出すの泥流を押出すのと云ふことはなく、噴火口が盛に出來て頻りに硫黃を噴き出した。山麓に危害を與へるやうことはなく、却て利益を與へた、硫黃が盛に出たものだから、硫黃の採取が六十箇所も出來て、四十萬貫からの硫黃を取つた、妙高山火山群の中でも最も新しい噴火山で、今でも尙ほ活動期中に在り、休火山となつては居らぬ故に、噴火せぬとも限らないが、爆發すれば長野測候所の微動計に現れる筈であらうと思ふ。併し微動計を調べて見ても何も現れて居ない。今度も水蒸氣位は噴いたかも知れないが、微動計に感ぜぬ程度のものであつたかも知れないと語つた。（大正九年二月六日信濃毎日新聞）

## ○高瀨川の水色變ず

北安曇郡の南部を貫流する高瀨川は、三十日午前十時頃より漸次藍色と化し、三十一日は一層其濃度を增したるが、原因は不明にして、土地の人の言に依れば、大町をさる高瀨川の上流十數里の

地點にある湯又、水又附近の當時噴出しつゝある湯釜が、一時に多量の湯を噴出したる結果、附近の湯花を押し流したるにあらずやと云ふものあるも、何樣同地は日本アルプスの山麓にて、目下積雪丈餘に達するところなれば、調査の途も立たず、之れが爲め同河川を用水として使用しつゝある下流大町常盤、松川の各町村は何れも困却しつゝあり、而して湯又、水又の湯釜は有名なる霰石を產する處なりと。（大正九年二月一日信濃毎日新聞）

## ○白骨溫泉震災

十八九兩日に亘る地震の震源地は、南安曇郡白骨溫泉より稍北にかけてのものらしく、積雪にて詳細は不明なれど、停ふる處によれば、白骨溫泉場の震動は甚しく、溫泉の出口も崩れたる由にて、其他白骨稻核間の崖道崩壞せりと云ふ。（大正九年五月二十一日信濃毎日新聞）

## ○有明口及奈川口の人夫賃と物價

同地所在の登山案內者組合事務所よりの通信に依れば、今年の人夫賃及物價は左の如し。

有明口。人夫料先達參圓、人夫弐圓九拾錢。米一升五拾錢。味噌百匁拾錢。草鞋一足上拾參四錢、並拾錢。牛鑵（大）五拾錢。三枚底甲掛一足壹圓八拾錢。鑵節百匁壹圓五拾錢。氷豆腐十連七拾錢。福神漬（上）四十七八錢、干鱈百匁二拾錢。蠟燭一本一錢五厘。マッチ一包拾貳錢。（大正九年六月十一日）

奈川口。一、案內人夫賃一日金參圓。但食料は雇傭客の負擔とす。其他は一切申受けず。一、登山路の便により、薮原停車場より當所（神谷區）迄及當所より野麥又は大野川區迄の案內賃は、一日金弐圓とす。一、荷物負擔重量は五貫目（規約には六貫目內外とあり）とし、より以上は一貫目を增す毎に拾錢づゝ申受く。一、宿泊料晝食附一日金壹圓五拾錢。米一升六拾五錢。草鞋一足九錢。莫蓙一枚三拾五錢。味噌百匁拾三錢。醬油一合拾錢。牛鑵一個四拾五錢。海苔鑵一個三拾二錢。（大正九年五月二十二日）

## ○登高行

慶應義塾山岳部にては、雜誌「登高行」第二年を六月二十日に發行し、廣く同好の士に頒布する由也。內容は論說に柳田國男氏の續武藏野雜話、別所梅之助氏の山のしづく其他あり、紀行に飯豐山（朝日岳（奥羽）北海道の山地旅行、白馬岳スキー登山、朝鮮金剛山等の記文あり。數多の寫眞版を添ふ。實費金壹圓送料金四錢なりといふ。

## ○會員通信

△拜啓。去る五月一日及二日に亘り左の旅行を致しました。朝七時半橫濱驛發の汽車に乘り山北で下り、河內川を溯つて中川村上ノ原より城ヶ尾峠を越えて、道志川の上流に下り、道志村字板橋へ宿泊致しました。翌日案內を賴んで御正體山へ登山し、尾根を縱走して山伏峠へ出で、平野村へ下り、山中湖畔より三國峠を越えて小山へ出で、汽車で歸濱致しました。御正體山は近年橫濱市が水道

の水源地である爲に山林を買收したので、微か乍ら切分を付けましたから、白井平から其れを辿つて頂上迄樂に上れます。尾根にも切分があつて山伏峠まで出られます。頂上附近はブナの林で、春の爲か草も生へず誠に縱走が樂で御座いましたが、山伏峠の近くは可成の藪がありました。然し此の方面も大分炭燒が入り込んで居りますからよい道をつけると思ひます。(大正九年五月四日宮川久雄)

△昨春中村清太郎君と北都留の大室山(地圖の權現山)に先鞭をつけて以來大分同山が流行の樣子に候へど未だ最高點以西を探れる人なき趣につき會員松本善二松井幹雄の兩君を唆かし又霧の旅會の幹部三名の同行を得て斷行致し候。四月十日夜終列車にて飯田町驛を發し翌朝二時猿橋着。岩殿の村を通過して葛野川を渡り月光に輝く岩殿山及百蔵山の美を賞し乍ら例の飽き〳〵する道を佐野峠に向ひ候。矢羽橋を渡りて瀨戸に到る頃より目指す山脈を眼前に仰ぎ鋸嶽と言はんよりは寧ろ虎牙と形容すべき大小の山峰に威嚇されつゝ五時半頃峠の麓に到着、朝食後一氣に五百餘米を西原峠の頂に上りつき(七時十五分)此處に大休憩。或は大菩薩連嶺のスケッチに或は三頭雲取方面の撮影に一行中々多忙。然し忙中閑を利用して砂風呂的樣臥睡眠を試むる向もあり。八時四十五分出發東南に向ひてスヽキとコナラの山背を辿り一一六六米の峰附近に到る頃西に姥子の岩峰を明に望み得候。大寺山(一二二〇米)を越えその南の鞍部にて第二回の休憩。此處に大寺澤より西原の尾名手澤に越ゆる乘越路あり。此處より南に登りて一二六〇米の尖峰に上りつき急に東南に下りて復小尖峰に上る。ヒカゲツヽジの蔭にコイハカヾミの紅葉美し。更に小尖峰を越ゆれば尾名手より駒宮に通ずる馬道あり次の峰頭は此連脈の最點にして一二八〇米を算しそれより稍平坦なる尾根路を傳ひて左側の小突點に上れば一二六八米の測點あり。是迄の數峰悉く麻生澤のセリに聳立するものにて麻生山の稱は實に之に命ぜらる可きものと考へ候然るを地質調査所の地形圖には大室山に此名を配したるは大なる見當違ひと存じ申し候。麻生山より大室權現の祠迄は道路もよく山脊も激しき起伏無之候へど木蔭と水なきには一行一方ならず閉口し辛くの思ひにて神祠に達したるは零時以後と覺え候。降路は例により て扇山に向ひて南に下り此處に水を得て蘇生の思をなし鞍部迄駈下りて小憩、それより扇山に上り其東北面より頂上に達し糧食全部を平らげ記念撮影の後鳥澤に下りて解散。小生は鳥澤に一泊翌日アナシ峠を無生野に越えそれよりオホダミ峠を越えて曾雌に出で朝日川に沿ひて井倉に達し古川渡にて縣道に出で大菩薩連嶺の兩端を正面に仰ぎながら大月に下り終列車にて歸京致し候。兩日共快晴にて寫眞には好都合なりしも小西にて求め候フイルムは大部分感光し居たる品なりし爲め辛と兩三本無事なりし丈けにてあとは悉く物にならず遺憾至極に候(武田久吉)

△拜啓。小生去る二月十一日友人と二人にて、江田島能美島の山脈を踏破致し候。午前七時半江田島小用に着し、直に坂路にかかりて古鷹山脈の第一峯に達す、曉より降雪あり眺望よからず。古鷹の連峯は樹木(大部分は松)倭小にして巨岩多し。津久茂に下り瀨戸を渡りて高田に着き、東能美山脈を縱走最高峯高田山に至る(肥土にして樹多し)この山脈に併行せる一山脈西にありて、その間

が可成り深き溪谷となり居り、十數年前までは猪、鹿等多く棲息せりとのことなり。雪止み眼界稍展け西方厳島阿多田島、黒神島等を下瞰。沖浦に下り、人の瀬より小用に戻り歸吳。(吳にて鳥生鶴吉)

△十五日夜支笏湖畔に一泊、十六日朝七時細雨中を舟便にてモラップに上陸、昨年登りしクチャウツカナイより樽前山東峯に攀ぢ、火口原の南部を半周して西峰に登り覺生空澤に下り、六時錦多布驛着、歸苦致しました。同行六人第四回目の登山です。山上には著しい異狀もありませんでしたが、火口のドームの南に横走して居る裂溝が(大正五年五月小爆發の際生成)昨年に比して幅に於て約三倍になり六・七間に迄崩れ擴がつたことでした。山上は春未だ淺く、殘雪點在し、岩間コメバツガザクラの小白花を見る丈でしたが、中腹以下の新綠と滿開のエゾヤマザクラとのモザイクは忘れ得ない印象でありました。(大正九年五月十七日苫小牧にて竹内亮)

△昨夏中途迄上りて失敗して以來私に適當なる登路を求めて名譽恢復を計らんと企て居たる瀧子山は去る四月中旬山の會の有志の先驅にて大體の樣子もわかり候へば五月十八日松本善二君の同行を得て雨を犯して終列車にて出發。十九日昧爽車中より天を窺ふに陰雲滿々として快晴の見込みなき爲め豫定を變更し大月に下車して桂川を北岸に渡り淺利川に沿ひて金山鑛泉に向ひ候。夜降雨はなかりしも濃霧激しくして水滴樹梢より滴下するといふ有樣故景色を賞する餘裕もなけれど例によつて油を賣りつゝ七時頃鑛泉に到着。旅舍二屋あるも共に汚穢なるが上に土民甚しく無愛想にて遠來の珍客を歡待するの法を知らず少からず驚きたるも實は鑛山師と見誤られたると知りては苦笑の外なく候。金山鑛泉にて休憩中天稍晴るゝの徴あり乃ち荷の大部を殘し寫眞器糧食等のみを背にして金場本澤を溯り候。然るに霧尚ほ深かりし爲め澤一つ見誤まり中右澤を前右澤と思ひ込みたる爲め終に本流發源地に上りつき中村本澤の源流石積(イシヅミ)と接する大岩壁に遂著して驚愕すると一と方ならず加ふるに濃霧尾根の上部を蔽ひて行手一向に見極めつかず猛進するの危險を慮りて引返す。今度は中右澤を上りつめ脈岡と七保との村界に出で奈良子川の一支流小澤に下りつきそれに沿ひて姥子山の中腹迄上りたれど等しく濃霧の爲めに退却往路をブラ〳〵奥山に辿り著きたる頃より雲漸らぎて日光さへ漏るゝ景氣に勇氣一倍したれど炭燒に翌日の雨天を豫言されて復も中ば悲觀しつゝ大月に出で汽車にて初狩に赴きて宿泊。二十日豫言は見事外れて快晴。六時宿を出で桂川を渡りて藤澤に入り藤澤川の一支流大澤を溯りて瀧子山の東南腹に上りつき左右の眺望を貪りつゝ九時頂上著。白峰三山より荒川蝙蝠あたりまで雲間に顔を出したるは有難けれど山麓を走る汽車の烟を見れば落膽せざるを得ず候。面白き山にはあれど深山の氣に乏しきは地勢上止み難き儀かと存じ申し候。山上の大觀を擅にすること時餘。山容を北に下り簸を推し分けて大谷ケ丸に達す時に正午。前日と異りて一滴の水さへなきには甚しく困却したれど澤に下るの勇氣もなきまゝ日除の下に横臥すると時餘輕からぬ荷を背負ひ直して山陵を北に傳ひ有名なる天下石を見姥子の岩峰を下瞰し黒岳山と腹摺とを仰ぎつゝ米背負(一七五一米)に達し候。此時雷雲柳澤峠の邊に起りて見

る〳〵大菩薩岳を包み將に小金澤山をも呑まんず勢に急遽出發して大倉高丸（一七八一米）に到りて小憩、幸雷雲收りたれば撮影の後水晶薙を俯瞰しつゝ湯の澤峠に下り大水澤と南澤との間の尾根を辿りて燒山に下り先年厄介になりし農家に宿泊して豫想外の歡待を受け五月下旬里には珍らしき炬燵に入り乍ら山ウドや蕨を食ひ匙柴の鹽漬に舌鼓を打ち候。二十一日ホトトギスやウグヒスに呼び覺され冷たき澤水に洗面して吾にかへり六時四十五分出發して燒山川の上流赤山澤を溯り湯ノ澤峠の北面に取つき終に九時茶臼の頂に到著して小憩。時に雲霧俄に來して南方の眺望意の如くならず只折々雲間より大倉の連山と左に吹切の山脈を望むのみ。茶臼の頂上より曾遊の路を黑岳山頂に辿る。今回は草木の枝葉未だ繁らざる爲め通過容易にして九時三十五分黑岳山頂一等三角點に到達し更に休憩す。黑岳山より豫ての懸案たる大峠に下りて腹擂登山を遂行せんと小徑を物色して先づ東北に下る。針葉樹林中倒本多くして多少の困難ありしも幸に人跡ありしを以て通過不可能には無之候。然し途中大倒木域ありて一時人跡絶えたる地點あれど南面を求むれば終に笹原に出づるを以て大困難なくやがて小笹起を越ゆれば甚開濶なる尾根に出で候。カラマツやアセビの新綠美しき尾根を東に下りて人跡稀なる大峠に達したるは十一時半。是程荒寥たる峠道は餘り多からぬ樣に候。正午出發して腹擂に向ふ初め數十間の間は茅戸にて西に黑岳山及茶臼赤屋を望むもやがて針葉樹林に入れば眺望少なく加之濃霧往々起りて暗憺たる光景を呈し候も倒木なく折々岩石など露出して極めて心地よき上りにて零時五十分山頂に著。山頂の東南面は茅戸にて眺望よき筈なるも例の霧の爲に數間の先を辨ずる能はず甚だ遺憾なりしも近く再遊の企盡あれば敢て憂ふるに足らず。一時十五分頂上を辭し山稜を東南に下る事一時間許にして姥子山頂に到達。例の巨岩に上り東面の小突起上に安置せる姥子社に額きて無恙の登山を謝して後大休憩。濃霧は依然として眺望なきは遺憾なりしも炎天に曝露されざるは缺を償ふに堪えたるものに候。下山は金山に出づるが捷路なれども奈良子川の溪谷を探るの意堅かりし爲め後者に決し東に引く急な尾根を下り候。此尾根は藪深く且つボウダラ甚多して不少困難致し候其記念としてボウダラ尾根の新稱を上る事と致し候へ共何とか本名あるべしと思はるゝも實際一時間半を費して四時半澤に著く、小憩十五分の後奈良子澤に沿ひて下りシロバタ附近より豪雨に逢ひ雨に烟る新綠を賞しつゝ二階谷の奇溪に鷺きサンセウ谷を渡りて矢竹に出づる頃より下界の俗臭に壓迫され殊に此峽谷住民の人間離れせるに喫驚しつゝ林に達して休憩し更に勇を奮つて夜路を猿橋迄辿りつきたるは九時五十五分にて候ひし。廿二日夜來の雨收つて一天拭ふが如し。八時半旅宿を發しブラ〳〵遊び旁々百藏に登り候山頂迄一時間半許にて充分。頂上より連日通過の山峰を望みて快哉を叫び最後のフイルム一本に四周の景を收めて後東北に下りコタラ山長尾山の長き山脊を傳ひて扇山へ西面より攀ぢ上りサユリノ澤を鳥澤に下り夕刻の汽車にて歸京致し候。今度も寫眞には先づ差支少き天氣に候ひしも現像を市ケ谷見附内の東京寫眞學院とか申すへ賴み候爲七本のフイルム大抵は滅茶〳〵にされて了ひ候には重ね〳〵落膽致し候。（武田久吉）

# 會報

## ○團體の入會に關する規定

從來學校、圖書館、寺院、會社、協會又は類似の團體が本會に入會を希望する場合には、其代表者を定め規定の通り會員三名の紹介を以て申込むこととし、幹事會に於て適當と認めたる場合には入會を許可する例なるが、右は勿論團體代表者たる個人を入會せしむるには非ずして、團體其者の入會を認むるも、事務取扱の都合上代表者名義を以て會員と同等の資格を生ずる譯なれば、名簿上に夫々代表者の肩書を附して一般の個人會員と區別し置けり。されば團體代表者は幹事選擧に際して選擧權を有するも被選擧權無之ものとす。又代表者の更迭を見たる場合には直に新舊代表者の連署を以て手數料金貳圓を添へ、其旨本會に屆出づることを要す。若し本會に於て新代表者を不適當と認むる時は、幹事會の決議を經て其團體の會員籍を削除することある可し。代表者に貸與しある會員章は代表者變更に際しては、新代表者に於て受繼く可きものとし、代表者變更屆に添へて會員章借用者名義變更屆（用紙半紙大）を差出すを要することとす。尙團體代表者に貸與しある會員章は代表者以外の佩用を許さゞるものとす。又代表者更迭と共に舊代表者は其資格を失ふものにして、若し其後個人として會員たることを欲する時は更に規則に從ひて入會を申込むことを要す。

## ○會員章の引換に就て

本會新會員章及び其引換に關しては、先に『山岳』第十四年一號一三〇頁以下及び第二號一二五頁以下に記しあれど、未だ引換の手續を了せられざる會員あり。右は至急夫々手續を履行せられざるに於ては、その權利を喪失するに至るやも計り難きにつき、至急引換又は保留の請求あらんことを望む。

## ○會費拂込みに就て

從前會費其他の金員拂込に際して振替貯金に由る時は毎回口座手數料の附加を乞ひたりしが、今回振替貯金規則改正の結果其必要を見ざるに至れるを以て、自今拂込金額以外何等の附加金を要せざるものとす。尚會費は各年度の初に於て前納す可き規定なるに不係、本年度分未納の會員あり。此際至急拂込まれざるに於ては、次號雜誌（大正九年度分）の發送を停止し、且つ會則第十八條を適用するに至る可きを以て、其旨御了承あらんことを乞ふ。

## ○第八回小集會記事

大正九年四月四日麹町區清水谷皆香園に於て高頭幹事司會者として開會、席上新著の雜誌展覽の後左の講演あり、辻村理學士病氣の爲め臨機に梅澤、松本、武田三氏の談話あり、夕刻散會したり來會者左の如し。

松井 幹雄　乾 喜六　堀 龍雄　鈴木 益三
今村巳之助　松本 善二　近藤 茂吉　高田 達也
辻本 滿丸　郷郁 三郎　井染 道夫　内藤 安城
伊藤 新三　宮本 璋　梅澤 親光　高頭仁兵衛
田部 重治　武田 久吉　木暮理太郎　他に會員以外の來會者二名。

一、牛ヶ岳のはなし　高頭仁兵衛氏

快晴の日、余が小門に立てば、前面即ち東南方に當り、田畑河川村落など一里許の距離を隔てゝ約六七百米突の低山、高津屋、鋸、鞍掛、金倉等の蜿蜒起伏し、更に其後方に、白山、粟ヶ岳、守門岳、駒ヶ岳、中ノ岳、八海山、牛ヶ岳等の千二三百米突より、二千米突以上の山岳が、七月中旬まで猶ほ殘雪を有して聳立するを見る、而して其最雄偉なるものを牛ヶ岳となす、大正七年七月、余此山に登れり、今其概略を談れば、余が宅より約半里なる新來迎寺停車場より、魚沼鐵道の一番下に乘じ、終點の小千谷町より馬車にて六日町に至り、それより徒歩二里餘にして、清水の寒村に達す、旅舍なければ、小學校の分校か、他の民家に依頼して宿泊すべし、元來牛ヶ岳とは、富士山御岳、淺間山等の如く、一個の獨立せる大山岳にあらずして、牛ヶ岳、割引山、卷機山を主とせる

群峰の一塊を、小出邊より以北の人々が、命名せるものゝ如くなるを以て、清水より單に牛ケ岳のみに登る能はざるに似たり、余は八時頃出發し、東方の梯子田に添へる山蹊を辿り、行くこと三十分許にして雪渓を見る、夫より渓水を横ぎり、又は雜木林の尾根に入り、又は雪渓を登り、最後に篠藪を分けて攀づれば、小平坦地に達す、是を割引山の絶頂となす、陸地測量部の標石あり、標高一九三〇米、時間は三時を過ぎたる如く記憶す。晴天ならば絶好の展望臺ならんも、雲深くして時々雲間に大殘雪を見るのみ、二時間餘を山巓に費して、雲の晴るゝを待ちたれども、密雲續出して小雨となりたれば、牛ケ岳と巻機山の鞍部にて、二三の小池と樹木ある所に下りて、夜營せり。翌日八時過ぎに巻機山に登る。樹木殆んど無き柴山にて、白山小櫻白山一夏など亂發せり、程なくして牛ケ岳の絶巓に達せり、巻機山頂より牛ケ岳までは、平地を行くが如く、頗る容易なり、夜營地より一時間許を要す、是日天氣晴霽、中越地方の名山の皚々たる殘雪を見る、殊に割引山の山側は純白なる數葉の大色紙大短冊を亂帖したるが如く高潔清麗譬ふるに物なし、淺間の噴煙、上毛の諸山、妙高火打の連峰など鮮に見え、所謂日本アルプスは、雲を突いて山頂のみを露して、最後の背景をなせり、下路は、夜營地より、割引山に行かずして、直に清水に下れり。牛ケ岳は標高一九六一米の高山なれども、清水を早發すれば、割引山に廻りても、一日にて容易に上下し得べし、此地方の殘雪の美觀は、日本全國中、飯豊山を除きては、他に伯仲するものなし、何れ再遊の上、案内記を雜誌に載する考へなり。清水峠は、明治の初年に巨額の資金を費して開鑿せられたれど、今は廢道となりて、茶店なく、且つ六七月頃は、殘雪道を横ぎりて、通行危險なること多し。嶺上にはセリハシホガマ多く生ず。八海山、中ノ岳、駒ケ岳の記事は、「山岳」第一年第三號に、大平晟氏の記文あり、就いて見られたし。（談話の大要同氏執筆）

二、雷雜話　　梅澤親光氏

梅澤氏は昨年夏富士山上に於て岩石、杖、指頭

等より放電の起りたる實驗談を試み聽衆の心膽を寒からしめられたり。

三、丹澤山縱走談　松本善二氏

詳細は本號所載同氏執筆の記事を見らる可し。

四、丹澤山塊一般のはなし　武田久吉氏

從來丹澤山塊と言へば概して塔ノ岳、丹澤山、毘盧ヶ岳を連ぬる山脈以外に出でざりしが、是は該山塊の一部に過ぎずして、加古坂以東駿甲相界の三國山に到る部分を初めとし、是より相駿境を走る低き山脈と、甲相境に蟠る深山と更に大群山より毘盧ヶ岳に連なる山脈及其間の鞍部犬越路より、塔ノ岳以東大山に連なる山脈並に大山の北部より佛果山、經ヶ岳、鷹取山に到る低性の山岳、さては志田山(三增峠)、城山等の古戰場を紹介され、且つ是等の山間を流るゝ世附川、中川、玄倉川、諸窪澤、神ノ川、早戸川、布川等につきて其大略を談り、同山塊の探勝を勸められたり。

## ○會務報告

大正九年四月四日麹町區清水谷皆香園に於て幹事會を開き第十三回大會講演を中村清二、藤原咲平の兩博士に依頼することに決定、又地方委員囑託に關する件を協議す。尙別項記載の會員十名の入會許可決定。

(出席幹事)木暮、高頭、武田、田部、梅澤。

## ○會員名簿の訂正及追加

前號に附錄として會員全部に頒ちたる名簿には不少誤植有之たると、右印行後移轉又は改名を通知されたる會員ありたれば、次に訂正の箇所を揭ぐることゝせり。

山下町七　Messrs. W.M. Strachan & Co.

大正九年七月發行

ツーリスト　第八年第三號
みづほ　第百八十二、三、四號
京都帝國大學一覽　自大正八年至大正九年
地質調査所報告　第七十六號
（歐文圖書は英文附錄に掲載せり）

## ○本會規則抜萃（大正八年六月改正）

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアル可シ
第五條　本會ハ會長ヲ置カズ幹事若干名ヲ置キ、一切ノ會務ヲ處理セシム
第六條　本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム
第十條　本會々員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ本會幹事ノ推薦ニヨルモノトス
第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名年齡及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一人ハ評議員タルヲ要ス、（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）
第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス
第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マル可シ
第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ前納ス可キモノトス（以下略）

## ○交換及び寄贈圖書

地學雜誌　第三百七十六、七、八號
歷史地理　第三十五卷四、五、六號

現任幹事（七名）

木暮理太郎　中村清太郎　高野鷹蔵　高頭仁兵高　武田久吉
田部重治　梅澤親光

評議員（十四名）

城數馬（在朝鮮）　小島久太（在桑港）　近藤茂吉　三枝守博
辻本満丸　辻村伊助（在瑞西）　山川默及ビ現任幹事七名

## ○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと

一、用紙は大體半紙大又は半紙半枚大、天地左右をあけ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと

一、〽「」（）等は各一字劃宛とし行を更むる時は一字下げのこと

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと

一、原稿は必ず左記宛て送附のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三十一木暮方「山岳」編輯所

尚編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等のある原稿は其の調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり、又原稿は一切返戻せず。

## 第十回小集會豫告

來らん**九月十二日**（第二日曜日）午后一時より麹町區清水谷皆香園（電九段八三八）に於て木暮幹事司會者として開會す可し。當日講演左の如し。

大菩薩連嶺　武田久吉氏

利根川水源地旅行談　木暮理太郎氏

會員外の來會者は會員の紹介を要す。

大正九年七月十七日印刷
大正九年七月二十日發行

著作權所有

〔定價金壹圓〕

新潟縣三島郡深才村深澤
發行兼編輯者　高頭仁兵衛

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

東京市麹町區富士見町四丁目六番地
發行所　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

## SUBSCRIPTION FOR 1920.

The members in arrears are requested to send their subsciption for the current year at their earliest convenience. As provided for in the Club Rules the Annual Subscription, of Yen 3, is payable in advance on the 1st of January in each year. Those who are in arrears are warned that they will not receive the next number of the Club Journal and that it will lead to expulsion from the Club.

## MEMBERS EXPELLED.

Mrs. G. E. Denham. P. Hagen.

## THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the Japanese Part of the current number are:—

The Northern Foot of Ôdaigaharasan, the Source of the Yoshinogawa, By Mr. K. Miyata.

The Valley of the Kurobe in Autumn, by Mr. H. Hirose.

About Meteorological Phenomena in Elevated Regions, By Dr. S. Fujiwara.

Mountains in the Neighbourhood of Sendai, By Mr. T. Numai.

Our Ridge-walking on the Tanzawa Range via Yakesaa, By Mr. Z. Matsumoto.

Komagatake in Aidzu, By Mr. E. Tozawa.

## PLATES IN THE JAPANESE PART.

Facing Page.

(290) Ushiishigahara on the summit of Ôdaigaharayama.
Nakanotaki Fall in the same mountain.
Masakigahara on the summit of the same mountain.
From the late Mr. Kimoto's "Yoshino Gumpô."

(330) View of the crator from the top of Kattadake.
Omaëdake in May, viewed from Byôbu.
Midzuhikinyûdô viewed from Sainokawara, Omaëdake.
All By Mr. J. Hada.

(354) Hiuchigatake from Komagatake in Aidzu.
Hiuchigatake, Ôtsumatatôge, and Keidzurusan(?) from the same mountain, but still higher up.
Part of Komagatake from half way up the same mountain.
All by Mr. M. Watanabe.

| | |
|---|---|
| Alpina, 28. Jahrg., Nr. 2. | Zürich, 1920. |
| Club Alpino Italiano, Rivista Mensile, Vol. XXXVIII, Num. 12, Vol. XXXIX, Num. 1-2-3. | Torino, 1919-'20. |
| Bolletino della Sezione Fiorentina del C. A. I., Vol. XI, Num. 1, 2-3. | Firenze, 1920. |
| Revue Alpine, Vol. XXI. No. 1. | Lyon, 1920. |
| Echo des Alps, 56me. Ann., No. 3-4. | Genève, 1920. |
| Terre d'Algerie, 11e. Ann., No. 4-6. | Alger, 1920. |

The following publications have been presented to the Club Library :—

| | |
|---|---|
| T. M. C. Guide of White Mountains (Boston, 1917.) | By S. Imamura, Esq. |
| John Ball—Peaks, Passes, and Glaciers (London, 1859). | By Rev. W. Weston. |
| John Muir—The Mountains of California (New York, 1894). | Do. |
| G. F. Browne—Ice-Caves of France and Switzerland (London, 1865). | Do. |
| F. F. Roget—Ski-Runs in the High Alps (London, 1913). | Do. |
| Catalogue of Books in the Library of the Alpine Club (London, 1899). | Do. |
| Bell Goat—Inaka. Vol. XII. | By H. E. Daunt, Esq. |
| Sierra Club Bulletin, Vol. X, No. 3 (San Francisco, 1918) | By C. A. Hultin, Esq. |
| Appalachia, Vol. XIV, Nos. 1, 3, 4 (Boston, 1916,-'19). | Do. |

## THE EIGHTH ORDINARY MEETING.

The Eighth Ordinary Meeting was held at the Kaikôen, Shimidzudani, Kôjimachi-ku, Tôkyô, on April 4th, 1920, presided by Mr. N. Takatô. The following lectures were given :—

On Ushigatake .....Mr. N. Takatô.
About the Electric Discharges occurred on Mt. Fuji .....Prof. C. Umezawa.
Ascent of the Tanzawa Mountains.....Mr. Z. Matsumoto.
About the Peaks and Streams in the Tanzawa Group .....Dr. H. Takeda.

Nineteen members and two guests were present.

had never before been attempted or accomplished by any climbers, but "all's well that ends well."

Shortly after the Bell Goat had got back to Kobe via the Fujikawa Rapids and the Tokaido line be received a letter from the Hajimete Goat, the opening lines of which were:—

"First of all I should like to thank you for teaching me the ways of the Mountain Goat."

But this is a case where the shoe was on the other foot, as all the thanks due were from the B. G. for if ever a man "played the game" in the way of looking after a sick comrade the Hajimete Goat played it on "The Kaigane of Shirane-san."

---

## CLUB LIBRARY.

The following publications have been added to the Club Library since April 1920:—

| | |
|---|---|
| Alpine Club of Canada, Constitution and List of Members, 1920. | Sidney, 1920. |
| Bulletin of the American Game Protective Association, Vol. IX, Nos. 1 & 2. | New York, 1920. |
| American Museum Journal, Vol. XVIII, Nos. 2–8. | New York, 1919. |
| Natural History, Vol XIX, Nos. 1–6, Vol. XX, No. 1. | New York, 1919–'20 |
| Mountaineer Bulletin, Vol. X, Nos. 1–6. | Seattle, 1920. |
| Prairie Club Bulletin, Nos. 94–96. | Chicago, 1920. |
| Trail and Timberline, Nos. 18–20. | Denver, 1920. |
| Colorado Mountain Club, Local Walks and Short Outings, 1920. | Denver, 1920. |
| Field and Forest, Nov.—Dec., 1919, Jan.—Feb., 1920, Mar.—Apr, 1920. | Boston, 1910–'20. |
| Field and Forest Club, Year Book, 1920. | Boston, 1920. |
| Mid-Pacific Magazine, Vol. XIX, Nos. 5–6. | Honolulu, 1920. |
| Bird-Lore, Vol. XXII, No. 2. | New York, 1920. |
| Colorado Chautauqua Bulletin, Vol. VIII, No. 8, Vol. IX, Nos. 4–5. | Boulder, 1920. |
| Sierra Club Bullenin, Vol. XI, No. 1. | San Francisco, 1920. |
| Alpine Journal, Vol. XXXIII, No. 220. | London, 1920. |
| Geographical Journal, Vol. LV, Nos. 3–5. | London, 1920. |
| Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. XV, No. 89. | Edinburgh, 1920. |

started off early the following morning with another to fetch assistance and try and secure some rice. This was the Bell Goat's initial experience of "mountain sickness," but it appeared that the effects of rarefied air on the body had little to do with his case, though two of the usual symptoms, viz:—lassitude amounting to an utter incapacity for the slightest exertion and inability to eat or drink were very much in evidence. What hit him harder than anything else was the fact that he was keeping the party back. However towards evening the weather began to clear, and the two goriki came back to camp with a plentiful supply of rice accompanied by the three Fukazawa brothers and one of the Shimidzu clan, all of Ahiyasu-mura. As they appeared one by one through the thick mist a great weight was lifted off the minds of the party of "marooned" mountaineers. The H. G. said he knew what ship-wrecked sailors felt like when they were being saved by an ocean liner after being out on the open sea on a raft for several days. The advent of the rescue party must have had a beneficial effect on the B. G. as next morning he was able to get up and drink some tea. Altho' very "groggy on his pins" and still suffering from dizzines he managed to make a start arm in arm with two of the Fukazawas, and after half an hour or so he got back his "mountain-legs," and was able to proceed without assistance.

The going was made comparatively easy by the goriki chopping a path through the heavy jungle. The speed at which these men travelled over the rough descent was something marvellous, and when the stream which we were following had to be crossed this occuring at several places two of them would wade into the water and hold a log across the tops of large boulders, across which the "lame duck" would be carefully piloted. At 11 A. M. we reached the Kitagawa and a halt was called for tiffin and a much needed rest. The sun made a very welcome appearance, the tent and everything being spread out to dry. It was in this storm which was now completely over that three students from the Imperial University in Tokyo, and a teacher lost their lives on a mountain called Hafu from starvation and exposure. The Kitagawa at this stopping place was rushing through a canyon of enormous rocks with deafening noise, and on the far side of the stream the bank went up in a piece of vertical rock for over a hundred feet. Shortly after leaving this point and after a steep descent the Ara-kawa itself was reached. From now on the valley broadened out, and the going become much easier. The lumber camp at Aisashi was reached at 4 P. M. after a hard day of 11½ hours.

The descending of Kaigane to the Arakawa, I venture to state,

bance of some magnitude was in progress, but luckily we were on the right side of the mountain as far as the wind was concerned. On the ridge itself it must have been raging with the force of a typhoon. For this reason we had to abandon our original programme of traversing the ridges of Shirane and taking Ainotake and Nodori on the way down to Narada and Nishiyama Onsen. A goriki was sent up to the landslide for the rope which had been hanging out all night. As he had to come down through the haimatsu some delay took place before we could make a start for lower regions. We then started on what was practically a voyage of discovery, in other words we had to drop down the mountain side to the Ara-kawa in a bee line or as the crow flies, trusting to luck to get out of what appeared to be what is known as a very tight comer. In sheets of pouring rain we passed the creeping pine belt to long bamboo grass which latter we found very slippery going indeed. The gradient was exceedingly steep, but some stunted oak and alder trees came in very useful as their branches gave us something to hold on to at times. After a very trying and difficult descent of some four hours we struck a small tributary of the Ara-kawa rapidly being swollen by the torrents of rain. The carriers stopped at this point, and lit a fire to boil some rice. This fire was the undoing of the Bell Goat. After a good substantial meal, being wet through to the skin, he went to the fire to warm himself, but unfortunately some of the thick green smoke got up his nose and "gassed" him. There is no doubt that he must have been in excellent physical condition to have climbed Kaigane in bad weather, and the fact that he had just eaten a good tiffin showed that there could not have been much wrong with him. However he reeled away from the fire as if he had been hit with a club, complaining of giddiness and inability to stand or walk. His eyes immediately became terribly bloodshot, and everything he looked at seemed to be the colour of crimson. The whole mountain side appeared to be spinning round and round like an enormous Catherine Wheel. In fact to put the matter in plain words he was "down and out." The place where this happened was no place for a camp being on a bare ridge or strip of rock like an island with a raging torrent on each side. However as he could not go a yard, there was nothing for it but to pitch the tent and get him into dry clothes and between the blankets. Here he lay for practically for forty-four hours without moving or being able to eat. The rest of the party spent an anxious time huddled together under a large rock more especially as food was running short. However one of our goriki knew of a logging-camp further down on the Kitagawa, a tributary of the Ara-kawa, and he

This was piling Ossa on Pelion with a vengeance as the wind was freshening and the rain falling in earnest. But as it turned out he was quite right, in other words by no means a false prophet.

The peak of Kaigane after a stiff climb was finally scaled at 3. 10 P. M. The official height of this mountrin as given on the Ordnance maps is 3192.4 metres, or 10,473.9 ft. The B. G.'s aneroid baroneter made by Negretti & Zambra however registered 11,100 ft., so it will thus be seen the weather was remarkably bad, and everything pointed to its getting worse. No views except those of the rock walls on the ridge itself could be obtained. Verily and truly our luck appeared to be dead out. All haste was made to reach the proposed camping place about a mile further on, and 1500 ft. below on the south side.

Crossing a dangerous strip of wet rocks one of the carriers fell and rolled over three times. His heavy load consisting of the cauvas tent now thoroughly sodden by the rain proved a veritable blessing in disguise, as the weight kept him from rolling any further. Another turn or two and he would have rolled over the edge, and undoubtedly passed into the next world as the incline was so steep nothing could have stopped him dropping several hundred feet. This was a place where the rope should have been out. The rocks were very wet and slippery and great caution had to be exercised. It was certainly a case of climbing under difficulties. Then came a check. The mist became thicker than ever, and the guide stopped where the ridge forked, one branch going S. E. and the other S. W. as we did not know which one to take. Fortunately after a disconsolate kind of wait for a few minutes the mist lifted sufficiently for the guide to pick up his bearings, after which we took the lefthand ridge down which we proceeded with much care as there was considerable danger of a bad fall. We soon reached the point where we turned off for the camping place, and dropped down some 1000 ft. to a large belt of creeping pine. On the way down we had to have the rope out the help negotiate a steep landslide, the haimatsu on each side making the alternative descent extremely slow and difficult. The tent was pitched with some trouble as no flat ground could be found. Cooking was a laborious process over a spirit lamp, the camp fire giving out more smoke than anything else. The guide and the carriers must have spent a wretched night huddled round it. Heavy rain fell all night, and streams of water ran underneath the tent.

At the first streak of dawn the next day everyone was glad to get afoot; but it was still raining hard with the wind blowing in sharp gusts. It was very evident that an atmospherical distur-

and killed a duck-deer near the pool, and that after gralloching the carcase he washed it in the water, and then threw the viscera into the middle of the mere itself. Contrary to all expectation the dragon was so incensed by this insult to his Lares et Penates that he turned on a typhoon which raged for several days. The heavy rainfall accompanying the storm caused the water in the river to rise to an extraordinary degree; and when the hunter, who had waited patiently on the bank of the stream for a considerable time waiting for the weather to clear, tried to cross he was washed away and drowned. So, he was mo shimai."

The moral of this story can therefore be plainly seen. It does not pay to offend the susceptiblity of a dragon.

After getting above the tree zone a thick belt of sopping wet bamboo grass had to be waded through. Everyone got exceedingly wet. To make matters worse a cloud of buyo—a small brown fly with an obnoxious bite—bore down on us, and made things very unpleasant for the foreign contingent. These flies seem to be very partial to white skins. However we pushed on in the rain and mist hoping for better luck higher up. Passing through the creeping pine country we reached the main ridge of Kaigane, the altitude where we joined it being estimated at 9200 ft. A cold wind was now blowing in fitful gusts which made climbing at such a height anything but pleasant. The ridge itself consists of a series of rock walls with sharp drops in places of several hundred feet. We therefore in view of the slippery state of the rocks had to take extra care in order to prevent accidents. Whilst stopping for an ippuku near the peak itself a Japanese climber with two carriers loomed out of the mist, and passed us on their way down to the Noro-kawa and Ashiyasu.

A little further along the ridge the earthly remains of a dead wildcat in quite an advanced stage of decomposition were found by the guide. The Bell Goat who was close behind him noticed that he stopped suddenly, and after examining the yama-neko carefully his face turned ashen gray. Then the rest of the party came up and he explained that this same goriki had seen the same dead cat exactly in the same place ten days previously. The H. G. who speaks the vernacular even better than many natives themselves remarked that after all it was not such a strange thing to happen seeing that defunct felines could not walk, fly, or run after they had lost their nine lives, which this one apparently had done. "Oh!!" said the guide, "Can't they? I myself threw this cat down the side of the mountain the other day, and he fell a long way, very long way indeed, and now he is back here again. I tell you I do not like the look of it at all. It means very bad luck indeed."

anxious to supplement the commissariat department with a supply of fresh fish. The Noro-kawa—the slow running river—hereabouts is reputed to be well stocked with iwana, a delicious pink-fleshed kind of salmon-trout. So the order went out:—"A day off." Climbing in bad weather is not very pleasant, and as the peak of Kaigane lay a good nine hours away and above the camp. we did the right thing by laying "doggo" for the day. Sad to relate not a single fish came to the baskets, altho' the anglers fished warily for several hours. This "bad joss" was partly accounted for by the fact that during the recent nyubai or rainy season, a freshet had practically cleared the Noro-kawa of everything with fins in it; and seeing that the water itself in this particular stream is remarkably slow moving the iwana preferred to remain in the lower reaches where the river is known as the Haya-kawa—the fast running river—after the confluence of the Noro-kawa and the Arakawa. It drizzled with rain all that day and a thick mist hung over the valley like a wet blanket. The following morning after a pouring wet night the weather cleared, and an early start was made soon after six o'clock. Fleecy white clouds were floating overhead beneath a blue sky. Everything pointed to a further spell of fine weather. The height above sea level at our camp on the Noro-kawa registered 5600 ft. Before reaching the Okamba gorge where the route—very little semblance of a path or track—leaves the river bank we had to cross the stream three times. For some hundred feet we had a steep climb on rocks up the Okamba gorge. Unfortunately the Hajimete Goat—another foreign member of the party—jumping from one large boulder to another slipped and fell cutting the forefinger of his right hand badly on a sharp stone. However he being somewhat of a philosopher took the matter very calmly though it must have been exceedingly painful. From the rocks we took to a steep spur of the mountain side, and climbed through the trees to a deserted wood-cutter's hut. Height at this point 6000 ft. The weather now began to turn for the bad. Mist came down over the mountain tops and it would have been a wise plan to have returned to the river. However we pushed on after a long ippuku with the carriers wondering what we had done to offend the Dragon of Kaigane.

This is the B. G.'s varsion of the legend as it appeared in Inaka:—

"Halfway up to the top of the mountain from the Noro-kawa near the track usually taken by climbers there is a large tarn in the forest which is the lair of an enormous Kirin or dragon of a particularly revengeful nature. The unsophisticated natives living near the mountain thoroughly believe in the existence of this demon of the air, and it is told of a certain hunter who shot

The greatest interest in our proposed expedition to Kaigane appeared to be shown, and a guide and some carriers were obtained for us with very little delay. The Shimidzu-Ya in those days had not been opened. There being no hotels in any of the four hamlets -Furuyashiki, Kozori, Ozori and Kutsuzawa- which go to make up the mountain village of Ashiyasu-mura, we took refuge in the house of an old resident where every attention was shown us. It must be recorded that your real inaka-mono for courtesy and plain unaffected hospitality is very hard to beat. The master of the house was considerably over the alloted span of three score years and ten, but at the same time it must be stated that we found him as lively as the proverbial cricket. He told us that his family had lived in that house for many generations before him, and that he himself had made most of his money by selling fine pieces of wood for ceilings and toko-no-ma from the forests of Shirane to Tokyo timber merchants.

The next morning with a velvety blue sky overhead we climbed the Tsuetate-toge whilst the hot sunbeams beat mercilessly on our backs. It was with some relief that a halt was called for by the side of a moss-covered wooden shrine near the top for a second breakfast at 9.30 A. M. The barometer here measured 6000 ft. On the other side of the prth some few yards down the steep side of the slope amongst the trees there is a beautiful spring of clear mountain water. The top of the toge itself was reached at 10.30 A. M. just five hours from the village. From here we obtained a fine view of the three peaks of Shirane, and a little further on up the path we turned and saw the majestic cone of Fuji-San towering above the foothills. These were two magnificent mountain pictures, and will worth the energy, time, and expense. The descent to the Noro-kawa was extremely rough, the track petering out in many places. In one it ran through a plantation of raspberry canes, much bamboo jungle, numerous rotten logs, and slippery moss-covered rocks and stones made the going fairly hard. On a descent of this sort the motto must be "Festina lente"—hasten slowly. The river was reached at 6 P. M. and as our camping place for the night—*Shirasawa-no-ishigoya*—lay about a mile upstream we made good time up the banks fording the river twice. Rain began to fall which interfered somewhat with cooking the dinner, but there was an enormous supply of drift wood, so a very large camp fire was soon burning and crackling with cheerful effect. The next day no one appeared to be partcularly anxious to proceed on account of the weather, as rain was falling in a steady drizzle; and moreover the carriers had had a very hard day the day before.

Then again some "fishermen" in the party were extremely

Kaigane-san." Another account entitled "On the Ridges of Shirane" appeared last summer in the Japan Advertiser, and Rev. W. H. M. Walton, who was accompanied on this occasion by the Rev. W. H. Elwin, and another keen foreign mountaineer from Tokyo. In the publication known as "Inaka" Vol. V. there will be found a graphic sketch by the Editor—the "Bell Goat"—of his climbing of Kitadake, and as the writer of these lines was with him on the memorable trek, of which he has many vivid recollections, he can not do better than put down here another version of the story as set forth by the B. G. in his interesting narrative.

Our party had come down to Kofu from the North having climbed Ariake-san, Tsubakurodake, and Otenjo from Nakabusa Onsen. Making a col of the Mountain of Heaven we had walked down the picturesque valley of the Adzusagawa to the famous Onsen of Kami Kochi, where we had a delicious (sic) rest of two days being fed by mine host like fighting cocks on fresh trout, apricots and Kirin beer. It was during out stay there that we saw Kamonji for the last time at his hunting box on the edge of Myo-Jin-Ike.

Lakelet green and gold where the brown trout swim!!
And Kamonji's hut smoked black and sticky:
'Tis the silent toast we may drink to him,
Lovely Myo-jin-ike!!

Yes, Kamonji, the most famous guide in the Japanese climbing world, has ever known, has gone to his last home, and we will never see his like again.

At Kofu we put up at the Danro-Kan, but it must be stated we had very hazy ideas of how to get to the foot of Shirane-San. We knew we had to get to Ashiyasu-mura, but the people in the hotel knew no more than we did about the way to get there. However, with the aid of a good map and a couple of intelligent ricsha men and a basha for the baggage we duly arrived at Arino about 11 A.M. on July 26*th* 1916. The day was a piping hot one, about as hot as any salamander could wish for.

Now the Kofu plain in the dog days is a very good place to get away from, and it is quite true that the more I see of some places the more I like the Yama, for "toil and danger are sweet to recall." In spite of mountaineering being a sport or a pastime-call it what you like-which demands and calls for ceaseless and unremitting attention we were all keen to leave the sunbaked plain "for fresh fields and pastures new." At Arino quite a large village we got a diminutive pack horse to take our impedimenta to Ashiyasu, at which latter place we were politely received at the local police station and then guided to the village Yakuba.

# SCRAMBLES IN THE SOUTHERN JAPANESE ALPS.

*Part III:—The Kaigane of Shirane-san.*

BY

"BLUE DRAGON-FLY."

THE system including *Shirane* is a large section of the Southern Japanese Alps. This great mountain mass, not to be confused or compared with or spoken of in the same breath as the Nikko Shirane and the Shirane of Kusatsu, can boast of three fine peaks on its main ridge. The highest of these is 10,473·9 ft. now generally known and marked on maps as Kitadake, but formerly called Kaigane. The other two are Ainotake (10,463·4 ft.) and Nodori (9966 ft.). On this last named in the month of May when the winter snows are melting away from the mountain tops there remains for some little time a small snow slope close to the crest in the shape of a bird resembling a swan. It is by this sign that the farmer living on the flats below on the Kofu plain knows that it is time for him to start his agricultural operations. In the vicinity of Kofu the cultivator calls the planting of rice in the autumn "noh-o-suru" (to do husbandry) viz:—"noh"=husbandry "tori"=bird, and "san"=mountain. From this unexplained phenomenon of the "snow bird" this peak takes its name. Ainotake, very rarely called Nakanotake, is so-called because it is situated between the other two peaks of the range. Thus Shirane san is more or less a general term for this part of the great-mountain chains that divide the valleys of the Fujikawa and Oigawa; this as a whole rather than for the three peaks, alone, which latter are usually called Shirane-sanzan, or the three peaks of Shirane. Kaigane is a very ancient name, and in early Japanese literature it is frequently mentioned—the literal meaning being:—"the mountain of Kai." According to a book entitled "The Japanese Alps" by Mr. Kojima Usui Kitadake is also known in literal pronunciation as Shiramine, and sometimes as Shirane-no-Hondake, the principal peak of Shirane—the White Mountain.

This and so much for nomenclature.

That intrepid pioneer the Rev. Walter Weston, it is believed, was the first foreigner to climb Kaigane, and he wrote a very full description of his expedition which appeared in the Japan Weekly Mail of Nov. 1*st* 1902 under the title of "The Ascent of

# NIPPON SANGAKU KWAI.

(THE JAPANESE ALPINE CLUB.)

Fujimichô IV: 6, Kôjimachi-ku, Tôkyô.

Postal Transfer Account: No. 4829 Tôkyô.

List of the Officers (Honorary).

Elected Nov. 26th, 1919.

**General Secretaries.**

N. Takatô, Esq. Dr. H. Takeda.

**Recording Secretary & Treasurer.**

Prof. C. Umezawa.

**Librarian.**

T. Takano, Esq.

**Editors.**

R. Kogure, Esq. S. Nakamura, Esq. Prof. J. Tanabe.

**Council.**

| | | |
|---|---|---|
| Hon. K. Jô. | M. Saigusa, Esq. | Dr. M. Tsujimoto. |
| R. Kogure, Esq. | T. Takano, Esq. | I. Tsujimura, Esq. |
| K. Kojima, Esq. | N. Takatô, Esq. | Prof. C. Umezawa. |
| S. Kondô, Esq. | Dr. H. Takeda. | S. Yamakawa, Esq. |
| S. Nakamura, Esq. | Prof. J. Tanabe. | |

The object of the Club being promotion and diffusion of the knowledge of mountains, and everything concerning mountains, it always welcomes to its membership those anxious to further this object by their interest and support.

An applicant for admission into the Club must be proposed and seconded by three of the members, one of whom must be a Member of the Council, and it is necessary that he should fill up an official form with particulars of ascents made or nature of the work accomplished by himself, and send it in to the Club. The admission will be decided at a Meeting of the Officers.

Members are required, on their admission into the Club, to pay Yen 5 as entrance fee, and Yen 3 as subscription for the current year, and thereafter an annual subscription of Yen 3, payable in advance on the 1st of January in each year. Payments to the Club are to be made through Postal Transfer Account or by P.O.O. Neither cash nor cheques are accepted.

Members are entitled to receive the Club's Periodical Publications. They may also attend the Ordinary Meetings of the Club and have access to the books and maps in the Club Library.

Every member shall receive a Club Badge on loan, which must be returned, on his resignation of membership.

Members who are away more than twelve months may, at their request, apply to be registered as "Absent Members" on payment of Yen 2 for fee. Absent Members may keep Club Badge; need not pay subscription; shall not get any of the Club's Publications; are not privileged to be present at any of the Club's Meetings; nor are they entitled to vote. When returned they should pay the arrears for the period of absence, and then shall receive the Club's Publications issued during their absence. In case their absence be prolonged more than three years, they have to resign membership, and return the Club Badge. If, however, they wish to rejoin the Club hereafter, they have the privilege of being admitted through an introduction by a Member of the Council only.

All communications should be addressed to the General Secretary. Enquiries equiring a reply should enclose return postage.

# SANGAKU

Vol. XIV | July 1920 | No. 3

(English Supplement)

## CONTENTS

PAGE

SCRAMBLES IN THE SOUTHERN JAPANESE ALPS, III—"BLUE DRAGON-FLY" . . . . . 1

CLUB LIBRARY . . . . . 9

THE EIGHTH ORDINARY MEETING. . . . . 10

SUBSCRIPTION FOR 1920. . . . . 11

MEMBERS EXPELLED. . . . . 11

THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL . . . . . 11

PLATES IN THE JAPANESE PART . . . . . 11

Tôkyô
Nippon Sangaku Kwai

The Journal of the Japanese Alpine Club

# SANGAKU

Vol. XIV 1920 No. 3